



VOL.119 NO.12 CONTENTS

窓●市町村立図書館と共に歩む都道府県立図書館 ————— 小林隆志 716

こらむ図書館の自由●
レファレンスと人権保護 ————— 天谷真彦 719

●NEWS ————— 717
告知板 … 718／新聞切抜帳 … 720

* * *

[特集] アラカルト 学校図書館のこれからを考える

戦う米国の学校図書館員－禁書問題と学校図書館員の動向 ——— 井上靖代 721

朝の読書のこれから－形骸化からの脱出 ————— 押木和子 724

ヤングアダルトにとっての「読書体験」と「居場所」－日本子どもの本研究会
「ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会」8月ハイブリッド拡大定例会
から考える ————— 岩井路加 727

情報教育の場としての学校図書館－高校情報科の教材として、そして
子どもたちの居場所として ————— 中園長新 730

学校図書館ではじめる探究活動－学校司書をパートナーに ——— 浅見和寿 732

「対話」から始まる学校図書館づくり－茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター
————— 溝口 南・大西恵美・濱真由美 734

各種調査から見る学校司書の実態 ————— 高橋恵美子 738

* * *

[小特集] IFLAアスタナ大会レポート

国際的な図書館界はいま－IFLAアスタナ大会 ————— 三浦太郎 742

IFLAアスタナ大会参加記 ————— 鎌田 均 746

ポスターセッション発表のプロセス ————— 松本直樹 747

WLIC2025カザフスタン「Local History and Genealogy Section (地域史、
系図学会部会)」活動報告 ————— 長谷川幸代 748

●編集委員会

〈委員長〉

松本哲郎 (市原市立中央図書館)

〈委員〉

青柳英治 (明治大学文学部)

岩永知子 (相模原市議会局)

宇野亮一 (国立国会図書館)

中村保彦 (元文教大学図書館)

長谷川優子 (元埼玉県立図書館)

宮原柔太郎 (日本体育大学図書館)

米山 薫 (多摩市立図書館)

鷺山香織 (福井県立図書館)

*

●事務局スタッフ

秦 秀文・川下美佐子・星川智隆

●今月の表紙

東京都立図書館所蔵

「小供風俗 たけうま」(部分)

宮川春汀画

1897 (明治30) 年

〈東京都立中央図書館 TOKYO アーカイブ〉



- 小規模図書館奮戦記●その322／阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター資料室
震災の経験と記憶を、資料を通じて伝える ――― 福岡純之 749
- 霞が関だより●第265回
読書バリアフリーのはじめ方-令和6年度活動報告 ――― 文部科学省 750
- 図書館で実践！SDGs●第12回／オーテピア高知図書館
オーテピア高知図書館とSDGs-地域と未来につながる図書館活動
――― 八田裕子 752
- れふあれんす三題噺●連載その三百二十五／東京学芸大学附属国際中等教育学校
総合メディアセンターの巻
多様性を認め合う空間へ-東京学芸大学附属国際中等教育学校
――― 渡邊有理子 754
- ウチの図書館お宝紹介！●第254回／小平市中央図書館
平櫛田中文庫-好奇心あふれる彫刻家の本棚 ――― 柴田朋彦 756
- 図書館員のおすすめ本●¹⁰⁰
時が止まった部屋 ――― 関矢麻由美 758
サブカルチャーのころ ――― 西川美羽 758
広島平和記念資料館は問いかける ――― 岩岡朗子 759
僕には鳥の言葉がわかる ――― 草野太陽 759
- 図書館員の本棚●
これからの図書館情報学 ――― 田村俊作 760
学校図書館を活用した楽しい読書ワーク ――― 高橋和加 761
* * *
- *The Library Journal, December 2025*
Special feature: An à la Carte Selection of Articles about the Future of School Libraries
U.S. school librarians battle book bans and other issues (INOUE Yasuyo) 721
Reading in the morning – Escaping rigid formality (OSHIKI Kazuko) 724
Reading experiences and places to belong for young adults – The Young Adults & Art Books Study Group of the Japan Association for the Study of Child Literature Thoughts from the August hybrid expanded regular meeting (IWAI Ruka) 727
Information education at school libraries – Libraries as both a teaching tool for high school information studies and as a place for students to belong (NAKAZONO Nagayoshi) 730
Inquiry-based activities starting in school libraries – School librarians as partners (ASAMI Kazutoshi) 732
Building a school library starting with dialogue – Chino Municipal Eimei Elementary and Junior High School media center (MIZOGUCHI Minami) 734
What survey results tell us about school librarians (TAKAHASHI Emiko) 738
Special feature: Reports on the 89th IFLA General Conference in Astana 742-748
- 編集手帳 ――― 774
事務局カレンダー 774
- 公益社団法人日本図書館協会
2025年度理事会議事録
* 2025年度通算第3回 (定時第3回)
理事会議事録 762
- 2025年度通算第3回 (定時第3回)
理事会配付資料 ――― 772
- *「新館紹介」「協会通信」は休載させていただきます。
- 図書館雑誌1月号予告 ――― 772
- 発行者
公益社団法人日本図書館協会©2025
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 (03)3523-0811 (代表)
直通 (03)3523-0816 (編集部)
FAX (03)3523-0841 (代表)
日図協ホームページURL
<https://www.jla.or.jp>
〈JLA メールマガジン申込先アドレス〉
mailmaga@jla.or.jp
- *本文は中性紙 (冷水抽出 pH8.1) を使用



市町村立図書館と共に歩む都道府県立図書館

●
小林隆志

今年で図書館勤務が二十六年目になりました。なんとこのうちの十四年間は支援協力課に所属し、市町村立図書館、学校図書館等との連携・協働等を担当させていただきました。この間、私自身がずっと考えてきたのは、都道府県立図書館（以下、県立図書館と記載）の役割は何かということですが、具体的な内容については文字数の関係で割愛しますが、やっと言葉にできるようになってきたと思っています。

県立図書館の職員としては日々の仕事を通して市町村立図書館の活動を支え、共に歩んでいるつもりなのですが、市町村立図書館の側からは、県立図書館の活動は本当のところどう見えているのでしょうか。全国の図書館の方々と情報交換をしていると、市町村立図書館の職員の皆さんから、「うちの県立図書館は無くてもいいかも」とか、「うちの県立図書館はもっと頑張って欲しいな」など、県立図書館の職員としてドキっとする言葉を耳にすることがあります。まあ、どこまで頑張っても一〇〇点の取組というものはないのだから、我が館ももっともっと頑張らないといけないかと素直に思います。

ただ、この時だけは最高にうれしい気持ちになります。それは、市町村立図書館の何周年などのお祝いの席に呼んでいただいた時です。市町村立図書館がその歩みを、その地域に存在する価値を、住民の皆さんと再確認してお祝いする場に、忘れることなく県立図書館にも声をかけていただき、一緒にお祝いの輪に加えていただくなんて、最高です。

昨年は、日野町図書館の開館三〇周年をお祝いするイベントに支援協力課長と共に参加させていただきました。二人でこれからの図書館のことについて対談してきました。町内にある鳥取県立日野高等学校の卒業生がお祝いの神楽を舞い、お祝いのお菓子が振る舞われる中での対談です。今年はこの号が発行される頃は開催後ですが）ちえの森ちづ図書館の開館五周年記念の行事にお声掛けいただき、再び支援協力課長と共に対談してきました。これからもいろんな図書館に呼んでいただき、良い時間が過ごせるよう市町村立図書館等との関係性を大切にしていきたいと思っています。

（こばやし たかし／鳥取県立図書館）

NEWS

第111回全国図書館大会愛媛大会 「図書館が 彩る未来 伊予路から」開催

10月30日～31日、愛媛県松山市の愛媛県民文化会館、松山市総合コミュニティセンター等で第111回全国図書館大会愛媛大会が行われた。地元大会実行委員会の多大な尽力により、成功の裡に終了した。

30日の全体会では、中村時広愛媛県知事、植松貞夫日本図書館協会理事長、野志克仁松山市長（代理・田淵雄一郎副市長）の挨拶、倉田敬子国立国会図書館長の祝辞の後、第41回日本図書館協会建築賞の表彰が行われた。受賞館は学習院大学図書館。続いて、第15期認定司書の認定証交付式も行われ、第15期認定司書の小池ひろみ氏（松山市立図書館）、下越吹か

おる氏（指宿市立指宿図書館）、萩原大介氏（名張市立図書館）が登壇し、代表で小池氏に植松理事長より認定証が授与された。

その後、植松理事長による基調報告が行われ、続いて、記念講演は「読むこと 書くこと 生きるということ」として、四国八十八ヶ所霊場第57番札所栄福寺の住職である白川密成氏、作家・作詞家である高橋久美子氏、ショートショート作家である田丸雅智氏が登壇、元公共図書館司書の岡田有利子氏がコーディネーターとして、トークセッションが行われた。

2日目の31日は、松山市総合コ

ミュニティセンター等複数の会場で、10の分科会が開催された（別途、録画配信にて2分科会を開催）。分科会終了後、「日本図書館協会会員の集い in 愛媛」が開催され、「図書館人としての学びを考える」をテーマとして意見交換などが行われた。



▲全体会場の愛媛県民文化会館

▶2026年度第112回全国図書館大会は石川県で開催

2026年度第112回全国図書館大会は、石川県で開催いたします。ぜひご参加ください。

テーマ：図書館が希望をつなぐ～学びと再生の地・石川から～

主催：日本図書館協会、石川県、金沢市、石川県図書館協会ほか

期日：2026年11月19日（木）～20日（金）

会場：石川県立音楽堂（金沢駅前）ほか

▶「10代がえらぶ海外文学大賞」受賞作発表

第1回「10代がえらぶ海外文学大賞」の受賞作が発表された。7月に発表されたノミネート作品7作から、9月に10代による投票で受賞作が決定し、10月31日に発表された。11月12日には神保町の出版クラブで授賞式が行われた。受賞作は以下の通り。

大賞：『ソリアを森へ』（チャン・グエン作 ジート・ズーン絵 杉田七重：訳 鈴木出版）

特別賞：『闇に願いを』（クリスティーナ・スーン・トーンヴァット作

こだまともこ・辻村万実訳 静山社）

<https://10daikaigaibungaku.wixsite.com/home>

なるかわひろこ
（鳴川浩子：玉川聖学院司書教諭）

▶日本図書館協会研修事業 2025年度中堅職員ステップアップ研修(2)終了・修了者について

図書館勤務経験7年以上の司書（補）を対象とした「中堅職員ステップアップ研修(2)」を2025年7月7日から10月15日までの12日間にわたって実施した。新型コロナウイルス感染症の広がりを受けて2021年度からは全24科目をオンライン（Zoom）による研修で行ってきたが、今年度は6年ぶりに4科目を対面で実施した。受講生は全科目が11名、領域単位が11名、そのうちの17名がこの研修のすべての課程を修了した。今後の活躍を期待したい。

2026年度もオンライン（20科目）と対面（4科目）で実施する。日程については検討中であり、決定次第本誌およびメールマガジン等で告知する。<2025年度修了者>

荒木夏実、池田美智子、伊藤生、大木由香、栗田怜史、桑原久美、児玉

匡史、小林はつき、島田佳代子、清水炎、鈴木紅美、武生恵子、中嶋浩平、林田理恵、福森千明、水井千保子、吉田珠美

▶第56回「博報賞」、浜松市立蒲小学校図書館の実践事例が受賞

公益財団法人博報堂教育財団は、第56回「博報賞」の受賞者を決定し、10月10日に発表した。「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、博報堂教育財団創立とともに作られた。「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」そんな想いを核として、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」を顕彰している。

第56回「博報賞」では、浜松市立蒲小学校の教頭・磯部真代氏が「つながる学校～社会に開かれた学びの実現へ～」として学校図書館の実践事例を報告し、博報賞・文部科学大臣賞を受賞した。審査講評では、人手不足等で厳しい学校図書館の状況のなかで、「学校図書館を知的交流の拠点としてよみがえらせ、子ども・教職員・地域の人々が学び憩い集う

場にする活動には、大きな価値がある。」と評された。

「第56回（2025年度）「博報賞」受賞者決定」：<https://kyodonewsprwire.jp/release/202509306247>

2025年度第56回「博報賞」受賞者一覧：https://www.hakuhodofoundation.or.jp/news/pdf/hakuhosho_56th_list.pdf

▶宮城県図書館、近隣にクマ出没で臨時休館

宮城県図書館（仙台市）が臨時休館を発表した。図書館近隣でクマが出没しており、利用者の安全確保等の観点から、2025年11月7日午後3時から11月9日まで臨時休館した。また、その後、「クマ被害防止に向けた安全対策について」として、2025年11月11日（火）から2025年12月14日（日）まで、すべての開館日について、閉館時間を午後5時まで縮小している。

クマの出没に伴う臨時休館のお知らせ（終了）：<https://www.library.pref.miyagi.jp/latest/news/closed/2503-2018-closing-time-change-7.html>

クマ被害防止に向けた安全対策について：<https://www.library.pref.miyagi.jp/latest/news/2510-2025-11-11-07-46-24.html>

告知板

●つどい

■資料保存委員会・見学会「脱酸性化処理の現場を訪ねるーキハラ・プリザベーション株式会社ー」

日時：2026年1月19日（月）14:30-16:00

会場：キハラ・プリザベーション株式会社（埼玉県さいたま市桜区栄和1-3-15）

内容：脱酸性化処理は酸性紙の資料の劣化を遅らせる方策の一つです。国内で非水性の脱酸性化処理

を大規模に行っているキハラ・プリザベーション株式会社を訪れ、大量脱酸の行程を見学します。

参加費：無料

対象：図書館や公文書館、資料館等に勤務している方（常勤・非常勤は問わない）

定員：20名

申込方法：E-mailにて、件名を「0119見学会申込」とし、①氏名（ふりがな）、②所属（勤務先を必ずご記入ください）、③電話番号（緊急連絡先）を明記の上、下記の申込・問合せ先までお申し込みください。

申込開始：1月6日（火）12:00より
受付開始（先着順）

申込・問合せ先：日本図書館協会資料保存委員会事務局・川下 E-mail：kawashita@jla.or.jp

※@jla.or.jpからのメールが受信できるように設定をお願いします。

■日本図書館協会「図書館基礎講座」in九州（鳥栖）

第14回「図書館基礎講座in九州」を、佐賀県鳥栖市で開催します。図書館の理念や社会的役割など、公共図書館の現場に役立つ基礎知識を学びます。雇用のかたちや仕事の内容、経験年数などを問わず、図書館で働くみなさんのための講座です。会計年度任用職員、派遣職員、委託職員、指定管理者職員、図書館に関心のある市民のみなさんも、よりよい図書館づくりのため、どうぞご参加ください。

主催：公益社団法人日本図書館協会・図書館基礎講座in九州実行委員会（非正規雇用職員に関する委員会図書館基礎講座小委員会）

日時：2026年1月19日（月）10:00-16:15・2月2日（月）10:00-16:40

会場：鳥栖市立図書館 視聴覚室

内容：1月19日＝講座1「図書館の自由」（山口真也：沖縄国際大学）、講座2「出版流通と資料選択」（末次健太郎：伊万里市教育委員会）、地域限定講座1「公共図書館のス

ペースづくり「みんなの森」（仮題）（大木優子：佐賀県立図書館）／2月2日＝講座3「図書館の基礎」（下川和彦：福岡女子短期大学）、講座4「現代の図書館の動向」（永利和則：福岡女子短期大学）、特別講座「『図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議』について（仮題）」（植村八潮：専修大学、日本図書館協会常務理事）、地域限定講座2「小郡市学校図書館支援センターの実践（仮題）」（中野文、野中紀子：小郡市学校図書館支援センター）

定員：両日とも50名（先着順）

資料費：1科目500円（地域限定講座および特別講座は無料。資料費は当日会場受付でお支払いください）

申込方法：下記申込フォームにて送信。1科目から受講可

<https://forms.gle/kTNc6mijSB7C8nc9>

受付期間：12月20日から1月15日まで。定員に達し次第締切

問合せ先：図書館基礎講座in九州実行委員会 E-mail：jla41saga@gmail.com Facebook：<https://www.facebook.com/kisokozakyusyu/>

■第36回保存フォーラム

国立国会図書館は第36回保存フォーラム「紙資料の修理・修復の基礎－保存の理念と事例から学ぶ－」を2025年12月4日に開催しました。

内容：基調報告「近現代紙資料の保存と修復」（金山正子：元・元興寺文化財研究所研究員）、事例報告1「国立公文書館における資料の修復」（阿久津智広：国立公文書館業務課課長補佐（保存担当））、事例報告2「国立国会図書館における紙資料の修理・修復－和装本保存係の業務を中心に－」（正保五月：国立国会図書館収集書誌部資料保存課和装本保存係長）、意見交換・質疑応答

対象：図書館員等で資料保存に関心

◆◆ NEWS ◆◆

のある方

録画配信：当日収録した動画（約120分。意見交換・質疑応答部分は除く。）を、YouTubeの国立国会図書館公式チャンネルに2025年12月11日（予定）から2026年3月31日まで掲載します。

詳細：国立国会図書館ホームページをご覧ください。

ホーム>イベント・展示会>第36回保存フォーラム

<https://www.ndl.go.jp/jp/event/events/preservationforum36.html>

問合先：国立国会図書館収集書誌部資料保存課 ☎03-3506-5219（直通） E-mail：honzonka@ndl.go.jp

■2025年度健康情報委員会研修会

以下のとおり研修会を開催いたします。申込方法や詳細はJLAウェブサイト健康情報委員会のページをご覧ください。

日時：2026年1月19日（月）13:00-16:30（予定）

開催方法・定員：オンライン（Zoom）100名

内容：事例報告＝1 東京都立中央図書館、2 塩尻市立図書館、3 岐阜県立看護大学図書館／パネルディスカッション

健康情報委員会 HP：https://www.jla.or.jp/committees/kenko/

■「倫理綱領講演会」開催します

2026年2月14日（土・午後）開催

主催：図書館の自由委員会

会場：日本図書館協会研修室＋オンライン

会費：会員550円、一般1100円

詳細：JLA ホームページへ

●その他

◆JMLA 認定資格「ヘルスサイエンス情報専門員」第45回申請

受付期間：2026年1月1日（木）～31日（土）

はじめて申請される方へ：日本医学図書館協会会員以外の方も申請できる／司書資格のない方はご相談

こらむ 図書館の 自由

レファレンスと人権保護

天谷真彦

すべての資料は原則的に自由な利用に供されるべきである。やむをえず提供制限を行う場合、図書館が公平かつ主体的に決定し、理由を公表することが必要である。『「図書館の自由に関する宣言 1979年改訂」解説 第3版』p.34では、一部の古地図や行政資料も差別的な意図をもって利用すれば、特定個人の人権侵害につながるため、提供制限の対象となり得るとしている。事実、公刊された古地図等の取り扱い、地域によって異なる。人権侵害に関わる問題については、当事者の意見を聞きながら判断することが必要である。

最高裁は2014年、滋賀県が作成した「同和対策地域総合センター要覧」等の情報公開請求を巡る訴訟で、「地区の居住者や出身者等に対する差別意識を増幅して種々の社会的な場面や事柄における差別行為を助長するおそれ」があるとして、非公開を支持した。

2016年施行の「部落差別の解消の推進に関する法律」において、地方公共団体は「地域の実情に応じた施策を講ずる」責務があると規定されている。滋賀県では、「同和地区の照会」は差別につながるとして、公立図書館を含む行政の職員は地区の有無や地区名を絶対に伝えないことが徹底されている

しかし時には巧みな照会もあるとされ、図書館においては、レファレンスを装った問い合わせもあり得るとの指摘がある。レファレンスは図書館の基本的業務であるが、こうした場合には的確な判断と対応が必要である。

2018年に法務省人権擁護局調査救済課長名で出された「インターネット上の同和地区に関する識別情報の摘示事案の件及び処理について」では、削除要請の例外として「学術、研究等の正当な目的」かつ「個別具体的な事情の下で、当該情報の摘示方法等に人権侵害のおそれが認め難い場合」をあげている。レファレンス協同データベースに掲載された被差別部落に関する事例は、この観点に基づくものと推察する。

「図書館員は常に資料を知ることにつとめ（「図書館員の倫理綱領」第5）」なければならない。知る自由を広め、すべての国民の基本的人権を守るためには、制限資料を含めた図書館資料を知ることが不可欠である。制限理由を職員一人一人が把握し住民にしっかりと説明できることが、図書館への信頼をまもり、ひいては自由な資料提供につながると思われる。

（あまたに まさひこ：JLA 図書館の自由委員会、守山市立図書館）

を／日本医学図書館協会指定の研修会への参加が必要／規定の実務経験が必要／基礎資格のみ申請できる／基礎資格は永年有効
第35回申請で中級・上級を取得された方へ：今回の第45回申請が更新の期限となる。

問合先：NPO 法人日本医学図書館協会中央事務局（〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-10 和田ビル3階 FAX.03-5577-4510
E-mail：jmlajimu@sirius.ocn.ne.jp
詳細：https://jmla1927.org/healthscience.php

新聞切抜帳

●全国

▶図書館を中高生の「居場所」に安心して読書や調べ物に活用 ゲームや相談の場にも [八王子市中央図書館・中央大学、認定NPO法人「カタリバ」・杉並区立宮前図書館]

(読売9/17)

▶読書推進支援を拡充 文[部]科[学]省 地域の協議会増やす [滋賀県愛荘町、釧路市教育委員会など9団体：文部科学省の指定を受けて読書を通じたまちづくりを推進]

(読売10/18夕、関連1紙)

▶[読書推進月間]絵本の魅力世代超え 本社[全国]世論調査 読み聞かせ「してもらった」49% 「本もっと読みたい」横ばい72% 好きな作家 東野圭吾V11 書店と図書館「連携を」69% 質問と回答 (読売10/25)

●北海道・東北

▶「ゆるゆる人生質問」が人気 図書館職員の回答書籍化 北海道斜里町 [[図書館のゆるゆる人生質問箱]] (自治日報10/20)

●関東

▶南葵音楽図書館100年の調べ 開館記念 来月2、3日上野でコンサート (読売9/29)

●甲信越・北陸

▶「まちなか+ (ぶらす)」歓喜の開館 妙高市複合施設 本・人・まちつながり創出 笑顔あふれるセレモニー [図書館など]

(上越タイムス10/5、関連1紙)

▶江戸の暮らし本で学ぼう [山梨県立図書館「べらぼう」にちなみ展示 [[江戸時代ヘタタイムスリップ!]] (読売9/13)

▶図書館に町民ギャラリー[[みんなのギャラリー]] [山梨県身延町]

作品展示「楽しんで」

(山梨日日<峡南>9/25)

▶摩擦の実験に興味津々 [箕輪町図書館が科学のおはなし会[[ガリレオ工房科学のおはなし会]] [長野県] (みのわ9/10)

▶図書館カード集めよう! 開館15周年 11月3日まで 市内9館 めざせ全館制覇 [塩尻市立図書館] (市民タイムス<塩尻>9/19)

▶赤色の本棚染める [大桑]村図書館が企画展示 [長野県] (市民タイムス<木曽>9/27)

●東海

▶海外移民の歴史見て聞いて 美濃加茂[市東図書館] パネルや日本ルーツの品展示 元[JICA]海外協力隊員きょう講演 (中日<可茂>10/18)

●関西

▶大人と子ども一緒に読書を 児童コーナーに「おやお棚」 高砂市立図書館 (神戸<東播>8/30)

▶高校生が図書館業務を体験 [兵庫]県立図書館で3校[伊丹北高校、神戸高塚高校、芦屋国際中等教育学校]の4人 独自企画の展示も (神戸<明石>9/2)

▶キッカケ文庫で「私の一冊」を 図書館バス、[兵庫]県ゆかりの著名人「おすすすめ本」満載 あすから各地巡回 [[兵庫 旅するキッカケ文庫]] (神戸<ひょうご総合>9/19)

▶市図書館の本、定価購入を訴え 経営維持へ町の書店が請願 実質値引きの現状改善を [明石市 兵庫県書店商業組合第4支部] (神戸<明石>9/23、関連1紙)

▶江戸時代の明石を探る 水路「林崎掘割」の新発見文書、柿本神社の絵図… 神[戸学]院大[学]ポー[ト]アイ[ランド]図書館 文学・歴史資料21点を展示 [神戸学院大学地域研究センター協力] (神戸<明石>9/28)

▶矢野[健太郎]さん、持ち家で不登校生ら支援 外に出るきっかけの場

に ピアノや卓球台、漫画…自由に利用 木曜は「みんなの図書室」の日 [神戸市「いこいの広場3丁目」] (神戸<神戸>9/29)

▶[RE 動き出す街]新垂水図書館オープン 蔵書12万冊、屋上庭園も [神戸市] (神戸<神戸>10/3)

▶27年夏ごろ開業見込み 入札やり直した西明石地域交流センター[icotto] 19日、活用へ意見聞く集い [明石市] (神戸<明石>10/8)

▶明石型生船「ふね」遺産認定 乗組員の仕事や生活紹介 あかし市民図書館、25日に講座 (神戸<明石>10/11)

●中国・四国

▶那賀川・羽ノ浦図書館の運用 市民の意見阿南市調査 年度内に取りまとめ (徳島9/11)

▶図書館のまち推進室 阿南市が来月新設 年度内に構想案策定 (徳島9/25)

▶[総局・支局レポート]阿南市「図書館のまち構想」「見切り発車」感否めず 見えぬ中身 市民不安 (徳島9/28)

▶昭和100年 当時の流行書籍で [徳島]県立図書館で企画展 (徳島9/30)

▶[徳島]県立図書館 バストセラ本2年超待ち 本年度の資料費全国31位 予算限られ人気本購入は1冊 寄贈呼びかけ (徳島10/2)

●九州・沖縄

▶あなたが選ぶ絵本大賞 in ちくご「バスが来ましたよ」受賞 絵を担当・松本[春野]さん12月講演 [筑後市立図書館] (読売10/21、関連2紙)

今月も石井一郎様、鎌田梨奈様、馬場俊司様、松野高德様および山梨県立図書館、県立長野図書館、筑後市立図書館の皆様より記事の提供を受けました。ありがとうございました。

特集★アラカルト 学校図書館のこれからを考える

戦う米国の学校図書館員

——禁書問題と学校図書館員の動向——

井上靖代

◆学校図書館での禁書・焚書

アメリカ図書館協会 (ALA) によれば、2024年にクレームがついた事例で最も多いのは公共図書館 (55%) で、次に学校図書館 (38%)・学校 (5%) となっている。図書や漫画本 (Graphic Novel と呼ばれる) とした所蔵資料に対して (76%) 以外に、言葉によるハラスメント (6%) や展示内容 (6%)・集会行事 (3%) と続き、図書館の閉館をせまる要求や財政削減、なかには図書館爆破予告まであるという (3%)。

『絵本戦争』(堂本かおる著、太田出版、2025) が出版されたが、著者の絵本出版に関する印象記といった色合いが強く、近年のトランプ大統領選出関連を理由付けしている点など誤解があるかと思われる。米国ペンクラブ (P.E.N.) の調査 (PEN America Index of School Book Bans 2024-2025) では、焚書・禁書対象となっている図書群のうち61%がヤングアダルト向け図書であり、絵本は6%にすぎない。この10年間に米国でも子どもや10代の人口割合は19.31%から17.32%と減少しているが、それでも日本の12.9%から11.65%に比べ多いほうである (World Bank 調査)。したがって、図書購買市場では、この世代、特にヤングアダルト向け出版が盛んである。

1980年あたりから社会問題をテーマとする小説

(Problem Novels) の出版が増加し、人種問題や性に関する作品やLGBTQ+, そして結末に救いが無いディストピア小説群など、テーマは多様化してきている。こういった社会問題や家族問題、人間関係などを描く作品群にはトランプ政権以前からクレームがついてきた。これらの事例については、拙文「子どもの読書と読む自由-外国での事例-」(『子どもの権利と読む自由』(図書館と自由 第13集) 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会編 日本図書館協会、1994、p.168-184) で、30年前から事例を報告してきたので読んでほしい。

P.E.N.の調査では、特に学校・学級、それに学校図書館をターゲットにしたクレーム事例をリストアップしている。数は多くないと言えども、クレームがついた絵本群は、半分近くがジェームズ欽定訳聖書 (原理キリスト教信者から誤った内容として非難されている) やノアの箱舟の話やイースター (復活祭) の話など旧約聖書、さらに聖書の伝道書を絵本化したものである。さらに、『侍女の物語』(マーガレット・アトウッド著) や『異邦人』(アルベール・カミュ著) を Graphic Novel (マンガ) 化した作品にクレームが来ている。あるいはアイルランドで同性婚が合法化したことを受けて製作された『ボビーおじさんの結婚式 (Uncle Bobby's Wedding)』が含まれるなどLGBTQ+ 関連も少ないながら含

まれている。

禁書を定めている州法（日本での青少年保護育成条例で有害図書を決めるのと同様の州法）は、2025年時点でサウス・カロライナ州、テネシー州、ユタ州である。ABCニュースは、2025年1月29日にトランプ氏が署名した大統領令 Ending Radical Indoctrination in K-12 Schooling などを受けたものではないかと指摘している。この大統領令では人種や差別問題、トランスジェンダーについて幼稚園（Kindergarten（5歳））から12年生（高校2～3年生にあたる）に学校で教えないことを求めている。DEI（多様性・公平性・包括性）に反する流れとなり、DEI 関連資料を図書館で選択・収集することを非合法化しようとする動きとして、これら3州での“禁書”州法成立となっている。ほかにも世界中にある米軍基地付属学校の教材や学校図書館所蔵資料の排斥などにも影響が及んでいる。

◆学校図書館員の雇用地位

では、こういった禁書・禁書の攻撃をうける米国の学校図書館、そして、そこで働く学校図書館員（学校司書 qualified Media Specialist, 司書教諭 Teacher-librarian, アルバイト aid や associate）はどのような状況にあるのだろうか。米国では、州が学校教育をにない、法律やガイドラインなどを定めている。最新の情報を確認しようとしたが、執筆時点で2025年度のつなぎ予算が成立せず、それに関連してか、多くの州教育委員会のサイトにたどりつけなかった。が、学校司書や司書教諭養成を行う大学・大学院がすべての州に設置されていないので、25年ほど前の学校図書館員の資格取得条件であっても現時点では大きく変化していないかと思われる。変化したのは各州での学校図書館設置や基準、学校図書館員の配置に関しての州法や州の教育政策のほうである。こちらは2021年の調査（Requirements for School Librarian Employment: A State-by-State Summary, March 7, 2021）で確認した。調査確

認項目として、(1)学校図書館の設置の法的根拠の有無 (2)学校図書館設置運営基準の有無 (3)財政根拠の有無 (4)学校図書館員配置 (5)学校図書館員の資格認定条件 (6)州ごとの禁書・禁書事例数である。州法として学校図書館が義務設置され、有資格の学校司書ないしは司書教諭が配置されていれば、クレームがきても対応できるのではないかと推定したからである。

字数に制限があるので、すべての州について細かく報告できないが、50州のうち、学校図書館の設置について法的根拠のある州は10州あり、さらに義務ではないが学校図書館設置に関する州法があるのは20州ある。うち19州では学校図書館設置運営基準も設けており、なかには児童生徒数により何名の専門職学校司書を配置しなければならないかまで定めている州もある。しかし、ほかの20州では学校図書館設置すら求めている。

28州では学校司書ないしは司書教諭を配置すると定めている。ただ、高校だけとか、中学高校のみといったところが多い。たとえ州法や基準があっても、小学校には学校図書館がなく、資格をもつ学校司書が配置されていない。学校図書館員の資格認定として、50州のうち、45州では基本条件として教員免許を有していることを求めている。さらに20州では修士号を有していることも学校図書館員として認定する条件としている。米国の図書館界では館種を問わず、専門職司書は図書館情報学など修士号を有しているのが必須条件であり、教育者も修士号以上を求める州が多いためかと思われる。あわせて Plaxis や州独自の試験など資格認定試験合格を求めたり、大学（院）で特定科目を受講、あるいは実務経験が2年以上あるなど、追加条件が州により多いところもあれば、教員資格さえあればよいとする州もある。条件が厳しい州はアーカンソー州やケンタッキー州、オレゴン州、サウスカロライナ州、メリーランド州、マサチューセッツ州といったところであるが、その学

校図書館員養成や学校図書館設置運営にかかる財政の裏付けは図書館サービス技術法 (Library Service and Technology Act (LSTA, 2018)) にもとづくものであり、その実務はIMLS (博物館・図書館局) からの補助金交付である。連邦政府機関が2025年10月段階で停止している状況を鑑みると、これらの州での財政の裏付けはかなり困難なものになるかと思われる。

ほかにも、Every Library Institute というNPOが調査し公表しているデータがある。これによると、メイン州、ヴァージニア州、ジョージア州の3州以外では、学校司書勤務者に教員免許保持を要求している。つまり、日本でいう司書教諭であり、司書資格のみの学校司書は配置対象になっていないのである。州法あるいは教育規則 (条例) で、学校司書の配置を求めているのは10州のみであり、義務配置として求めているが望ましいとしている州は13州あるとしている。残念なのは、こちらの調査は調査時期や校種が不明確であり、概観できるが信頼性に乏しい点である。この団体はモデルを示して、“望ましい学校図書館州法”の策定をめざしているようである。学校図書館の現状把握のみならず、州単位あるいは学区単位での禁書・焚書の動向も事例収集し公開しているため、連動しての調査かと思われる。

◆戦う学校図書館員たち

と、ここまで調査してきたのだが、学校や学級、学校図書館に対する焚書・禁書の攻撃は学校図書館設置運営や学校図書館員の配置とは関係なく起こっていると思われる。P.E.Nの学校等での焚書事例調査によると、最多はフロリダ州で、次いでテキサス州、ユタ州、ミズーリ州、サウスカロライナ州、ノースカロライナ州、ヴァージニア州、ウィスコンシン州、オレゴン州と続いていく。同じタイトルの本が複数の学校や学区で問題化しているため事例数が増加していく。南部や中西部

の州における学校や学校図書館での事例がめだつ。資料に対するクレームは資料排斥を止めようとする学校図書館員への攻撃へと拡大していく。10月はALAなどによる焚書週間 banned books week (2025年10月5-11日) であるが、関連して米国や英国各地で、米国製作の『The Librarians』というドキュメンタリー映画が巡回上映されている。起こった事例を実際の動画記録を編集したものである。公務員といえども米国では終身雇用待遇で雇用されているのは、大規模大学図書館館長などがほとんどで、学校図書館員は契約である。所蔵資料排斥に抗した学校図書館員は、複数の人数が契約解除になっているという。

『知的自由マニュアル第10版』の編集者であるマーティン・ガーナー氏 (アーモスト大学図書館長) によれば、まず、図書館の活動方針や州の図書館活動方針を見直し、管理職の研修をおこない、支持してくれるコミュニティを確立し、政治家へのロビー活動を行い、図書館員同士の情報交換やネットワークを形成していくことが必要であるという。学校図書館では、特に、従事しているのは一人ないしは少人数であることが多く、できるだけ州全体で学校図書館員の活動団体を形成して協力していくこと、これは日本と事情は同じではないだろうか。

(いのうえ やすよ: 獨協大学)

[NDC10: 0101

BSH: 1. 図書館の自由 2. 学校図書館-アメリカ合衆国]

朝の読書のこれから

——形骸化からの脱出——

押木和子

1. はじめに

筆者は、『朝の読書が奇跡を生んだ』（船橋学園読書教育研究会 1993 高文研）に出会い、1998年より朝の読書を始め、2000年より朝の読書実践研究会に入り、会誌『はるか』の発行に関わってきた。

2001（平成13）年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行されたが、学校で取り組まねばならない活動が増えるたびに朝の読書は後回しにされる傾向があった。またコロナ禍以後、朝の読書の時間が見直され、「生徒に時間を返す」という名のもとに廃止されることも増えていると聞く。朝の読書の形骸化の状況については、飯田一史氏が「危機に立つ「朝の読書」…じつは年間「数千万冊」もの読書体験が失われている」¹⁾に詳しく書いている。

本稿は始められて30年以上が経過した「朝の読書」が学校で行われる意義と、学校図書館と「朝の読書」の関わり方を再考するものである。

2. 朝の読書の歴史

朝の読書は1988年に船橋学園女子高等学校（現東葉高等学校）で林公氏が提唱し、大塚笑子氏の実践によって開始された。始業前の10分から15分に児童・生徒が持参した本をみんなで読むだけのシンプルな活動である²⁾。

林氏は、放課後の教室で机に「馬鹿野郎死んでしまえ」と書かれた落書きを見て「何とかこの子どもたちを元気にしたい、生きる力を育てたい」という思いから、大塚氏は履歴書に何も書くことができない生徒たちを目の前にして何かしなければという思いから始めたという³⁾。

朝の読書には「みんなでやる。毎日やる。好きな本でよい。ただ読むだけ。」という四原則がある。林氏は、マクラッケン夫妻の「黙読の時間」四原則を参考にした。ここには、毎日継続して生きる力をつけ、教師も子どもと一緒に読み、子ども自身に本を選ばせ、「何かのため」の読書から解放するというメッセージがある⁴⁾。「朝の読書」がもたらした第一の効果として林氏は「学校のなかに静寂と集中の時間が確保できるようになったこと」を挙げている⁵⁾。

その実践が1996年に菊池寛賞を受賞し、朝の読書全国縦断交流会が始まり、全国の学校に朝の読書が広まっていく。1996年には全国で100校だった実施校が⁶⁾、2002年には10,000校に達した。2017年の27,500校をピークに緩やかに実施校数が減少し、コロナ禍を経て2025（令和7）年5月現在の実施校は25,522校⁶⁾である。

3. 朝の読書導入の困難

朝の読書の導入を困難にするものは第1に時間の確保の難しさであり、第2に全教職員の理解を得ることの難しさである。

まず、朝の読書の10分間を確保するために多くの学校が、始業前の10分を設定している。しかし教師がこの時間に児童・生徒にやらせたいことはたくさんあるのだ。部活動の朝練習、ドリル学習、プログラミング、英語学習などだ。飯田氏が前述の記事で指摘しているように近年、朝の読書を毎日実施している学校が減っているが、その理由もここにある。四原則の「毎日やる」の実施は困難になっている。

次に全教職員の理解を得ることの難しさだが、これは読書に対する考えが人によって大きく異なることによる。小説を読むことを重視する人もいれば、新書や専門書を読む探究的な読書を求める人もいる。漫画や図鑑を読むことを読書だと認めない人もいる。そもそも読書は個人的な活動であり、学校で一斉に行うものではないと考える人もいる。特に朝の読書導入の妨げになるのが「読書は強制するものでない」という考えだ。このような意見を持つ教員は30年以上前の船橋学園女子高等学校にもいた。大塚氏はそれに対して次のように言う。

その「強制」は、私からみれば、「教える」ということなんです。すると読書は「教える」もんじゃないと言われるかもしれませんが、何の抵抗もなく自由に本が読める人はいいですよ。しかし、読めない、本の探し方もわからないという生徒たちに、自由にしとくから早く本が読めるようになれ、と言ってもダメなんです。

(『朝の読書が奇跡を生んだ』p97)

4. 朝の読書の形骸化

ようやく朝の読書を導入したとしても、朝の読

書の時間に子どもが読書をしない、読んだふりをしていている子が多いといったような批判の声が聞かれる。

こうした状況を生むのは一方で朝の読書の放任であり、一方で朝の読書の過干渉である。朝の読書の放任では教師が教室で児童・生徒と一緒に読んでいない。四原則の「みんなでやる」が守られていないのだ。だから読書の価値や楽しみが伝わっていない。読む本を選べない児童・生徒に、大人が本を紹介したり、相談にのったりしていない。これでは読書から遠ざかってしまう。

朝の読書の過干渉では四原則の「好きな本でよい」と「ただ読むだけ」が守られていない。読む本を指定したり、読書の記録を書かせたり、本の要約を書かせたりする。

四原則の「好きな本でよい」は、読書の質的な向上を求めなくなると批判されることが多い。浜本純逸氏が『白熱！「中学読書プロジェクト」』（2016 学事出版）の序文で指摘している。また、笹倉剛氏も『「岩波少年文庫」のビブリオトークー子どもの本の質が未来を変える』（2016 あいり出版）の中で、子どもが図鑑や漫画的な本、教科書、ルールブックまで読んでいることを挙げ「好きな本でよい」という原則を批判する。

これに対して、朝の読書実践研究会の中西英代氏は『朝の読書実践ガイドブック』（1997 林公メディアパル p60-62）の林氏の「好きな本」を選べるようにした実際的な手順を引用して、反論している⁷⁾。

根本彰氏は別の視点から朝の読書の形骸化を指摘する。本を読む機会が与えられればよいという考え方では読書習慣の育成につながるかどうか怪しいという。実際、小中学校の「読書量」が増えなくても高校生、大学生、大人の読書につながっていないことを問題視している⁸⁾。

5. 朝の読書に期待できること

北里大学の猪原敬介氏がXで「Building a Stronger Case for Independent Reading at School」⁹⁾という論文の紹介をしていた。学校での10～15分の自由読書の介入効果のメタ分析をしたところ、語認識と読書態度にプラスの効果があり、読解には効果がないという結果が出たそうだ。同様の活動である朝の読書にも、読解力を向上させるという効果はないが、読書態度をポジティブなものにするという効果はあると言える。読書を「好きになる」内発的動機づけを重視しているからだ。ならば私たち大人は、朝の読書を心地よい、楽しい経験にするための工夫をすべきだろう。

6. 学校図書館の関わり

これまで見てきた朝の読書の形骸化を解消し、効果を発揮するために期待できるのが学校図書館との連携であろう。「朝の読書」が成功している学校の多くは、学校司書が関わっている。

『学校司書のための学校図書館サービス論』（学校図書館問題研究会編 樹村房 2021）では、朝の学校図書館開館や学級への貸し出し、学校司書による読書案内の時間を設けるなどの支援を提案している。やはり読書の価値や、発達段階に応じた多様な本の存在や、楽しい読み方を示せるのは読書センターである学校図書館だ。学校司書は朝の読書に悩む教員に協力できるだろう。

『学校図書館は何ができるのか？その可能性に迫る－小・中・高等学校の学校司書3人の仕事から学ぶ』（門脇久美子ほか 国土社 2014）には、朝の読書のときに「読みの苦手」な児童に個別支援をしている学校司書の対応が紹介されている。

2023年に「第16回高橋松之助記念「朝の読書大賞」優秀賞を受賞した宮城県松山高等学校は学校図書館を中心に朝の読書を進めている¹⁾¹⁰⁾。入学前に保護者や入学生に朝の読書のオリエンテーションをし、大場真紀司書は生徒が読みたくなるよう

な、読みやすくして薄い本を中心に学級文庫の用意している。教員の声がけて朝の読書をベースにステップアップした全校一斉ミニブリオバトルや、「松高生の推し本」展示などの活動も始まった。

このように学校図書館を中心に職員全体がチームワークよく毎日の朝の読書に取り組めば、児童・生徒の読書習慣が身に付きその先の読書活動や探究活動の質が高まっていくと考えられる。

注

- 1) 「危機に立つ「朝の読書」…じつは年間「数千万冊」もの読書体験が失われている」飯田一史 現代ビジネス 講談社 2025.06.07
<https://gendai.media/articles/-/152597>
- 2) 朝の読書推進協議会ホームページ
<https://www.mediapal.co.jp/asadoku/>
- 3) 「朝の読書」はこうして始まった－大塚笑子さんが語る「読書の力」 Web chichi 致知出版社
<https://www.chichi.co.jp/web/20230529ootsuka-1/>
- 4) 『読み聞かせ－この素晴らしい世界』ジム・トレリース著 亀井よし子訳 高文研 1987
- 5) 『心を育てる「朝の読書」』林公 教育開発研究所 1999
- 6) 「朝の読書」全国都道府県別実施校数 2025年5月現在 朝の読書推進協議会調べ
https://www.tohan.jp/wp/wp-content/themes/tohan/pdf/asa_doku_school.pdf
- 7) 「朝の読書・考－そのルーツの検証と今後の展望」中西英代 武庫川論究の会 報告 2019.06
- 8) 「子どもの本離れは解消されたのか－飯田一史『いま、子どもの本が売れる理由』を読む」根本彰 オダメモリー 2020.10.23
https://oda-senin.blogspot.com/2020/10/blog-post_23.html
- 9) Building a Stronger Case for Independent Reading at School Adriana G. Bus
<https://journals.sagepub.com/doi/10.1177/23328584241267843>
- 10) 『はるか』147号 朝の読書実践研究会 2022.01
(おしき かずこ：新潟県立三条高等学校)
[NDC10：019.5 BSH：1. 読書 2. 学校図書館]

ヤングアダルトにとっての「読書体験」と「居場所」

——日本子どもの本研究会「ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会」 8月ハイブリッド拡大定例会から考える——

岩井路加

1. はじめに

ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会（以下「YAA！」）¹⁾は、子どもの本の研究と普及に努める一般社団法人日本子どもの本研究会²⁾の一研究部会として、2017年から活動を行ってきた。YAA！の活動目的は、学校・公共図書館におけるサービス環境や読書の啓発、そして主に中高校生の読者へ向けた書籍に関して、中心的な読者や利用者として考えられる「ヤングアダルト」の視点に寄り添う形で研究・研修することにある。YAA！は、「ヤングアダルト」（以下「YA」）を、13歳から18歳を中心に、広く10代から20代を指す年齢層と定義している。その主な活動は、「定例会」（月例学習会、講演会、読書会、見学会等）の開催・運営と、会誌『YAA！navi』の配信である³⁾。

筆者は、中学3年生の頃からYAA！の活動に参加し、YAにとっての「読書体験」について、定例会や日本子どもの本研究会全国大会での話題提供、会員との交流を通して、YA当事者の視点から考え続けてきた。現在では、「YA共同代表」をもう一人のメンバーと務め、会の運営に携わっている。

本稿では、YAとして会の運営に関わってきた筆者が、特にYAの積極的な参加に着目して、今年8月11日に開催されたハイブリッド拡大定例会

「今 YAが手に取る本—戦後80年の夏、傾く世界の中で—」を振り返ることで、YAにとっての「読書体験」と「居場所」のあり方について考察する。

2. YAが積極的に参加するYAA！の活動について

YAA！の活動の特徴の一つに、当事者であるYA自身が積極的に会の運営や企画、話題提供へ参加していることが挙げられる。YAA！では、29歳以下の会員を「YA会員」として会費を無料にしており、YAの入会や活動参加を歓迎している。YAA！の運営を担う運営委員会では、「YA共同代表」という立場のメンバーが設けられており、会の運営にYAの意見を取り入れている。また、YAの運営委員が、定例会の告知のデザインや、SNSでの情報発信を担当している。

特に、定例会での話題提供は、YAA！のYA会員が最も積極的に活動へ関わる機会となっている。例えば、昨年8月には、「YAと考える戦争と平和—行動するためのヒントを持ち寄る—」と題した定例会が開催された。YA世代へ向けた「戦争と平和」に関するさまざまな取り組みについて、東京大空襲・戦災資料センター学芸員や『ハイネさん 豊川海軍工廠をめぐる4つの物語』（これから出版、2017年）の著者の住田真理子さん、沖縄県子

どもの本研究会会員，そして複数名のYAが話題提供を行った。YAからの話題提供では，映画『丸木位里 丸木俊 沖縄戦の囚 全14部』（河邑厚徳監督，2023年）の大学での自主上映会，戦争を題材にしたアート制作，大学生主体のパレスチナ問題に関するブックガイドの取り組み⁴⁾が取り上げられた。戦争を直接経験したことのないYAが現在起きている戦争や社会問題を身近に捉えることのできる視点とは何か，ということが話題となった。

3. サンプルの会について

さらにYAA!では，今年4月に，メンバー全員がYAで構成される「サンプルの会」を発足させた。サンプルの会は，YAが社会的な話題や社会科学に関する本（主に日本十進分類法における「三類」）についてざっくばらんに語り合うことを目的としている。筆者を含むYA共同代表が，YA会員とその知り合いが社会的な話題や社会科学に関する本について話したり，発信したりする場を持ちたいと考え，構想した。会員に限らず身の回りの大学生・大学院生に声をかけた結果，心理学，社会学，文化人類学，音楽学，絵画制作と，大学でさまざまな分野を学んできた6名のメンバーが集まった。

そこでサンプルの会は，月に一度，オンラインを介して集まり，さまざまな本を持ち寄って読んで考えたことを共有してきた。第1回目では自己紹介を交えつつ各々が日頃読んでいる本，第2回目では前回他のメンバーが紹介した本，そして第3回目では「個人的なことは政治的なこと」というテーマで選書した本について語り合った。企画者であるYA共同代表が意識したことは，メンバーに自身の生活と絡めて読書の感想を語ってもらうこと，そしてメンバーが日頃の関心とは異なる分野の本を読む機会を作ることであった。

筆者にとって活動の中で印象的であったことは，特に第3回目の集まりに向けたテーマ決めであっ

た。筆者が「戦争と平和」というテーマを掘り下げようと提案したところ，複数のメンバーから「戦争の対義語は平和ではないのでは？」，「戦争が起きてても起きなくても，常に平和でない状況は身近に存在する」，「社会学では構造的暴力，平和学では非平和という概念があるよ」というコメントをもらった。筆者は，YAより上の世代が前提としてきた二項対立ではない観点で，現在社会で起きている問題を捉える必要性に気付かされた。

4. 8月ハイブリッド拡大定例会「今 YAが手に取る本」について

そこでYAA!は，前述した昨年8月の定例会での話題を膨らませる形で，今年8月に「今 YAが手に取る本－戦後80年の夏，傾く世界の中で－」と題した定例会を，東京都武蔵野市の武蔵野プレイスで開催した。対面とオンライン併せて計109名が参加した。前述のサンプルの会も午後の部で話題提供を行った。

午前の部では，「10代がえらぶ，戦争を考えるための海外YA文学」というテーマで，共同代表の須藤倫子YAA!部会長や翻訳家の原田勝さんと長友恵子さん，「10代がえらぶ海外文学大賞」関係者，そして中高生のゲストが話題提供を行った。

午後の部では，サンプルの会のメンバーが，「個人的なことは政治的なこと」というテーマのもとで，4月に始まった活動の中で読んできた本や知見を深めてきた話題に関して話題提供を行った。「個人的なことは政治的なこと」とは，1960年代から70年代のフェミニズム運動において掲げられたスローガンである。「私的な問題」とされていた家庭内の問題や性的な話題を，社会構造や政治的な力関係と深く結びついているものとして捉える視点である。このテーマは，前述したテーマをめぐるやり取りの中で，フェミニズムやジェンダーをめぐる社会運動に強い関心を持つメンバーから提案を受けて取り組むこととなった。

実際の話提供では、心と物語ることの関係、ローカルなものや旅、能力主義社会、名づけられない人間関係、クィア、フェミニズム、沖縄戦の記憶との向き合い方など、さまざまなテーマが取りあげられた。また、あるメンバーは話提供に代えて、参加者に5～7名からなるグループを組んでもらい、最近個人的に抱く「モヤモヤ」をざっくばらんに語り合うワークショップを企画した。参加者全体がワークショップを通して、非常勤職員の図書館司書をめぐる問題や学校図書館司書と教職員との連携の困難さ、職場でのハラスメントなどについて直接意見交換を行った。筆者にとって興味深かったのは、メンバーや参加者が一貫して、個々の体験や感覚と本に書かれたことを往復しながら、取り上げた社会問題を自分自身の身近な領域へと手繰り寄せるように語っていたことだった。

5. おわりに

これまで述べてきたように、今年8月のハイブリッド拡大定例会は、現在YAにとって戦争や社会問題を身近な問題として捉えることができる視点とは何かを探求する試みであった。それに加えて見えてきたのは、YAは本のみならず、朗読やアート、漫画、アニメ、映画、SNSなど、多様な媒体を通して物事を知り表現を試みている状況であった。

YAにとって「読書」とは、決して書物の紙の上だけではなく、他の書籍やメディアとの関係、また人との直接的なつながり（感想の共有や本のおすすめ、レファレンス）を含めて体験されるものである。現在、あらゆる学校でICT教育が導入され、効率的な学習のあり方が追求されている。今後も学校・公共図書館がYAにとって大切な場であるために、YAが新しい世界や視点に出会うための本とその他の媒体、そして人（友達、教員、学校図書館で働く司書、地域住民等）との往復的な出会

いが用意された環境であることが求められているのではないだろうか。

注

- 1) 日本子どもの本研究会HP「ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会」(2025年11月5日最終閲覧)
<https://www.jasclhonken.com/> 研究部会/ヤングアダルト-アート-ブックス研究部/
- 2) 日本子どもの本研究会HP (2025年11月5日最終閲覧)
<https://www.jasclhonken.com/>
- 3) 大江輝行、須藤倫子「ヤングアダルト世代と共に読書を考える試み：日本子どもの本研究会『ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会』の活動」カレントアウェアネス・ポータル. 2023年 CA2036 (2025年11月5日最終閲覧)
<https://current.ndl.go.jp/ca2036>
- 4) 「『パレスチナを知るブックフェア』日吉メディアで開催 7月末まで」慶應塾生新聞デジタル. 2024年6月21日 (2025年11月5日最終閲覧)
<https://www.jukushin.com/archives/60558>
(いわい るか：日本子どもの本研究会ヤングアダルト・アート&ブックス研究部会YA共同代表)
[NDC10:019 BSH:1.読書 2.ヤングアダルトサービス]

情報教育の場としての学校図書館

——高校情報科の教材として、そして子どもたちの居場所として——

中園長新

1. 「情報」はICTだけなのか

学校教育において「情報」が語られるとき、その多くはコンピュータをはじめとするICTを対象としている。確かに情報社会においてICTの活用は重要であり、近年注目されているAIやビッグデータを活用するためには、ICTに関する知識やスキルが欠かせない。その一方で、学校で子どもたちが触れる「情報」は、ICTに限定されない。戦後日本における学校には学校図書館が必置となり、図書等を通じた情報に触れる環境もICT環境と同様に整備されているはずである。

しかし、学校図書館をはじめとするICT以外の情報環境・メディアは、現在の学校教育では存在感が薄れてしまっている。例として、文部科学省が学習指導要領改訂と呼応する形で作成・公開している「教育の情報化に関する手引」¹⁾を確認してみよう。最新版は2019(令和元)年版を元に2020(令和2)年に改訂された「追補版」であるが、この手引の内容を確認しても、「図書館」という言葉は社会科・地理歴史科・公民科および特別活動における情報活用の一環としてわずかに登場するのみであり、学校図書館を意識的に取り上げた箇所は見当たらない。学校教育の文脈で「教育の情報化」を語る際には、「情報=ICT」という前提があるように見受けられる。

2. 情報教育と高等学校情報科

情報教育とは、端的に言えば情報活用能力を育成する教育である。情報活用能力は「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三観点から構成され、情報というものを広く捉えた上で、実践的な知識・スキルを土台として科学的に情報の本質を理解し、それらを

活用して情報社会に主体的に参画していくことを目指す教育といえよう。すなわち、情報教育はその対象をコンピュータやICTに限定せず、あらゆる「情報」を意識して定義されている。

情報教育は学校種・教科等を限定せずに学校教育全体で広く実践されるべき教育であるが、その中核として機能するのが、高等学校共通教科の一つである情報科である。情報科は1999(平成11)年改訂の学習指導要領で新設され、2003(平成15)年度高等学校入学生以降の世代が学んでいる教科である。学習指導要領改訂のたびに科目構成が見直され、本稿執筆時点(2025年度)では必修修科目「情報Ⅰ」と選択科目「情報Ⅱ」の2科目で構成されている。原則としてすべての高校生は「情報Ⅰ」を学んでおり、2025(令和7)年実施の大学入学共通テストからは、試験の教科として「情報」が追加された。今や情報科は「受験教科」としての顔も持ち合わせており、書店には情報科の授業対応参考書や受験対策問題集が多数並ぶようになっていく。昨今のプログラミング教育重視やAIの隆盛等と呼応して、高等学校情報科を中心とした情報教育はまさに追い風を受けている状態である。

3. 学校図書館を情報教育の場に

改めて述べるまでもなく、学校図書館は学校における伝統的な知の集合体である。図書・新聞・雑誌等の紙媒体を中心としつつ、CD・DVDや電子書籍等を扱うところも少なくない。さまざまな形態のメディアに触れることができるのは学校図書館の利点であり、これはICT活用だけでは実現困難である。また、情報資源の組織化がシステムティックに行われており、検索行動を起点として情報に触れるインターネットとは基本理念が異なる

るとも言えよう。

筆者はこれまで、学校図書館を情報教育の教材として活用することを提言してきた²⁾。それはすなわち、学校図書館という場を、情報教育の場にするということでもある。すべての学校に存在する学校図書館を情報教育の場として活用することは、コストや労力を最小限に抑えつつ、ICT活用とは異なる視点からの情報教育実践につながることを期待される。

学校図書館を場として活用する情報教育の例としては、情報デザインに関する演習がイメージしやすいだろう。たとえば学校図書館の蔵書がどのように組織化されているかを知ることは、情報の構造化という観点で情報デザインの演習になる。また、図書の表紙等の装丁に着目し、限られた紙面にどのような情報がどのような意図を持ってレイアウトされているか考察することは、芸術的視点も含めた情報デザインのあり方を考えるきっかけになると期待される。情報デザインに限らず、情報教育のさまざまな内容に対して学校図書館の活用は期待できる。

4. 情報社会で学校図書館が担う「場」としての可能性

ここまで情報教育と学校図書館の関係について、学術的視点で理論的に検討してきた。学校であるから学びの場として意識することは当然必要であるが、学校は子どもたちにとって生活の場でもある。情報社会と言われて久しい現代において、学校図書館は子どもたちにとってどのような場であり得るのか。学術的視点を少し離れてイメージしてみたい。

現代を情報社会ととらえても、その先にあるサイバー空間とフィジカル空間が高度に融合した Society 5.0³⁾ととらえても、コンピュータをはじめとしたICTに囲まれ、情報が氾濫する時代を生きていくという点は共通である。情報科をはじめとした情報教育では情報社会への積極的な参画を促しているが、しかし、いつでも誰でも等しく参画したいと思うわけではないだろう。ICT等を隔離して過ごす「デジタルデトックス」が人気を博しているように、我々は時として「情報」と距離を置きたいときもある。また、情報行動がさまざまな方法で筒抜けになりやすい時代において、自分の悩みと向き合うためにセンシティブな情報を

「こっそり」入手したいこともあるだろう。「情報」と距離を置いたり、必要かつ安全な情報を人知れず入手したりすることは、インターネットでは困難である。

一方、学校図書館は情報を蓄積する場でありながら、単に「本に囲まれた静かな空間」として活用することもできる。近年は賑やかな図書館も肯定されつつあるが、伝統的に図書館という場は静かに自分の世界に入り込みやすいところである。情報社会に疲れたとき、「情報」に囲まれながらもそれらから不要な干渉を受けにくい学校図書館は、子どもたちの居場所として、心を守る砦としても機能するのではないだろうか。また、子どもたちに寄り添う図書館を貸出・返却処理を経ずに自由に利用できる試みを行っている学校図書館も存在する⁴⁾。インターネットとは異なる形で子どもたちに寄り添う情報を提供できることも、学校図書館の強みであろう。

5. 情報社会における学校図書館

学校図書館は、情報教育の場として多様なメディアを提供し、情報教育の幅を広げること貢献することが期待される。それだけでなく、情報社会の中で「情報」と適切な距離をとりつつ、子どもたちを守る居場所としても機能するだろう。

「情報=ICT」という前提を超えて、情報教育は視野を広げながら時代に即した学びを提供しなければならない。その中で、伝統とともにすべての学校に設置されている学校図書館は、インターネット等のICTと相互補完を図りながら、子どもたちの成長を見守り支える存在でありたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省「[教育の情報化に関する手引]について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html (2025-11-05確認)
- 2) 中園長新 (2023)「学校図書館を活用した情報教育実現に向けた働きかけの検討」『情報処理学会研究報告』Vol.2023-CE-169, No.34, pp.1-9.
- 3) 内閣府「Society 5.0 - 科学技術政策」
https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/ (2025-11-05確認)
- 4) 朝日新聞「そっと借りる、こころを開く いじめ・妊娠…悩む生徒へ、手続き不要図書」(2025年10月27日配信)
<https://www.asahi.com/articles/DA3S16331979.html> (2025-11-05確認)

(なかぞの ながよし：麗澤大学国際学部)

[NDC10:017 BSH:1.学校図書館 2.情報教育]

学校図書館ではじめる探究活動

——学校司書をパートナーに——

浅見和寿

■はじめに

本稿は、定時制課程における総合的な探究の時間（以下、探究）の実践をまとめたものである。私は、教員歴15年目に入り、本校で探究主任をつとめて4年目になる。司書教諭の資格も持っていることから、担当教科である国語や探究の授業においても、積極的に図書館を活用してきた。その際、学校司書（以下、司書）と連携することで、授業の幅が広がり、教育的効果が高くなったと感じている。今回の実践は、担当教員だけでなく、全日制の司書と協働して行ったものである。探究活動における学校図書館の場としての価値と、司書との連携の重要性を示す一助となれば幸いである。

■探究における学校図書館の役割

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説『総合的な探究の時間編』「第5章 指導計画の作成と内容の取扱い」では、指導体制について司書教諭や学校図書館司書などもこの時間の指導に関わる体制を整え、学校全体として取り組むことが不可欠であると明記されている。また、「第2節 内容の取扱いについての配慮事項」には、学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設との連携等、具体的な工夫を行うことが示され、「第11章 総合的な探究の時間を充実させるための体制づくり」には、学校図書館の整備という項目も立てられている。上記から、探究と司書と図書館が不可分であることが明確に示されていることを抑えておきたい。

■学校図書館を活用するメリット

本校定時制の探究では、全学年（80名程度）同時に実施することも多く、学校図書館を積極的に活用している。その理由として、全学年が同会場で探究を効果的に実施できる点が挙げられる。学校図書館の多くは、普通教室よりも広いスペースが用意されており、大きな長机や可動式の椅子等もある。これにより、生徒は資料を広げて比較分析

したり、席を移動して他の生徒と活発に話し合ったりすることが容易になる。

また、図書館ならではの本による新しい分野との偶発的出会いや巨大スクリーンによる大画面での授業も可能になり、生徒の知的好奇心が高まる。さらに、図書館という「非日常」の空間は、生徒に適度な緊張感を与え、発表やまとめの質を高める効果も期待できる。



▲埼玉県立朝霞高等学校の図書館内



▲比較分析の様子

■教員と司書との連携

全日制の司書の勤務時間と定時制の授業時間は重なってはいない。そのため、教員が仲介役となり、生徒が探している情報を事前に司書に相談しておいたり、生徒が授業時間よりも早めに登校し、直接司書とやりとりを行ったりすることもある。週に一度の開館日を設け、担当教員が定時制の時間帯に図書館を開放するなどの工夫も行っている。しかし、定時制にも司書を配置してもらえれば、

もっとたくさんの授業を協力して作り上げることができると感じている。

本校では外部講師による講演会を図書館で実施することも多い。講演会は、生徒の興味関心を広げる貴重な機会であり、それを資料がたくさんある図書館で開催することは、生徒自身の探究テーマの発見にもつながる。本校の図書館は全日制と共用のため、講演会が決まり次第すぐに全日制の司書と連携し、日程や会場を調整する。その次に講師の情報を調べ、新聞記事や論文、著書を集めて、図書館に展示する。その展示の周りには、講演のテーマに関する本を並べる。なぜ、このようなことをするのかというと、講演を聞く前に、生徒が内容に興味・関心を持ちやすくするためである。また、講演を聞いた後に興味をもった生徒が、関係する本を手にするができる状況を作っておくことで、好奇心そのままに次の活動にすぐつながられるというメリットもある。「鉄は熱いうちに打て！」である。

■学校司書との連携実践例

2021（令和3）年度にJICAや東武トップツアーズ等の方々と協力し、カンボジアの学生と国際交流を行った。

まずカンボジアという国を理解するために、さまざまな情報を集めた。インターネットによる情報収集に加え、実際にカンボジアに滞在した方の話を聞いたり、カンボジアに関する書籍をできるだけ多く集め、生徒が根拠を持って情報にあたるができるようにした。本校図書館だけでは蔵書数に限りがあるため、全日制司書と連携し、近隣の高校図書館や朝霞市立図書館、県立図書館に協力を仰ぎ、100冊ものカンボジアに関する本を集めた。これは、学校図書館間の連携、西部E（朝霞）ネットワーク（近隣8校の蔵書検索が可能で、本の取り寄せができる）が構築されていたことが大きい。

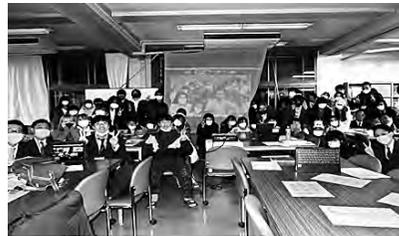
JICAの担当者による講義後、5人程度の班になり関連書籍を読み込み、インターネットも用いて現地の言語や経済、生活様式等を調べた。また、JICAの資料やワークショップを通じ、SDGsの目標に関連したカンボジアの状況を学習し、日本との比較をさせた。

このような事前学習をした後、国際日本文化学園（カンボジアの日本語学校）と本校でのオンライン国際交流会を実施した。コロナ下ということも

あり、その様子は、本校HP上でZoomのリンクを公開し、全県の教員、保護者等に視聴してもらえるように工夫した。保護者が生徒一人一人の学習の様子が把握できるよう、各テーブルに一台ずつChromebookも設置した。現地の学生と中継をつなぎ、カンボジアの現状や文化を聞き、本からの情報と擦り合わせながら話し合わせた。交流の後半では、東武トップツアーズ主導のもと、カンボジアへの交通手段等の説明を受け、現地の人のアドバイスを直接もらいながら、班ごとに独自の行程表を作成した。



▲オンライン中継の画像



▲国際交流会に参加した生徒たち

■おわりに

このように、学校図書館や司書と連携することにより、教育活動の幅も広がり、一層生徒の好奇心や探究心が湧くと考える。生徒がよりよく教育活動ができるよう、教員だけでなく学校全体で継続的に取り組むことが非常に重要である。

※本稿の実践事例は、埼玉県教育委員会の事業である「越境×探究！未来共創プロジェクト」で実践した取り組みである。

参考

- ・木下通子編著：『学校図書館を活用した楽しい読書ワーク』学事出版 p.26-31
- ・東京新聞：実社会が「学びの場」 高校の新授業「総合的な探究の時間」 朝霞高定時制、カンボジア生徒と交流 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/220228>

（あさみ かずとし：埼玉県立朝霞高等学校）
[NDC10：017 BSH：1.学校図書館 2.探究学習]

が宿題をしたり、おしゃべりをしたり等、ゆったりとした時間を日常的に過ごしています。

・プレゼンテーションスペース



3階まで続く階段席には100人以上座ることができます。天井据えつけのプロジェクターと、前面には大型スクリーンが2段あり、集会や発表の場として利用されています。

2. 新しい図書館づくり

(1) 完成までの流れ

建て替えの議論は、2017年から始まりました。茅野市では各校1名の学校司書に加え、大規模校を中心に全校の支援を行う学校司書支援員が配置されています。今回の建て替えにあたっては、小中図書館統合に関わるさまざまな作業を通して、永明小中の学校司書と支援員の計3名でメディアセンターづくりに取り組んできました。

企画、基本構想段階を経て、規模、施設内容、予算等が決定され、2019年度に設計者が決定。2022年5月に着工、約2年後の2024年3月に完成し、同年月に新校舎で授業を開始しました。授業開始と同時に、メディアセンターを開館しなかったのですが、工事の遅れなどもあって間に合わず、5月1日の開館となりました。

工事が遅れた理由のひとつに、発掘調査があります。茅野市には縄文遺跡が数多くあり、工事の際には必ず発掘調査が行われます。今回も調査が実施され、残念ながら国宝級の土偶は出土しませんが、弥生時代から平安時代の住居跡や土器などが発掘されました。現校舎は、この遺跡の上に建っています。

(2) 設計者との関わり

茅野市では、プロポーザル方式により設計会社を選定しました。受託したのはT建築事務所、設計担当のKさんは各地の学校施設を設計されてきた方で、今回が12校目とのことでした。

初めて設計者に会ったのは、2019年10月の教職員ワークショップです。小・中の全教職員が参加

し、新しい学校への要望を出し合いました。ワークショップやヒアリングなどの場合は、次々と設けられました。児童を対象としたワークショップでは、「一人で落ち着いて本が読める場所」「自然の光が上から差し込むような設計」「本棚の裏に椅子があるといい」などさまざまな要望が出ました。司書をはじめ、栄養士、養護教諭、理科や音楽などの専科については、市内の小中学校の先生方からもヒアリングを行っています。

ワークショップやヒアリングが実施される一方で、設計者はたびたび図書館にきて、学校司書や支援員といろいろな話をしてくださいました。

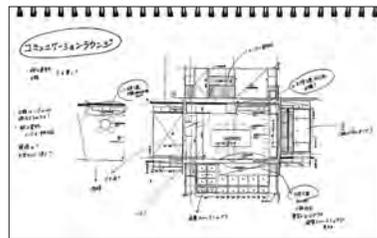
図書館の授業のやり方や司書の関わり方、現在の図書館の不便な点と新しい図書館への要望、今まで設計してきた学校のこと、より多くの児童・生徒が来くなる図書館とはどういうものだろう? などなど、話題は幅広く多岐にわたりました。

「地域の歴史を知らずして、学校の設計はできない」とおっしゃって、郷土資料を借りていかれたことが印象に残っています。

設計者は、興味を持って私たちの話を聞いてくださいました。こういう時間から、信頼関係ができていったのだと思います。設計者は身近な存在であり、立場は違っても「よりよい図書館をつくりたい」という思いを共有している、力強い同志でした。そして、設計図が完成します。

2022年8月4日、メディアセンターの打ち合わせがあり、初めて設計図をいただきました。それまでぼんやりとしたイメージでしかなかったメディアセンターが、図面になって目の前にあるのは感動でした。

設計図を見ても、何がどうなっているのか素人にはよくわかりません。そこで、見取り図を作成することを思いつきました。設計図をコピーし、切り取って、スケッチブックに床面と壁面を貼り合わせます。すると、立体的なイメージが見えてきました。



一方で、Excelでも図面を作成しました。丸机

など、動かせるものは動かして場所を変え、全体の感じを予想したり、配架のシミュレーションをしたりできるようにもなりました。

要望の受け付けは9月末までということでしたので、1か月半ほぼ毎日、3人で質問や要望の洗い出しを行いました。

小学1年生と中学生では体格がだいぶ違うが、テーブルなどの高さは大丈夫か、椅子の座面は、汚れが落ちやすい材質がよい、司書室に水道がほしいなどです。特に書架については、ひとつひとつについて、段数、奥行、高さの要望を出しました。書架にはA-1、B-2など番号がついています。メディアセンターには、たくさんの書架がありますが、番号を言えば、どこのどの書架か、わかるようになるまで、図面を読み込みました。

洗い出した質問と要望を提出したところ、すぐに設計者と家具の設計者、製造会社の方が茅野に来て、変更可能か否か、その理由を説明し、代替案を出してくださいました。最終的に質問・要望は118項目になり、家具を設計されたN先生は、だいぶ驚かれたようです。

要望通りになったこと、あきらめたこと、要望は聞いてもらえたものの、完成してみたら微妙だったことなどさまざまですが、学校司書の意見を設計に反映する、ということでは成功だったと思います。

(3) 成功のポイント1 〈思いの共有〉

メディアセンターの設計には、設計者、市の担当者、学校長、学校司書が関わりました。

この4者の間に、お互いを尊重し、それぞれの立場から意見を出し合い、よいものをつくるという共通の強い思いがありました。「対話の場を設け、設計者との協働で『最適解』を目指す姿勢」が重要だと考えます。

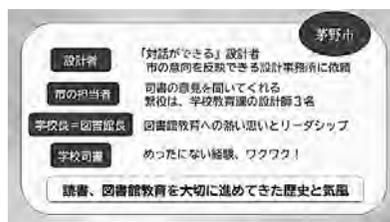
ではなぜ、「思いを共有できたのか」です。

市が設計者を選ぶ際の条件には、「対話ができること」がありました。市の意向を反映できる設計事務所を選ぶためです。また、市の担当の立石淳二学校建築係長は元学校教育課で司書と連携・協働する立場にあり、司書の仕事に理解がありました。なお、建て替えにあたっては、学校教育課に立石さんを含めて設計士を3名おき、設計の企画・アドバイスを行う設計事務所・建築事務所とのつなぎ役としました。校舎完成後も、不具合対応などに継続してかかわっています。

図書館長でもある学校長は、図書館教育に自分なりの思いや夢を持ち「もっと皆が集まってくるような図書館にしたい」「中学校でも授業でガンガン使えるといいなあ」と熱く語る一方で、「メディアセンターの入口に、カフェにあるようなおしゃれなブラックボードを置くといいと思うんだ」と提案もする、そんな学校長でした。

学校司書は、めったにないこのような機会に、大変さよりもワクワク！が勝っていました。司書が3人いたのも大きいです。フォローし合いながら、楽しく頑張れました。

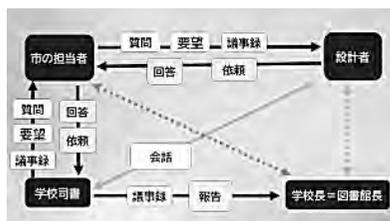
そしてこれらの根底には、茅野市の読書と図書館教育を大切に進めてきた歴史と気風があります。市の担当者が司書の仕事に理解があるのも、学校長が図書館教育に熱い思いを持っているのも、偶然ではありません。茅野市では学校司書は大切にされていると感じていますし、立場も強めです。その結果、私たち学校司書は、初めから「蚊帳の中」にいて、言いたいことが言えました。



(4) 成功のポイント2 〈情報の共有〉

質問や要望などは、すべて市の担当者を通してやり取りし、学校とも共有しました。また、設計者が出席する打ち合わせには、必ず市の担当者が同席しました。とても心強く、その場で方針を決められることも効率的でした。打ち合わせでは必ず議事録を作成し、4者で共有しました。決まったこと、ペンディング事項などを共有することで、誤解や思い違いを防ぐことができ、スムーズに作業が進みました。

質問、要望、議事録は、必ず市の担当者のチェックを経てから設計者に送ります。その逆も



同様です。設計者と会った際に話して答えをもらうこともありました。そういうことも書面に残すようにしました。学校長にも状況を報告し、4者の間で認識のズレがないようにしました。

(5) まとめ

建て替えにあたって何よりも大切なのは、「設計者と対話ができること」。これが大前提です。次に「司書が関われる体制づくり」です。市としても学校としても、学校図書館の役割とその重要性を正しく認識することが第一です。学校図書館は児童・生徒や教職員に必要な資料を提供する場であり、また子どもたちの心を育て、生きる力を育む場でもあります。この認識があれば、その場で働いている学校司書の意見を聞くのは当然、と考えられると思います。

市の担当者の「全体に責任を持つ姿勢」も重要です。打ち合わせをはじめ、完成後の取材にも、必ず市の担当者が同席しました。

そして最後に「司書の頑張り」です。司書の意見を聞くのは当然と言いましたが、司書の側から言えば、「意見を聞かなくては始まらない」と思ってもらえる司書であることです。経験年数にかかわらず、新しい知識を得ること、勉強することは当然です。日々、学校司書の地位、立場を高めるような仕事をすること。これが大切だと思います。そしていざ意見を求められたら、出せるものは全部出す、できることは全部やる、そのくらいの気持ちで、一生に一度あるかないかの建て替えを楽しむことも成功につながる源だと思います。

3. メディアセンターの利活用ーメディアセンター開館による変化ー

まず利用状況ですが、朝や休み時間の来館者が増えました。とくに、これまで学校図書館にあまり来なかった層の利用が増えたと感じています。中学校は、今まで開館していなかった朝の利用が始まり、本を読んだり、友だちと勉強したりする姿も見られます。読書や貸出といった目的がなくても、「遊びに来る感覚」で気軽に立ち寄る児童生徒も多く、メディアセンターが日常の生活空間の一部として機能しています。

施設の立地も大きな要素です。校舎の中央に位置することで、児童生徒も教職員もアクセスしやすく、通路としての機能も果たしています。その結果、日常的に本に触れる機会が格段に増え、ま

た小中の枠を超えて授業の様子や利用の状況が自然と共有されるようになりました。

授業での活用については、複数クラスが同時に利用することにも慣れてきました。空間的・時間的に余裕が生まれ、時間割の変更なども柔軟に行うことができます。また、教科の調べる学習では、以前は学校司書が用意した資料を教室に運んで利用することが多かったのですが、館内で自分で資料を探したり、調べたりする機会が増え、調べる学習の質も一段レベルアップしました。

蔵書は、両校合わせることである程度の量を確保できています。資料の質やレベルも多様化し、読書にも学習にも以前より充実した資料を提供できるようになりました。

読書傾向にも変化が見られます。小学生が中学校の蔵書を借りるケースが多く、YA作品、ドラマ・アニメの原作本やノベライズ、さらには一般書までと、選択の幅が広がったことで、とくに小学校高学年の読書意欲の向上につながっていると感じます。中学生が小学生向けの懐かしい本を手取る姿も見られ、さまざまなニーズに応えられる環境になりました。

メディアセンターは、自由な読書の場であり、憩いの場でもあります。自由すぎて雑然とした雰囲気も感じられますが、もともと自由で開放的な空間を意図して設計されています。そんな中で利用マナーを身につけ、みんなが気持ちよく過ごせる環境を自分たちで作っていくことも、これからの課題の一つです。

考えてみれば、新しい施設ができたからといって、図書館活動が一気に充実するわけではありません。実践を積み重ねながら2年目に入り、大きく動き出したという実感があります。去年より今年、今年より来年と、学びが深まっていくようなよりよい利活用を目指して、校内での協力体制もこれまで以上に強化していきたいと考えています。

* 本稿は、日本図書館協会学校図書館部会夏季研究集会(2025.8.8~9開催)報告「子どもたちのことばとこころを育む読書・図書館教育を可能にした、茅野市の底力とは」より一部を抜粋編集したものです。

(みぞぐち みなみ、おおにし えみ、はま まゆみ：
茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター)
[NDC10:017 BSH:1.学校図書館 2.図書館建築]

各種調査から見る学校司書の実態

高橋恵美子

はじめに

学校図書館、学校図書館職員に関する調査は、2003年以降文部科学省（以下文科省と記述）による「学校図書館の現状に関する調査」しかない。昨年2024年は、文科省「令和5年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」結果（2024.6.20発表 2024.9.10修正）が公表され、また日本図書館協会（JLA）非正規雇用職員に関する委員会が行った「学校図書館職員雇用状況調査（自治体向け）」と「学校図書館職員に関する実態調査（個人向け）」の結果が公表された年となった。

上記三つの調査から明らかになった学校司書の実態について、以下に記述する。

1. 文部科学省「令和5年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」結果¹⁾

この調査は、2023年、学校図書館法公布70周年の年に行われた「学校図書館改革に関する決議」（学校図書館議員連盟 2023.6.15）にある非正規の学校司書の現状調査実施の声を受けたものと思われる。この決議は、学校図書館議員連盟あての「学校図書館の改革に関する要望書」（文字・活字文化推進機構 全国学校図書館協議会 学校図書館整備推進会議 2023.6.9）によるものだった。

この調査結果には、従来の「学校図書館の現状に関する調査」からは知りえなかった情報が含まれていた。学校司書の実数、複数校兼務の状況、週あたり勤務時間別の会計年度任用職員などの状況である。また、この調査の「常勤職員」は、「学校図書館の現状に関する調査」の「常勤職員」と

内容が異なっている。

①学校司書の実数

学校司書の実数が公表された意味を理解してもらうために、表1、表2を作成した。

表1. 文科省令和5（2023）年度調査

合計	常勤職員	会計年度任用職員	その他の非常勤職員
16,720	2,226	14,417	77

表2. 令和2（2020）年度、平成28（2016）年度
学校図書館の現状に関する調査（公立のみ）

	合計	常勤職員	非常勤職員
2020	(22,603)	4,828	17,775
2016	(20,212)	6,144	14,068

表2の合計欄の数値は、常勤職員と非常勤職員の数値を足して算出した。

「学校図書館の現状に関する調査」で、常勤職員と非常勤職員の合計が2万人を超えているのに対して、実数16,720人は衝撃的である。「学校図書館の現状に関する調査」の学校司書数は、学校に配置されている延べ人数の数値である。

②複数校兼務の状況

1校専任の人数は全体の75.9%、2校配置14.3%、3校配置5.4%、4校以上配置4.4%である。

JLAの自治体向け調査で1校に2名の配置（大規模校及び義務教育学校への2名配置を除く）がある

ことが明らかになった（この点は後述する）。文科省2023（令和5）年度調査には、この記述がない。

③会計年度任用職員の状況

会計年度任用職員の割合が、全体の86.2%であったことには驚いた。会計年度任用職員制度が導入されたのは2020年度である。正規職員を減らして非正規雇用職員にする動きは2020年度以前から全国で進行していたが、自治体雇用の非正規雇用職員が一斉に会計年度任用職員になったようである。

④「常勤職員」の違い

文科省2023（令和5）年度調査の「常勤職員」数2,226人は、学校司書の総数から会計年度任用職員とその他の非常勤職員を除いた数になっている。「学校図書館の現状に関する調査」の「常勤職員」は、正規職員＋常勤的非常勤職員の合計である。常勤的非常勤職員とは、同調査の質疑応答集に記載があって、いくつかの条件を満たした非常勤職員、勤務時間数が正規職員とほぼ同様の職員のことである。2020年度の「学校図書館の現状に関する調査」では、「常勤職員」数は4,828人である。調査年度が違うので単純に比較はできないが、この人数の差、2,602人はどういう職員なのだろうか。考えられるのは、会計年度任用職員のうちフルタイム会計年度任用職員631人全員と週30時間～38.75時間の会計年度任用職員4,515人のうち約2,000人と考えられる。この二つの調査の「常勤職員」の違いには、注意が必要である。

そして問題なのはどちらの調査においても、正規職員の数がわからないことである。「常勤職員」の数が少ない文科省2023（令和5）年度調査の場合でも、この「常勤職員」数2,226人に、JLA調査に出てくるフルタイムの再任用・再雇用職員などの非正規雇用職員が含まれているのではないか。「常勤職員」の語は、一般に正規職員と思われてしまう。この点にも注意が必要である。

⑤委託について

この調査では、「学校司書を配置していない学校数」の欄に、「学校司書業務を委託している学校数」と「学校司書業務を図書館職員が行っている

学校数」の数値が載っている。都道府県別のデータにもある。

学校図書館の委託について、文科省が調査結果を公表したのは2015（平成27）年学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議（第1回）の配付資料以来である。この配付資料「資料4 学校図書館の現状について」に掲載されていた「学校図書館（公立）における民間のノウハウの活用状況について」では、回答のあった1,788自治体のうち64自治体が委託を「行っている」と回答したとのことだった。

今回の調査では、自治体数ではなく学校数が載っている。委託についての調査結果は見逃されがちなので、簡単に紹介する。「学校司書業務を委託している学校数」は1,486校、【設置者分合計】の表によれば、東京都801校、三重県214校、埼玉県53校、宮崎県47校、福島県46校（以下省略）とのこと。学校種別では、小学校、中学校に多い。

2. JLA「学校図書館職員雇用状況調査（自治体向け）」結果²⁾

自治体向け調査の対象自治体は、政令指定都市20市、東京23区、政令指定都市以外の県庁所在地の市31市の計74自治体。調査時期は2023年7月、記入は2023年5月1日現在とし、締め切りは7月末日だった。調査結果の報告は2024年5月、回答した自治体は70自治体である。

この調査で明らかになったのは、兼務の状況、雇用形態、配置形態ほかさまざまな面で自治体による格差が大きいことである。新たな問題として、1校に2名の配置（大規模校及び義務教育学校への2名配置を除く）があることも明らかになった。この調査の対象にはなっていないが、東京都立高校の会計年度任用職員も1校に2名の配置であり、287人（2023年4月時点）いる³⁾。

雇用形態では、さまざまな雇用形態が混在していた。主な雇用形態は、正規職員7自治体、会計年度任用職員52自治体、有償ボランティア4自治体、委託・派遣等15自治体、他の職と兼務7自治

体である。しかも一つの自治体の中で、複数の雇用形態が混在している自治体が多くある。小学校と中学校で、自治体直接雇用と委託・派遣等に分かれるなどの例があった。

配置形態は、正規職員＋会計年度任用職員の2自治体から、有償ボランティアの4自治体まである。70自治体のうち、小中学校に未配置は2自治体だった。ちなみに正規職員＋会計年度任用職員の2自治体は岡山市と那覇市、委託・派遣等に関しては、15自治体（東京23区のみ）だった。また、自治体直接雇用ではあるけれども、1人が何校も回る巡回型が3自治体あった。

他にも調査した項目はあるが、ここでは学校図書館支援センター（類似施設を含む）のある自治体は19自治体だったということだけを加えておく。

3. JLA「学校図書館職員に関する実態調査（個人向け）」結果²⁾

この調査は、正規職員を含む学校図書館職員を対象としたWeb調査。調査時期は2023年11月下旬から2024年1月末日。回答者数は893人。調査結果は2024年12月に公表、概要版は2025年2月の公表となった。

回答者の雇用形態は、正規職員、任期付職員、再任用・再雇用職員、会計年度任用職員、会計年度任用職員以外の非正規雇用職員、有償ボランティア、委託・派遣等となっている。最も多いのが会計年度任用職員（633）、以下正規職員（128）、会計年度任用職員以外の非正規雇用職員（38）、任期付職員（36）と続く。

細かいデータは、報告書あるいは報告書概要版を見ていただきたい。ここでは別に集計した「最後の設問に寄せられた声」からわかったことを中心に記述する。

寄せられた声の内容を多かった順にあげると、「待遇改善、安定した雇用、正規雇用の実現など」（73）、「学校図書館と学校司書の仕事が理解されていない（管理職、教員、自治体ほか）」（64）、「待遇が悪い」（49）、「楽しい、続けたい、頑張っていくた

い」（39）、「疎外感、孤独感、お客様感、相談相手がいらない、ほか」（35）、「限界を感じる、やる気を失ったなど」（18）となる。特に「限界を感じる、やる気を失ったなど」の記述は、絶望感が漂っていて、3校以上の複数校兼務の方に多かった。

学校司書兼スクールサポートスタッフとして働いている人や、有償ボランティア、委託で働いている人の生の声がある。

もっとも気になる記述は、記述例43の記述である。以下に紹介する。

記述例43（抜粋）（公立・小学校・1校専任・P会計年度）

私が働く学校図書館だけなのか、退勤後の図書室の利用により部屋や書架の荒れ、システムを勝手に立ち上げておかしなことになっているPCなど、常にしりぬぐいをしている仕事である。委員会活動で来る生徒も真面目な子ばかりではなく来ない子も多いのであてにできないし、図書システムをいい加減に使用するので貸し出しトラブルも多発している。とにかく貸し出した本が返ってこない。禁帯もいつの間にか持ち出されていたりして図書システムを通さず不明本が多発する。悲しくなる。

週3日、1日6時間の勤務の方である。よく書いてくださったと思う。小中学校の図書館は司書がいらないところに配置されたケースが多いため、このような事例は多いのだろうと思われる。図書館の本は借りるもの、借りたら返すもの、という意識を学校内に定着させることから始めなければいけないのだと感じる。

4. 学校司書の実態について

文科省の調査では、学校司書の正規職員数がわからない。かつては、小学校、中学校には正規職員の学校司書がいた。高校の場合はもっと多かった。1995年に全国学校図書館協議会が行った「文部省委嘱 学校図書館及び読書指導に関する調

査)⁴⁾は、公立の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を対象にしており、回収率はどの校種も94%以上の調査である。この調査では、学校司書(調査時の名称は「学校図書館担当事務職員」)の正規職員・非正規職員の状況が比率(%)で示されている。小・中・高校別の回答校数と小・中・高校別の正規職員の比率(%)を使用して、正規職員数を算出すると以下ようになる(ちなみに同様の方法で算出した学校司書の配置率は、小学校13.4%、中学校15.7%、高校73%)。

小学校	1,104名	中学校	628名
高校	2,989名	計	4,721名

文科省2023(令和5)年度調査の「常勤職員」数2,226名と比較すると、正規職員が大幅に減っていることがわかる。なお、この1995年調査には「小・中学校では、複数校を兼任の学校図書館担当事務職員が11~12%いる」とあり、複数校兼務の状況も近年大きく変わった点になる。

学校司書の複数校兼務の状況及び任用の状況は、特に小学校(義務教育学校前期を含む)、中学校(義務教育学校後期、中等教育学校前期を含む)の数値が高い。小学校・中学校は、複数校兼務の割合も会計年度任用職員の割合も大きい。

また文科省の調査で学校司書に該当しない職員にあたる、委託・派遣等、有償ボランティア、他職との兼務で働いている方もいる。他職との兼務の場合、「総じて週2日勤務の場合に、他の職と兼務の職員がいる傾向がある。」(JLA「学校図書館職員雇用状況調査(自治体対象)報告」p.13)とのこと。

気になるのは、このような学校司書として安定的、継続的に働くことができない職務環境がもたらす影響である。学校司書が学校図書館でどのような役割を果たすかを示す実践は、主として正規職員あるいは正規職員に近い状況で働く学校司書によって示されてきた。正規職員が減っていく状況の中で、勤務状況や報酬の範囲で働けばいいとする感覚がじわじわと広がっているように感じる。

自治体によって学校司書の職務環境は大きく異なっている。地方行政は、女性がやりがいをもって働ける環境をつくる責務があるのではないかと思う。

おわりに

9月18日、日本図書館協会は「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言-」⁵⁾を公表した。「提言」は4項目からなり、9月14日公表の「学校司書の配置・処遇等について(見解)」⁶⁾(日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会・学校図書館部会)を参考に作成された。

注

- 1) 文部科学省「令和5年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」結果(概要)
https://www.mext.go.jp/content/20250617-mxt_chisui01-100002176_1.pdf
 - 2) 日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会「学校図書館職員雇用状況調査(自治体対象)表」(2024.5.2), 「学校図書館職員雇用状況調査(自治体対象)報告」(2024.5.2, 2024.5.20修正)
「学校図書館職員に関する実態調査(個人向け)報告書」(2024.12), 「学校図書館職員に関する実態調査(個人向け)最後の設問に寄せられた声」(2024.12), 「学校図書館職員に関する実態調査(個人向け)報告書 概要版」(2025.2)
<https://www.jla.or.jp/committees/hiseiki/>
 - 3) 中村崇「東京都立高校の職員状況」『学校図書館部会報』75 2024.3.22 p.3
https://www.jla.or.jp/wp/wp-content/uploads/2025/06/gakubukaiho_75_p.pdf
 - 4) 「文部省委嘱 学校図書館及び読書指導に関する調査 調査実施=全国学校図書館協議会」『学校図書館』1995.12 p.38-46 引用文はp.46
 - 5) 日本図書館協会「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言-」2025.9.18
<https://www.jla.or.jp/opinion/2025-09-18/>
 - 6) 日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会・学校図書館部会「学校司書の配置・処遇等について(見解)」2025.9.14
https://www.jla.or.jp/wp/wp-content/uploads/2025/09/sl_keikai.pdf
- (たかはし えみこ: JLA 学校図書館部会幹事・部会選出理事)
[NDC 10 : 017 BSH : 1. 学校図書館 2. 図書館員]

国際的な図書館界はいま

——IFLAアスタナ大会——

三浦太郎

カザフスタン開催

中央アジアは、東西は東アジアから中東、ヨーロッパを結び、南北はロシアと南アジアを結ぶ地政学的要衝である。2014年、国境を越える道の世界遺産として、「シルクロード：長安－天山回廊の交易路網」が登録された際には、中原地区など中国の22件の遺跡群と、ジェティス地区の都市遺跡・交易拠点など、カザフスタン・キルギスの11件の遺産群が構成対象となった。

中央アジアの大国カザフスタンは交易の要というばかりでなく、豊富な地下資源でも知られる。1960年代末に南部のイシク遺跡が発掘されると、紀元前5世紀の金刺繍が施された鎧など金製品が発見された。金装束に身を包む王子「ゴールデンマン」は、現在、国家遺産の象徴となっている。今日でも、石油、天然ガス、ウラン、レアアースなど豊富な天然資源が国家の発展を支えている。

1991年12月にソビエト連邦が解体すると独立国家となり、1997年に現在の首都アスタナに遷都された。アスタナは、建築家・黒川紀章の都市設計に基づいて、自然との共生や段階的成長を目指し、開発が進められている都市である。シンボルである展望塔「バイテレク」をはじめ、近代的高層建築の数々や巨大モスクが目目を惹く。2017年には「未来のエネルギー」をテーマに、中央アジア初の万博が開催された。

今年8月18～22日、そのアスタナで第89回IFLA年次大会が開かれた。昨年は、事前に予定されたUAEドバイ大会が中止となり、それに代わりオーストラリア・ブリスベンで情報未来サミットが開かれており、2年ぶりの年次大会開催である。万博記念会議場(QAZEXPO)と、隣接するヒルトン



▲万博モニュメント(球体)(左)とバイテレク

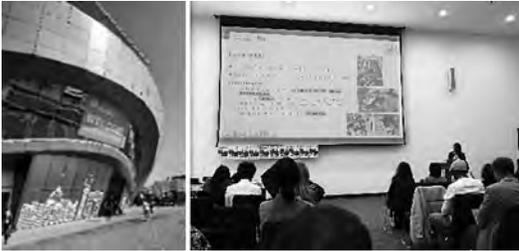
ホテルの2会場で行われた。大会テーマは「知識を統合し、未来を築く」である。

中央アジアでは初の開催となった。ロシア語圏では、1970年と1991年に旧ソ連の首都モスクワで開かれており、3回目となる。大会参加者は、例年よりはやや少なく、114の国と地域から1,700人以上を数えた。188のセッションや33の企業展示、ポスター発表110件などが行われた。

日本からの参加者は32人であった。セッション等での口頭発表は5件で、ほかにポスター発表も5件あった。

プレ会議の口頭発表として、8月15日、国立学術図書館で行われた地域史・系図学分科会(LHG)のサテライト・ミーティングにおいて、①長塚隆氏(鶴見大学名誉教授)と②長谷川幸代氏(跡見学園女子大学)が、それぞれ発表を行った。

会期中は、③18日に学校図書館分科会(SL)主催の「IFLA/UNESCO学校図書館ガイドラインの実行」(セッション087)で庭井史絵氏(青山学院大学)が、④翌19日にLHG主催の「過去の検証により知識を結合する」(セッション097)で棚橋佳子氏(東京農業大学)が、また、⑤21日に法律図書館分科会主催の「クロスボーダーな交流を通じて未来



▲QAZEXPO(左)と③庭井氏の発表

を築く」(セッション160)で河村宏氏(特定非営利活動法人支援技術開発機構:ATDO)が、それぞれ口頭発表を行った。

ポスター発表は19~20日午後に行われ、⑥馬場幸栄氏(国際日本文化研究センター)のほか、⑦河村氏ら、⑧松本直樹氏(慶應義塾大学)ら(筆者も含む)、⑨庭井氏ら、⑩野村美佐子氏(ATDO)らが、それぞれ共同発表を行った。

セッションの発表の多くは英語で行われ、前回のロッテルダム大会同様に翻訳ソフトの活用も図られた。各発表要旨や一部の発表資料は大会ウェブサイトで見られる¹⁾。

「日本コーカス」と開会式

開催前日の8月17日には、分科会のビジネスミーティングやコーカス(地域会議)が開かれた。ヒルトン会議室1の「日本コーカス」(セッション071)には、日本人参加者28名が出席した。全員が座り順に発言し、IFLAの地域活動部会や分科会で委員を務める参加者から、各分科会等での検討事項が報告された。

その場には、倉田敬子氏(国立国会図書館長)をはじめ、アジア・オセアニア地域活動部会委員を2年間務めた野村氏と岩崎れい氏(京都ノートルダム女子大学)、同活動部会新委員の鎌田均氏(京都ノートルダム女子大学)、図書館理論研究分科会(LTR)委員を2期8年間務めた下田尊久氏、同分科会新委員の井上靖代氏(獨協大学)、SL委員の庭井氏、教育研修分科会委員の松本氏、児童・ユングアダルト分科会新委員の中野陽子氏(鎌倉市深沢図書館)、先住民問題分科会新委員の須永和之氏(國學院大学)、LHG委員の長塚氏と長谷川氏、同分科会新委員の馬場氏らが顔をそろえた。

LHG事務局長を務めてこられた長塚氏は新たにLHG委員長に選出され、また井上氏もLTR委員長に選ばれたことが報告された。会合終盤にはヴィッキー・マクドナルドIFLA会長らがあいさつに訪れた。来年、韓国プサンで開かれる第90回IFLA年次大会への参加が呼びかけられた。

会議後には、万博モニュメント(球体)近くにあるレストラン「ライブリュウ」で懇親会が開かれ、現地の肉料理を囲みながら、一同が歓談の時間を楽しんだ。



▲開会式(左)と日本コーカス

翌18日午前中にQAZEXPOホールで開会式が開かれた。オルザ・スレイモフUNESCO常駐代表(代読)、タルガット・イエシエンクロフ科学・教育副大臣、グルツァン・イルツァノヴァ大会組織委員長らがあいさつを述べた。マクドナルドIFLA会長は、IFLA創設以来、100年にわたる歴史の中で最も変革の必要な時代を迎えており、図書館や図書館員同士が、より強固につながることの重要性を述べた。

幕間には、「ビバショーバレーアンサンブル」のダンスパフォーマンスや、「SARYN-Adai」による民族音楽の演奏も披露された。最後に、オリシヤノヴァ氏(カザフスタン大学)が「情報へのアクセスとメディアリテラシー」と題する基調講演を行い、カザフスタンにおけるSNSの普及や、情報マネジメントスキルの重要性を述べた。

公開セッション

公開セッションのテーマとして、(1)人工知能(AI)の影響、(2)持続可能な未来、(3)情報インテグリティ(正確性・一貫性・信頼性があること)の三つが設定された。ここでは、紙幅の関係で、(1)と

(2)に関して1セッションずつ紹介しておきたい。

まず(1)については、8月19日にサリヤルカ・ジェティス室で開かれた「図書館情報学とAI倫理」(LTRほか主催, セッション123)において議論があった。

登壇者のひとり、カナダのデビー・シャタラー氏(ランガラカレッジ)は、高等教育におけるAI倫理の展開について発表した。進化し続ける生成AIの技術について、それを使わないという選択肢はないとした上で、学生の教育を支援し、倫理的な方法で次世代を育成し、専門家をサポートする立場から、「批判的情報リテラシーに関わる図書館が、利用者と調査研究プロセスを共有し協働する」ことが重要であると述べた。その際、UNESCOのフレームワークなどを活用しつつ、明確なガイドラインを作る必要性も強調された。

続いて、バングラデシュのディララ・ベグム氏(ダッカ東西大学)は、AI技術と情報を統合する必要性を指摘した上で、「AIリテラシーはあらゆる学生に対する中核カリキュラム」であり、図書館員養成科目の変革が急務であると述べた。また、図書館実務の中で、目録作成、メタデータ、チャットボットなどにAI技術が活用される一方で、予算の制約から技術が十分に適用されないケースも多く、特に発展途上国でICTインフラの不足が課題であると述べた。

AIの活用状況を把握し、人びとの情報リテラシー能力の向上に貢献する姿勢が求められていると言える。また、世界の図書館で行われているベスト・プラクティスを集め、図書館界の知見を共有することも大切であると感じる。

(2)については、21日に同じくサリヤルカ・ジェ

ティス室で開かれた「デジタル世界における収集」(国立国会図書館分科会主催, セッション153)が印象に残った。

3番目の登壇者ブレリーナ・ガクザ氏(コソボ国立図書館)が、同館の記憶図書館センターのプロジェクトを紹介した。これは、同館とプリティツシュ大学のスタッフがチームを組んで、高齢者100人へのインタビューから、5,000ページに上る記録を収集し、オーラルヒストリーの文書化・公開を行ったものである。さらに同センターでは、20世紀末のコソボ紛争における暴力や抑圧の集合的記憶を後世に伝えるため、「コソボの記憶」プロジェクトを実施した。戦争生存者のネットワークを活用することに成功し、当初60人だった調査協力者は200人に拡大したという。

セッションでは、このほか、オーストラリアの先住民族や、カタールのパレスチナ難民、スコットランドのLGBTQ+の人びとなど、さまざまなマイノリティの人びとの生活を記録する試みが報告された。事後の質疑では、フロアから、調査対象の人びとの保護や信頼関係の構築について質問が出された。調査協力者の身辺に危険の及ぶことが想定されるケースもあり、そうした場合は、記録を即時には公開しない措置をとることや、調査協力者との信頼関係の醸成には時間を要することが回答された。

図書館は従来、出版物を中心に、他の文化遺産組織・機関の作成した資料や記録を収集し、コレクションとして提供、保存する傾向が強かった。それは、どちらかと言えば、収集を「待つ」姿勢であったが、デジタル世界の広がりとともに、図書館自身がボーンデジタルのコレクションを「作る」ことができるようになってきている。未来に向けた図書館の機能として、人びとの生活や文化につながるデジタル遺産と関わりを持つことが、ますます重要となってくるであろう。

総会その他

8月19日夜には、全体の公式イベント「文化の夕べ」が開かれた。例年は市内の文化施設に場所を移して開かれることも多かったが、今年はQAZEXPOホールで行われた。参加者は飲食を楽



▲セッションの様子(左)と会場内

しんだり、民族音楽の生演奏に合わせて踊ったりするなど、思い思いに過ごしたようである。

翌20日夕方には総会が開かれた。マクドナルド会長は在任2年間で振り返り、回復力のある（レジリエントな）組織づくりを目指したことや、とくに昨年の情報未来サミットが活動のハイライトに挙げられると述べた。続いて、シャロン・メミス事務局長が事業報告を行い、世界規模で専門職コミュニティがつながることと、あらゆる図書館が、地域社会の変化をリードするためのツールを持つことが重要であると述べた。

その後、スチュワート・ハミルトン会計担当が前年度決算報告を行った。37万ユーロの赤字を計上したが、これは主に、ドバイ大会のキャンセル費用や訴訟費用（和解済）による例外的支出に起因し、運用は健全である旨が報告された。繰越金は159万ユーロであった。今後、執行部において、年次大会の開催方式の見直しや、財務モデルの検討が進められるという。

総会の議題のいくつかは21日の閉会式に持ち越された。レスリー・ワイアー新会長（カナダ国立図書館・文書館長）、テパヤ・パリンガタイ次期会長（ニュージーランド内務省長官）ら新理事会が紹介されたほか、各賞の授賞などが行われた。

最終日の22日には、図書館見学が実施された。筆者は事前に国立学術図書館を申し込んでいたが、改装中のため見学することができず、当日に急遽変更を告げられた国立博物館を見学した。古代から現代までの展示物を見て回ったが、中にはイシク遺跡から出土した「ゴールデンマン」や、19世紀半ばにシベリア流刑後の兵役期間をカザフスタンで過ごしたドストエフスキーの関連資料なども

あり、興味深かった。

また、公式プログラムの図書館見学とは別に、午後に市内の公共図書館No.5を訪れた（公共図書館に通し番号が付されており、市中心部には他にNo.8や、改装中の中央図書館などがある）。同館は、集合住宅の並ぶ一角に建てられており、一階建てで、閲覧席が14～15席程度の分館である。書架スペースに比して図書が多いため、書架に入りきらない一部は、机などに積み上げられていた。また、カウンター横には検索端末と並んで目録ケースが置かれており、職員の方に聞いたところ、カード目録はまだ「現役」として活用されていた。

こうした現地の図書館を実際に目にすることができるのも、国際会議に参加する楽しみのひとつである。



▲公共図書館No.5のカード目録(左)とカウンター

来年のIFLA年次大会は8月10～13日に韓国プサン国際会議場（BEXCO）で開かれる予定である。2006年の第72回IFLAソウル大会以来、韓国で20年ぶりの開催となる。日本からも多くの方々に参加され、各国・各地域の図書館関係者と、直接に交流する好機となることを期待したい。

注

1) WLIC 2025 Conference Programme [<https://2025.ifla.org/home/conference-programme/>]（最終アクセス日2025年10月5日）なお、IFLAアスタナ大会の様子は、今年10月22日にパシフィコ横浜で行われた図書館総合展フォーラム「図書館界の国際的議論」でも報告された。
（みうら たろう：JLA 国際交流事業委員会委員長、明治大学）
[NDC10：010.6 BSH：国際図書館連盟]



▲国立博物館の見学(左)と館の外観

IFLAアスタナ大会参加記

鎌田 均

筆者は今大会終了直後から2年の任期でアジア・オセアニア地域部会の委員となったことから、8月17日から大会に参加し、同日の地域部会ミーティングに出席した。今回は任期交代期でもあり大きな議論は見られず、主にこれまでの任期における地域部会の行動計画の実施状況について説明や引き継ぎ事項などの事務的な内容が大部分であったが、新任委員にとっては有意義な機会となった。

8月18日の開会式では、IFLA執行部やカザフスタン政府代表者からの挨拶に加えて、「Kara Zhorga」というダンスなどの現地文化のパフォーマンスが披露され、大会の熱気を高めていた。

同日に“Future-Ready Libraries: Integrating AI in Information Literacy”と題された、AIと情報リテラシーに関するセッションに出席した。現在話題のテーマでもあり、多数の参加者が集まっていた。また、“Public Library of the Year Award”（最優秀公共図書館賞）授賞式にも出席した。受賞したカナダのGabrielle-Roy Libraryのキッチンやピアノ練習室を配した施設をはじめ、最終選考に残った図書館の施設やサービスについて学んだ。SDGsの観点からも既存の建物を改修することが注目されていた。

翌19日には“Media Behavior and News Consumption in the Age of AI and Digitalization”というデジタル

環境下でのニュースメディア情報に関するセッションに参加した。発表で強調されていたのが、虚偽情報の蔓延という問題やデジタルまたはメディアリテラシーの重要性であった。各国においてもマスメディアおよびインターネットにおける虚偽情報の問題に図書館がより積極的に関わろうとしている姿勢が見えた。

ポスターセッションでは、多様なテーマの発表を閲覧し、発表者からの説明を聞き、質問をすることができた。3Dプリンタなどを備えたメイカースペースや、コンピュータプログラミングなどのワークショップの開催が各国で広まっていることを知ることができた。また、マレーシアの公共図書館による子ども向けアフタースクール支援のような、その国の社会独特の活動についても知ることができた。ここでもSDGsは主要なテーマとして扱われていた。個人的には、中国を中心に地方や農村部での図書館活動についての発表がいくつかあり、情報格差、デジタルデバイド解消の点からも関心を持った。

19日のセッション“Libraries Supporting Democracy”でも、デジタル格差や貧困といった社会課題に取り組む公共図書館の事例の紹介があった。そして図書館が政治的問題へ関与することの難しさが示された。同様のテーマは、翌20日の各地域部会共同主催のセッションでも提示されていた。このセッションでは、各地域部会の代表が変動する社会に

おける各地域の図書館が直面する課題を紹介した。例えば米国における禁書の圧力といった知的自由に関わる課題が挙げられた。アジア・オセアニア地域については、4種類の言語に図書館が対応するためにAIを活用したシンガポールにおける取り組みなどの紹介があった。続く個人発表からも世界各国の図書館が直面する課題とそれぞれの取り組みを知ることができた。

今回は途中までの参加であったので、さらなるセッションへの参加や現地図書館訪問などができなかったのは残念ではあった。しかし、会場内で展示されていたカザフスタンの図書館のポスターや報告などで、本国における図書館の現状や取り組みも垣間見ることはできた。

アジア・オセアニア地域部会のメンバーとの会話やポスターセッションでの質疑応答に加え数回のレセプションで、さまざまな国からの参加者と短い時間ながらも交流することができた。普段どうしても自分の日々の仕事の範疇に囚われがちであるが、世界各地の図書館の取り組みや人々の熱量を感じることができた。また、各地の状況や課題などは異なるものの、図書館の普遍的な意義を改めて確認する機会となった。

(かまだ ひとし)

：京都ノートルダム女子大学
[NDC10:010.6 BSH:国際図書館連盟]

ポスターセッション発表のプロセス

松本直樹

IFLAのWorld Library and Information Congress (WLIC)には、これまで何回か参加してきたが、ポスター発表を行ったのは今回が初めてであった。ここでは、ポスター発表の申込から発表までのプロセスを簡単に解説して、読者の今後の参加の参考としたい。

まずは申込である。申込時期は大会によって異なるが、今回は2025年3月にWLICのウェブサイトに情報が掲載された。それを確認してタイトルと要旨を書いて申し込む。その後、5月に受理の結果が通知された。もちろん、受理されないこともある。今回は合計で134件が受理されていた。日本からは海外との共同研究を含めて6件が受理されている。

受理されると8月初旬までにポスターのデジタルファイルを提出する。これは、IFLAのリポジトリで公開される。大会が近づくとポスターを印刷する。どのポスターもカラーで見栄えよく作っているので、できるだけ写真や図などを多用して「映える」ポスターにすることが肝要である。その点で、筆者らのポスターは少し地味だった。ここまでは、大会当日までである。

今回、私は三浦太郎氏（明治大学）等と共著で発表した。テーマは「公共図書館の未来ビジョン」である。内容は、今後の公共図書館がどこに向かおうとしているのかを明らかにするために、関東地方31自治体の図書館サービス計画を収集し、その

ミッションや事業を分析したものである。分析の結果、ミッションレベルでは、基本的な図書館のサービスに加えて、創造や楽しさを重視するなど新たな方向性を見出すことができた。一方で、ミッションで打ち出されたことが、必ずしも事業レベルで具体化されていないことも確認され、ギャップが生じている点も明らかになった。ちなみにポスター発表を見て回ると、こうした研究系のテーマは少数であった。実践事例などを取り上げたものが多い。

発表は大会中盤の2日間である。指定された時間（今回は12時から14時）に、ポスターの前に立って説明をする。多くの参加者が来るので、ポスターの前で立ち止まった参加者を中心に説明する。まずは1～2分程度で簡単に説明して、関心があるようであれば掘り下げた説明をした。その後、質問に答えたり意見交換をしたりする。

さすがWLICであり、世界中の

国・地域の参加者がいた。記憶にあるだけでも、アメリカ、イギリス、イスラエル、カザフスタン、カタール、韓国、サウジアラビア、スイス、中国、デンマーク、ニュージーランド、ノルウェー、パキスタン、フランス、ベトナムなどである。質問は日本の図書館の基本的事項から、分析方法の詳細まで多彩であった。こうしたやりとりから多くのフィードバックが得られたことは意義深い。また、最近、日本に観光旅行で行った、など別の話題で盛り上がることもあった。

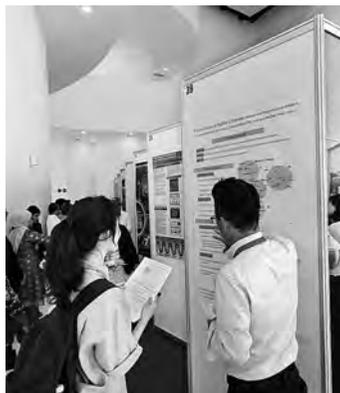
優秀なポスターには、賞が授与される。ベストIFLAポスターとピープルズチョイスの部門がある。これらの受賞者は大会最終日の閉会式で表彰される。

発表してみて、まずは、さまざまな国の参加者と意見交換できた点が貴重な機会だった。また、私たちが無意識に前提としていることを改めて再認識させられることも多かった。そして、特に興味深かったのは、環境が異なるにも関わらず、しばしば問題意識を共有できたことである。とても有意義な機会であり、今後も参加したいと考えている。読者にもぜひ挑戦してもらえたらと思う。日本の図書館の現状を海外に知らせるという意味でも、意義は大きい。

（まつもと なおき）

慶應義塾大学文学部

[NDC10:0106 BSH:国際図書館連盟]



WLIC 2025 カザフスタン「Local History and Genealogy Section (地域史, 系図学部会)」活動報告

長谷川幸代

1. はじめに

IFLAの部会の一つに「Local History and Genealogy Section with the Library Services to Multicultural Populations Section」がある。日本語に訳すと「地域史, 系図学部会」となる。現在この部会のメンバーは、日本4名、中国5名、アメリカ4名、ルーマニア1名、韓国1名、オーストラリア1名、カナダ1名、アラブ首長国連邦1名、セルビア1名、南アフリカ1名の合計20名で構成されている。

主な活動は、毎年開催されるWLIC (World Library and Information Congress) での本会議と事前に行われるサテライトミーティングの実施、定期的なオンラインミーティング、特定のトピックに関するウェビナーの実施である。筆者は、このメンバーの一員として活動しており、今年の89th WLIC 2025に参加した。

2. サテライトミーティング

2025年8月15日(金)にカザフスタンの首都アスタナにあるThe National Academic Library of the Republic of Kazakhstanにて、部会のサテライトミーティングが開催された。このミーティングは、Library Services to Multicultural PopulationsとLocal History and Genealogy Sectionの二つの部会の共催で、世界各地の参加者から、部会の主旨に関連するテーマの報告が行われた。プログラムの内容は、WLICの公式ホームページより公開されている¹⁾。受付後、会場のThe National Academic Library of the Republic of KazakhstanのディレクターであるKumis Seitovaによる挨拶とカザフスタンの図書館での

地域史に関する伝統的、電子的な取り組みについて説明があり、セッションが開始された。セッションは四つに区分され、セッションの合間にはBreak Timeが設けられ、軽食を取りながら参加者同士が交流することができるようになっていた。

セッション内容は、デジタルアーカイブに関連するような内容のものが多く、資料保存と共有においてその重要性が感じられるものであった。筆者は、日本の図書館における「Wikipedia Town」の活動の取り組みや意義について報告し²⁾、この活動が広まっていない他国の参加者より面白い取り組みだと関心が寄せられた。セッション終了後は、ライブラリーツアーが開催され、アーカイブ館の資料展示の見学と解説を受けることができた。

3. セクションミーティング

本会議は、18日から22日にかけて開催されたが、その前日の17日に前述のLocal History and Genealogy Section with the Library Services to Multicultural Populations Sectionのセクションミーティングが行われた。本会議とセクションミーティングの会場は、Congress CenterとHotel Hiltonで、所属するこの部会のミーティングはHiltonのMeeting Roomが会場となった。セクションミーティングでは対面で委員が顔を合わせることができ、和やかかつよりいっそう意欲的な雰囲気が感じられる場であった。新メンバーや事務局の紹介、今後のウェビナーの計画、アクションプランに関する内容が議題として取り上げられた。

4. セッション参加およびブース訪問

本会議であるCongress Programmeでは、非常に多くのセッションと同時にポスター発表が開催されており、あらゆる角度から図書館に関する知見を広げる機会が得られるようになってきている。本部会では、8月19日(火)の9:00-10:15に会場であるCongress Centerにて、「Uniting Knowledge by Tasting the Past: What Culinary Collections Reveal About Local History and Culture」というタイトルのもとでセッションを開催し、3件の発表を行った。地域と料理にまつわるテーマで、フロアとの質疑応答も活発であった。

また、企業や団体のブース出展も多く、情報収集には事欠かない。筆者は、アメリカ図書館協会のブースにも訪れ協会のスタッフと会話を交わし、協会誌の他、協会が発行している学校向けの図書等も閲覧することができた。

注

1) IFLA WLIC 2025 Satellite Meeting: Uniting Knowledge, Building the Future: Libraries Serving Multicultural Communities through Local History and Genealogy

<https://www.ifla.org/events/libraries-serving-multicultural-communities-through-local-history-and-genealogy/> (参照日2025-10-17)

2) Wikipedia Town: Initiatives to develop "regions" and "interactions between people"

<https://repository.ifla.org/items/104f8556-09f4-4d75-94bc-a0b25b840c8c> (参照日2025-10-17)

(はせがわ ゆきよ：跡見学園女子大学)

[NDC10: 010.6 BSH: 国際図書館連盟]

小規模 図書館 奮戦記

その322 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター資料室

震災の経験と記憶を、 資料を通じて伝える

福嶋純之

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター（以下、センター）は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の経験や教訓の継承と減災社会の実現を目的に設立された施設です。震災の被害や復旧・復興の様子に関する展示や語り部による講話、地域防災力の向上や防災政策の調査研究などを行っています。

資料室はセンター西館5階に開設され、主に震災資料（被災と復興に関する文書資料や映像資料、実物資料）の収集・保存活動や閲覧・貸出の手続き、災害や防災に関するレファレンス対応を行っています。来室者は無料で、閲覧や貸出などの震災資料の利用ができます。

○震災資料の活用とデジタル化

資料室では震災資料のうち、当時の状況を物語る資料を一次資料と呼び、現在約200,000点を所蔵しています。これらの一次資料の活用をより推進するために、センターの常設展示・企画展示以外に他の博物館や防災イベントなどへの貸出も行っています。2025大阪・関西万博への貸出も行い、9月15日から18日の4日間、関西パビリオン兵庫県ゾーンで焼け焦げた硬貨や千羽鶴など数点が展示されました。

また、震災資料のデジタル化も進めています。撮影したモノ資料の画像や写真資料のスキャンデータ等を作成して、情報検索システムやInternet Archiveなどのデジタルアー

カイブに公開しています。資料室内には「震災ビデオ変換ラボ」を設置しており、当時の映像が記録されたVHSや8ミリビデオなどを利用者が自らデジタル変換できます。デジタル変換した映像は利用者からコピーをいただき、それを所蔵資料とします。

○図書の特徴と活用

阪神・淡路大震災をはじめその他の災害や防災・減災に関する図書等刊行物を二次資料と呼び、約46,000点が開架に所蔵されています。図書の他にも、発災当時の報告書や公文書、災害対応や防災に関する学術論文、防災イベント関連のチラシなども収集しています。また開架とは別に、河田恵昭センター長が長年関わってきた学術研究会やシンポジウム、研修に使用された資料やその成果等を集約した「河田文庫」を開設しています。

図書等刊行物だけでなく災害・防災関連のDVDやVHSなどの視聴覚資料も収集しており、一部のDVDについては一般への貸出も行っています。学校や自主防災組織での防災教育やセンター見学の事前・事後学習に活用されています。

○次世代に伝える取り組み

資料室内には「ほうさいみらい子ども文庫」が開設されています。この文庫は、次代を担う子どもたちに震災の経験と教訓を伝えるために開設され、国際ソロブチミスト神戸か



ら寄贈を受けた児童書や絵本を中心に、約600点の図書やDVDが集約されています。

夏休みには「夏休み防災未来学校」というセンター全体のイベントがあり、資料室では読書感想文や自由研究の手助けになるよう、「夏休み防災図書コーナー」を設けて児童向け図書の貸出を行っています。また「なりきり！震災資料専門員」というワークショップを毎年開催し、震災資料に触れながら私たち震災資料専門員の仕事を体験してもらっています。今年も、寄贈された震災当時の写真の風景から現在の場所を特定する仕事を体験してもらいました。

○最後に

阪神・淡路大震災から30年が経過し、当時のことを知る人も少なくなってきました。資料室はこれからも震災資料の収集・保存および公開・活用に励み、阪神・淡路大震災の経験や記憶、教訓を次世代へ継承していきます。

■阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター資料室

所在地：兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

開室時間：9:30～17:30

入室料：無料（館内展示は有料）

開室日：月曜日、年末年始

URL：<https://www.drine.jp/library/>
（ふくしま あつし：阪神・淡路大震災
記念人と防災未来センター資料室）

[NDC10：018.369

BSH：阪神・淡路大震災記念人と防災
未来センター]



霞が関だより

▶第265回

●文部科学省

読書バリアフリーのはじめ方ー令和6年度活動報告ー

文部科学省では、地域において、公立図書館、学校図書館、大学図書館、点字図書館等のさまざまな館種の図書館や関係行政組織・団体等が連携した読書バリアフリーコンソーシアムを設置し、物的・人的資源の共有をはじめとしたさまざまな読書バリアフリー推進のための取組を行う委託事業を実施しています。

今回は、読書バリアフリー推進の取組を行っている、国立大学法人東京大学先端科学技術研究センター様にご執筆いただきました。

1. 本事業について

この「学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム事業」は、令和3年度からはじまりました。学校図書館、学識経験者、特別支援教育関係者、公共図書館などの関係者がコンソーシアムを組織し、教育現場における読書バリアフリーの推進に取り組んでいます。これまでに、教育分野での読書バリアフリーに関するグッドプラクティスの収集や、学校図書館を対象に、視覚障害などのある児童生徒向けに作成されたバリアフリー図書・資料の貸出や共有の実態調査を行いました。これらの結果から課題を抽出し、教育現場での取組に還元できるよう、ウェブサイトでの発信や公開シンポジウムの開催を通して、成果の提案・周知活動にも努めています。

令和6年度には、「読書バリアフリーのはじめ方」をテーマに、多くの情報を発信しました。ここでは、その活動内容をご報告します。

本事業のウェブサイト URL :

<https://accessreading.org/conso/>



© 学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム
▲当事業のウェブサイト二次元バーコード

2. これまでの取組と課題

令和3年度から令和5年度にかけて、本事業では、学校や公共図書館などにおける読書バリアフリーのグッドプラクティスを収集し、先進的な取組事例のヒアリング調査を行いました。また、特別支援学校や特別支援学

級・通級指導教室を設置している学校を対象に、学校図書館の設置状況やバリアフリー図書の蔵書状況について全国的な実態調査を実施しました。その結果、一部では、点字図書や拡大図書、デジタルデータなどのアクセシブルな形式による図書の提供や製作、共有が行われている一方で、取組の有無や進捗には大きな格差がみられました。

読書バリアフリーの取組をこれから始める学校図書館にとっては、先進事例のような活動を初期段階から実施することは困難が伴うと考えられます。そのため、こうした学校図書館等が「はじめの一步」を踏み出せるよう、具体的なアクションを示す必要があります。そのため、令和6年度はさまざまなケースを想定し、どのような立場の人や組織が、どのような働きかけで、どのような実践を通じて取組を始めたのかを精査し、「読書バリアフリーのはじめ方」として紹介できるよう整理を行いました。

3. 読書バリアフリーの「はじめ方」

学校図書館には、さまざまな立場の方が関わっています。これまでの調査では、校長先生、特別支援教育コーディネーター、学校司書、公共図書館、民間団体、学校の先生から、読書バリアフリーの取組をご紹介いただきました。今回、それらの取組を再分類し、それぞれの立場の方が、どのような読書バリアフリーの取組を行われ



© 学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム
▲「はじめ方」二次元バーコード

たのか、事例を分かりやすく示したウェブページを公開しました。学校の先生がはじめて読書バリアフリーに取り組む際に、著作権法37条を遵守しながらできるようにフローチャートへのリンクも掲載しています。

「はじめ方」URL：

<https://accessreading.org/conso/howtostart/>

4. シンポジウム

令和6年度の公開シンポジウムでは、「読書バリアフリーのはじめ方」をテーマに、3つの立場の方から取組をご紹介します。

市川市立南行徳中学校教諭・特別支援教育コーディネーターの野口由紀子先生からは、通常の学級や特別支援学級の教育活動の中で読書バリアフリーを組み込んだ事例をご紹介します。教育計画の立案から学校との合意形成、学校司書や教員との連携など、校内での実践と工夫についてお話しいただきました。

東京都特別支援学校読書活動研究会の田村康二朗先生からは、特別支援学校の読書活動充実を目指す研究会の取組をご紹介します。定期的に公開研究会を開催し、各校の実践共有や情報交換を通じて、読書バリアフリーの推進や教員の学び合いの場を作っていることをお話しいただきました。

りんごプロジェクト（NPO法人ピープルデザイン研究所）の古市理代様からは、デジタル図書やアクセシブルな本を体験できる「りんごの棚」についてご紹介いただき、公共図書館や学校、福祉施設などでの出前授業や体験会の取組についてお話しいただきました。

この公開シンポジウムは、令和3年度から毎年オンラインで開催しています。参加者数は、令和3年度が約160名、令和4年度が約220名、令和5年度が約245名でした。令和6年度は見逃し配信希望者を含めて333名から申込まいただき、当日は約143名にご参加いただきました。アーカイブ配信を事前に告知していたため、当日の参加人数は昨年度より減少したと考えられますが、年々申込数は増加しており、読書バリアフリーへの関心が高まっていると感じています。

事後アンケートには106件の回答があり、「公開シンポジウムの内容は分かりやすかったですか？」という設問では、「分かりやすかった」85件（80.2%）、「やや分かりやすかった」17件（16.0%）と、全体の96%以上から高評価をいただきました。また、「読書バリアフリーに向けた支援方法の理解が深まったか」という設問では、105件の回答中「とてもそう思う」67件（63.8%）、「そう思う」38件（36.2%）で、多くの参加者から肯定的な意見をいただきました。自由記述でも、「学校図書館や特別支援教育コーディネーター、公共図書館など、さまざまな立場から読書バリアフリーを広められると知った」「『りんごの棚』について知り、目的や活用、事例が参考になった。設置を希望したい」といった声が寄せられ、テーマで

あった「読書バリアフリーのはじめ方」についても一定の評価を得ることができました。

令和6年度だけではなく、過去の公開シンポジウムのアーカイブ配信も、ウェブサイトで公開をはじめました。動画だけではなく配布資料も閲覧可能です。ぜひご覧ください。

「シンポジウム」URL：

<https://accessreading.org/conso/symposium/>



5. リンク集

情報提供として、みなサーチなど、アクセシブルな図書を探せるリンクの他、著作権法第37条の対象者に該当しているか、判断に迷った際に参考になるガイドライン、わかりやすくする工夫リンク集、読書バリアフリーに関連する情報源など、外部リンクをまとめたページも公開しました。ご活用いただけましたら幸いです。

「リンク集」URL：

<https://accessreading.org/conso/links/>



6. おわりに

令和6年度の公開シンポジウムでは、多様な立場の方々による具体的な取組をご紹介します。読書バリアフリーの実践の幅広さや可能性を改めて示すことができました。参加者アンケートからも、肯定的な評価が得られ、学校現場や地域における読書バリアフリーの普及・啓発に一定の成果があったことがうかがえます。事例収集や情報公開にあたり、多くの方にご協力をいただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

今後も、ウェブサイトや公開シンポジウム、アーカイブ配信などを通じて、学校図書館にかかわる多様な関係者が読書バリアフリーに取り組む際の参考となる情報提供を継続し、より多くの視覚障害等のある子どもたちの豊かな読書環境づくりを支援してまいります。

[NDC10：015.97 BSH：障害者サービス]

オーテピア高知図書館とSDGs

— 地域と未来につながる図書館活動 —

八田裕子

高知県と高知市が共同運営するオーテピア高知図書館は、SDGsに関しても両自治体の方針や施策との整合性を図りながら図書館活動を進めている。

産業基盤が弱く、経済の縮小が続く高知県では、経済を活性化させるためのトータルプランである「高知県産業振興計画」を策定し、2009年度から県勢浮揚への挑戦を続けている。この第4期計画では、重点ポイントとして、「持続可能な地域社会づくりに向け、脱炭素化・SDGsを目指した取り組みを促進」することを掲げ、カーボンニュートラルの実現や、県内事業者のSDGsの取り組みを推進している。

高知市はSDGsの広がりを持続可能なまちづくりの好機ととらえ、市の最上位計画である「高知市総合計画」の中で、市の施策とSDGsを対応させて計画を推進している。SDGsの17のゴールには、「3 すべての人に健康と福祉を」、「11 住み続けられるまちづくりを」など、自治体の究極的な目標と重なる部分も多いため、自治体主体の取り組みを強化することはもちろんだが、加えて、市民や企業・団体等、多様な主体とのパートナーシップにより取り組みを推進できるよう、協力関係を築くことにも尽力している。

オーテピア高知図書館でも、こうした高知県・高知市の取り組みやSDGsの達成に貢献できるよう、「第2期オーテピア高知図書館サービス計画」(2022年度～2026年度)において、SDGsを意識した取り組みを推進することを掲げ、SDGsへの理解を深めるための情報発信や、達成のヒントとなるような資料の紹介を積極的に行っている。

SDGsに関する当館の取り組みは大きく二つに分けられる。ひとつは、SDGsの認知度向上や啓発。もうひとつは17のゴールそのものへのアプ

ローチである。

認知度向上の取り組みとしては、館内での展示があげられる。2020年度にはこどもコーナーにおいて「SDGsってなあに?」と題した子ども向けの図書の展示を、2021年度には「SDGsってなんだろう?」と題した一般向けの図書の展示を行った。「SDGsってなんだろう?」では、17のゴール別の資料を紹介したブックリストを作成し、当館のウェブ・サイトでも提供を行っている。

また、オーテピア館内にある外部機関等がパネル展示を行うことができるスペースでは、JICA 四国によるSDGs事例発表や、高知市消費生活センターによる「買物するときに考えてもらいたいSDGsについて」展を共催するなど、専門機関の強みを生かした啓発を行った。

このほか、県の「こうちSDGs推進企業登録制度」の啓発・普及を目的として、担当課(計画推進課)と連携し、「『SDGs経営』はじめてみませんか?」と題した事業者向けの図書展示や、同課が事業者を対象に年2回程度開催している「こうちSDGs推進セミナー」の会場に図書館ブースを設け、関連図書の展示や貸出を行うなどの取り組みも行った。

このように、当館では、豊富な情報資源と関係機関との連携、さらには多くの県民・市民が集う図書館の集客力を生かして、SDGsの認知度向上や啓発に貢献している。

これに加え、SDGsが提起する課題へのアプローチも行っている。

オーテピア高知図書館は、「課題解決の支援ができる図書館」を基本方針の一つに掲げている。社会・地域の課題は多岐にわたるが、それらの解決に向け全方位的に目を配りながら取り組みを進めており、その点はSDGsとも大いに重なる。なか



図書展示

左「SDGsってなあに？」

右「『SDGs経営』はじめてみませんか？」



JICA 四国による取り組み事例のパネル展



外部のSDGs関連イベントでの出前図書館

でも当館が力を入れているのが、起業や業務改善、就職・転職等に役立つ資料・情報を提供する「ビジネス支援サービス」と、医療、福祉、防災等に関わる「健康・安心・防災情報サービス」である。それぞれ、数万冊規模の専用スペースを設け、専門機関と密に連携しながら情報提供を行っている。相談会だけでも、就職、引きこもり、就農、がん等、取り扱う分野は多様だ。例えば、毎月館内のグループ室で開催している「若者サポートステーション進路相談会」は、就労の悩みや居場所について若者サポートステーション（サポステ）の職員に相談ができる機会として定着している事業である。高知市内にはサポステの常設の相談窓口があるが、それでもなお図書館での相談会に参加する方がいるのは、図書館がすべての方に開かれ、安心できる居場所として機能していることの表れと言えるのではないだろうか。

また、多文化サービス、バリアフリーサービスなどの利用者に応じたサービスや、来館が困難な方に向けたサービスの提供など、「誰一人取り残さない」ことにつながるサービスも展開している。

バリアフリーサービスでは、複合施設オーテピアの中にある高知声と点字の図書館と協力して、対面音訳サービスやバリアフリー映画会を実施していることも、当館の特色の一つとなっている。

SDGsにおいて、193の国連加盟国がアジェンダを全会一致で採択したことは歴史的な出来事であった。その重みを十分に受け止め、自治体と足並みをそろえて図書館活動を行うことは大事なことだ。だが、振り返ってみれば、図書館は当然の使命として、より良い社会の実現に向けてこれまでも取り組んできた。それ故、当館では、ここまで述べたような取り組みをSDGsの枠組みに当てはめた整理はしていない。

SDGsは2030年をひとつの区切りとするが、我々図書館員は、明日世界が終わるとしても今日リンゴの木を植える。たとえ看板が古びたり掛け替わっても、課題を乗り越える力となる図書館活動が続けることを、私たちは未来に約束したい。

(はった ゆうこ：高知県立図書館)

[NDC10：016.2136 BSH：オーテピア高知図書館]

れふあれんす

三題噺

連載その三百二十五

東京学芸大学附属
国際中等教育学校
総合メディアセンターの巻

多様性を認め合う空間へ

—東京学芸大学附属国際中等教育学校—

◆
渡邊有理子

東京の練馬区に位置する東京学芸大学附属国際中等教育学校は、2007年に附属大泉中学校と附属高等学校大泉校舎を統合・再編し中高一貫校として開校しました。2010年には全国の国公立中学校・高等学校・中等教育学校では初めて国際バカロレア（International Baccalaureate：以下IB）校に認定されています。IB教育は、多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者の育成を目的としています。

本校は全校生徒約730名のうち、4割は帰国生または外国籍の生徒です。出身および滞在国は56か国に及び、図書館では2年に一度全校生徒を対象に「母語支援アンケート」を実施しています。その結果をもとに選書をおこない、現在「多言語コーナー」には30か国語の本が並んでいます。



このように多様な価値観、言語、経験をバックグラウンドとした生徒が在籍していることから、メディアセンターでも「多様性を認め合う空間」をコンセプトの一つとして運営しています。帰国生のレファレンスでは当然知っているであろう、ということを探ねてくることもあり、思わず吹き出しそうになることもあります。そんなことも知らないの？という表情や言葉、態度は厳禁

です。どんな問いにも丁寧にということを心がけ、知らないことを知る楽しさを感じてほしいと思いつながら対応をしています。そんな日々のレファレンスから三つの事例をご紹介します。

その1

お盆に帰ってくる人って？

国語の先生が帰国生の授業で「お盆に帰ってくる人って知っていますか？」と尋ねると、生徒の一人が「え？サラリーマン？」と答えました。先生が「亡くなったご先祖様ですよ！」とお盆の説明をはじめようとすると「死んだ人が戻ってくるってどういうこと？怖い～、ホラーだ！」と教室が大騒ぎに。しかしこの授業をきっかけに、お盆についてもっと知りたいという生徒がカウンターにきました。

帰国生の日本語のレベルはさまざまですが、なかには漢字にルビがふっていないと読むことが難しい生徒もいます。このため帰国生のレファレンスでは、なるべくルビ付きの資料も含めて紹介するようにしています。最初に紹介したのはポプラディア情報館の『年中行事』（新谷尚紀監修。ポプラ社、2009）。図解で盆棚も解説されています。生徒は「果物や野菜も並べて、ここまで心をこめて用意をしたら絶対にご先祖様は帰ってきますね」とますますお盆に関心をもったようでした。「できれば英語で詳しく知りたい」という要望に応え、「Obon: Japan's Lanterns of the Afterlife」（Kurt Rodgers. Independently published. 2025）をすぐに排架しました。中高生が「読みたい、知りたい」というタイミングで資料を手渡すことで、心に芽生えた関心の灯が継続するよう心がけています。

その2

パラオの選挙について知りたい

高2の公民の授業で、さまざまな国の選挙について調べる課題ができました。生徒の一人がカウンターに来て「パラオの担当になっちゃったんです！とにかく情報が少なくて…。大使館のHPには簡単な概要しか書いていな

いし、太平洋協会のHPは20年前の古い情報だった。資料が多い国にあたった人が羨ましい…」と、まずは嘆きとぼやきを聞きくことからレファレンスは始まりました。

最近の中高生は本で調べるより先にネットの情報にアクセスします。このため高校生がレファレンスで来たときは、ある程度ネットで調べたものの情報が見つからず、困り果てているケースが多くなりました。まずは館内の蔵書で世界の選挙について書かれている本を確認すると、目次を見ても欧米やインド、ブラジルなど、ある程度人口の多い国々しか掲載されていません。『マイクロネシアを知るための58章』（印東道子編著、明石書店、2005）でパラオの記述を確認しましたが、選挙についての項目はありませんでした。インターネット上では、2024年のパラオの大統領選挙の結果報告ばかりです。生徒も「司書さんほらね、ないでしょう？」と情報の少なさに同意を求めてきました。「では国立国会図書館のデジタルコレクションも確認してみよう！」と「パラオ」「選挙」で検索してみると、雑誌『パシフィックウェイ：太平洋諸島の情報誌』太平洋協会発行の149号に「パラオ総選挙報告」という記事（永続的識別子 infondljp/pid/11460309）が見つかりました。記事では4年に一度総選挙が実施され、正副大統領に加え上・下両院の国会議員の選挙詳細が6ページにわたって報告されていました。

「わ～、国立国会図書館のデジタルコレクション、使ったことなかったです。こんなにいろいろ資料があるなんて。これからはぜひ使います！」と生徒は大喜び。入手できたPDF資料を活用し、後日発表は無事できたと報告に来てくれました。国立国会図書館のデジタルコレクションは、紹介しただけではなかなか活用は広がりません。実際に使って資料を入手できた満足感こそが、次の活用につながっていくとあらためて感じました。

その3

人工的に人間の能力を強化させることについて書かれた資料はありますか？

中3の英語の授業で、毎年「生命倫理」についての探究を行います。グループに分かれ「安楽死・尊厳死」「クローニング」「ゲノム編集」「出生前診断・代理出産」「ドーピング」など、それぞれのキーワードから一つ選択をするのですが、今年はさらに「AI診断」と「美容整形」のキーワードが加わりました。

しかし「美容整形」を選んだグループは、外見の美しさを求める人体改良に関心が集中してしまい、担当教員から「もう少し範囲を広げ、人間の能力を強化させることについて書かれた資料も用意してほしい」という追加の相談がありました。ここでいう整形とは、「医学的に病気の人の現状を回復させるために開発された技術というよりは、人間の能力をより増強するための技術で、イメージとしては人造人間みたいな感じですよ」とのことでした。「人造人間？アニメやSF小説ではありそうだけど…」と頭をめぐらせていたとき、はたと思い出した本がありました。書架からとりだしたのは『スーパーヒューマン誕生！：人間はSFを超える』（稲見昌彦著、



NHK出版、2016）。帯には「人間拡張工学の最前線に迫る」とあります。テクノロジーを使って人間の能力を高めるというこの「人間拡張」というキーワードは、依頼された資料を探すのに適しているようです。

国立国会図書館サーチで「人間拡張」を検索すると58件の図書がヒットしました。この中にある『ネオ・サピエンス誕生』（服部桂他著、集英社インターナショナル、2022）は練馬区の公共図書館から借りることにしました。さらに朝日クロスサーチで「人間拡張」について検索をすると、朝日新聞のウェブメディア朝日 GLOBE+に「人工感覚器の革新「補う」から「身体拡張」へ」-技術の力で身体拡張、「ドラえもんに頼るのび太ではない」と専門家「さて何の例え？」（2022年6月21日公開）という特集記事が見つかりました。この記事から国立の人間拡張研究センターがあることがわかりHPを確認すると、センター組織は2025年3月末で終了していたのです。しかし同センターの英語名称 Human Augmentation Research Center から「人間拡張」という単語が“Human Augmentation”だとわかりました。

今回の授業は英語の授業なので生徒たちには和書はもちろん英文資料も必要です。資料のカートには、当初「美容整形」“Cosmetic Surgery”と表示していましたが、ここに“Human Augmentation”という単語を加えました。すると、生徒が「Augmenting Humanity」という単語でも情報がでてくるよとネット検索に幅がでて、ディスカッションの視点も個人的美的追求から、人間拡張の技術と倫理観、未来の人類の姿へと広がるようになりました。まさに教員が求めていた生命倫理の視点へとつながっていったのです。多言語のレファレンスは一筋縄ではいかないことも多いですが、ネット検索が最優先となった中高生にとって、関連資料の提供と共に、キーワードを提示することも探究の大きな一歩になることを実感したレファレンスとなりました。

注）朝日新聞 GLOBEは、毎月第一、第三日曜の朝刊に The AsahiSimbun GLOBEとして中綴じされており、同記事は2022年6月19日の紙面上で「〈補うを超えて〉」こまで来た感覚器の「身体拡張」この先は」というタイトルで掲載された。

（わたなべ ゆりこ：東京学芸大学附属国際中等教育学校図書館）

[NDC10：015.2 BSH：レファレンス ワーク]



お宝紹介!

第254回
小平市中央図書館

平櫛田中文庫

—好奇心あふれる彫刻家の本棚—

柴田朋彦

1. はじめに

小平市は、東京都多摩地域に広がる武蔵野台地上に位置しています。東京都心から20~30kmという距離にあり、ベッドタウンとしての性格が強い街です。玉川上水緑道や野火止用水などで構成される小平グリーンロードは、自然豊かな小平市の代表的かつ大きな魅力のひとつとなっています。

2. 小平市中央図書館について

小平市立図書館は、昭和50(1975)年に開館し、今年で50周年を迎えました。また、現在の中心館である「小平市中央図書館(以下、「中央図書館」)」は、昭和60(1985)年に開館しました。

「はいりやすく、親しみやすい図書館」「簡単な手続きで利用できる図書館」「資料のそろっている図書館」を基本方針に掲げ、市民に開かれた図書館運営を目指しています。中央図書館のほかに七つの地区図書館、三つの中央図書館分室があり、市内のどこからでも、歩いて行ける環境を実現しています。

地域資料の収集・保存にも力を入れており、古文書や郷土写真などを含め、所蔵資料は42万点ほどとなっています。今回ご紹介する「平櫛田中文庫」も、中央図書館を代表する特別なコレクション

ンのひとつであり、このほかに久下司氏の旧蔵書である久下文庫、伊藤好一氏の旧蔵書である伊藤文庫も所蔵しています。

3. 平櫛田中(ひらくし でんちゅう)とは

平櫛田中(本名:田中倬太郎)は、明治5(1872)年、岡山県後月郡西江原村(現在の井原市)に田中家の長男として生まれました。11歳のとき、平櫛家の養子となり、以後は「平櫛倬太郎」として育ちます。

大阪在住時に人形師・中谷省古(1837~1912)のもとで木彫の基礎を学び、明治30(1897)年に上京。彫刻家として活動を進める中で、田中と平櫛の両家の姓を合わせ、「平櫛田中」と号するようになりました。

その後、高村光雲(1852~1934)やその門下生との交流を深める一方、岡倉天心や西山禾山の思想的影響も受け、「伝統」と「近代」の融合を志す精神性豊かな作品を制作していきます。

代表作に国立劇場に設置された木彫の大作《鏡獅子》があります。昭和37(1962)年には文化勲章を受章し、107歳で生涯を閉じるまで創作を続けたその生き様と芸術は、今なお高く評価されています。

昭和45(1970)年に小平市へ転居し、昭和47(1972)年には小平市名誉市民となりました。晩年の約10年を当地で過ごし、その旧宅は現在「小平市平櫛田中彫刻美術館」として公開されています。

4. 平櫛田中文庫とは

平櫛田中が生前所蔵していた書籍を、孫である平櫛弘子氏(現・小平市平櫛田中彫刻美術館長)より恵贈いただき、小平市立図書館において平成28



▲小平市中央図書館



▲平櫛田中文庫書庫(非公開)

(2016)年より一般公開しています。

蔵書は約1万5千点に及び、大型の美術書や古典籍など、ジャンルは多岐に渡ります。中には田中自身の書き込みや親交があった作家たちの直筆のサインが記されているものもあります。

蔵書の検索は小平市立図書館ホームページから可能となっています。資料は中央図書館2階の参考室にて閲覧いただけます。

5. 平櫛田中文庫コレクションのご紹介

平櫛田中文庫には、美術、仏教、漢詩、東洋古典、文学など、平櫛田中の関心の広さを示す多彩な蔵書が収められています。中でも以下に挙げるような貴重な資料は、学術的価値はもとより、田中の芸術観や精神を知るうえでも重要な手がかりとなります。

①『絵本江戸土産』四編 一立齋(歌川)広重

今から175年前にあたる嘉永3(1850)年に発行された彩色刷の江戸の名所図会です。本資料は本体に加え、もともと入っていた袋も現存します。四編では多摩地域も多く描かれており、小平市周辺では小金井桜が取り上げられています。



『絵本江戸土産』袋(左) 表紙(右)

②『大観作品集』日本美術院

横山大観の作品集で、ちょうど100年前にあたる大正14(1925)年に刊行されました。田中と同様に、大観も岡倉天心に師事し、日本美術院の創立に参画しました。この日本美術院には田中も参加しています。見返しには「謹呈 平櫛田中君 大観」とあり、本資料が横山大観から平櫛田中に贈られたものであることを示しています。

③『仮名変体集』伊地知鐵男・橋本不美男

昭和45(1970)年に刊行された連綿体の変体仮名を判読するための字書です。この資料には田中の直筆で「こんな重宝なものがあったのに／昭和45年3月19日／三越から／九十九歳 倬太郎誌す」と、記されています。100歳を目前にしてもなお、学ぶことをやめず、自分の興味に真摯に向き合う

姿勢が読み取れます。

6. デジタルアーカイブでの公開

小平市立図書館が運営する「こだいらデジタルアーカイブ」では、平櫛田中の代表作《鏡獅子》の3D画像をはじめ、彫刻作品や書跡資料、平櫛田中文庫の一部資料をインターネット上で公開しています。自宅にいながら平櫛田中の芸術世界に触れることができる貴重なコンテンツです。



《鏡獅子》(「こだいらデジタルアーカイブ」)

7. おわりに

平櫛田中は、小平市を代表する芸術家のひとりとして、数々の作品とともに貴重な蔵書を私たちに残してくださいました。また、その蔵書を恵贈くださった平櫛弘子様に、心より御礼申し上げます。

本コレクションが、美術のみならず幅広い分野における研究や学びの一助となることを願ってやみません。

■参考文献

- ・平櫛田中著、本間正義聞き手、小平市平櫛田中彫刻美術館編(2022)、『平櫛田中回顧談』。中央公論新社。
- ・小平市平櫛田中彫刻美術館(2014)、『平櫛田中 作品集』。小平市教育委員会。
- ・平櫛田中【作】(2019)、『平櫛田中 美の軌跡』。井原市立田中美術館。
- ・小平市平櫛田中彫刻美術館、井原市立田中美術館。(2010)、『岡倉天心と日本彫刻会』。小平市平櫛田中彫刻美術館。
- ・藤本幸夫編(2021)、『書物・印刷・本屋』。勉誠出版。

■こだいらデジタルアーカイブ

<https://adeac.jp/kodaira-lib/top/>

■小平市立図書館

<https://library.kodaira.ed.jp>

(しばた ともひこ：小平市中央図書館)

[NDC10:090 BSH:1.図書館資料 2.小平市中央図書館]

図書館員のおすすめ本⑩

時が止まった部屋 遺品整理人がミニチュアで伝える孤独死のはなし

小島美羽ミニチュア制作・文 加藤甫写真 原書房
2019 ¥1,400 (税別)

誰しも突然、一人きりの部屋で、ひっそりとこの世を去ることになるかもしれない。主を失った部屋は、そのときの状態で残り続け、タイトルの通り「時が止まった部屋」となる。

本書では、孤独死した人々の部屋がミニチュアで再現されている。遺品整理・特殊清掃員として働いている著者が、孤独死の現状を世の人々に知ってもらうために作ったものだという。これらのミニチュアは、すべてが実際のままではなく、いくつかの部屋の特徴を合わせて作られている。

ふらりと主が帰ってきそうなくらいに、生活感の残る部屋。暮らすうちにゴミに埋もれてしまった部屋。主が湯船に浸かったまま亡くなってしまった部屋。部屋全体には異変は無いのに、黒々と布団に残った体液が、主が発見されるまでの長さを物語る部屋。

本書に登場する緻密なミニチュアの数々は、その部屋に暮らした主が、確かに生き、生活を営んできたことを物語っている。「孤独死」はすでに社会問題の概念と化し、当事者の姿は見えにくい。しかし、本書を開くと、それぞれの部屋に息づいていた命の重みを感じる。

日本各地で過疎化が進み、昔からあった隣近所との付き合いも、現代では減ってきている。今後ますます、孤独死は深刻化していくだろう。著者は、孤独死を自分事として切に捉え、心に浮かんだ人に声をかけたり、顔を見に出かけてほしい、と訴える。

図書館に配属になる前、福祉の部署で、身寄りのないまま亡くなった方の家を清掃した経験がある。そのときの気持ちを忘れず、当事者に寄り添いたいと考え、本書を紹介した。本書に出てくるような「時が止まった部屋」が、この世から少しでも減ることを願わずにいられない。

(関矢麻由美：長岡市立中央図書館)

サブカルチャーのこころ オタクなカウンセラーがまじめに語ってみた

笹倉尚子、荒井久美子編著 木立の文庫 2023 ¥2,200 (税別)

漫画、アニメ、アイドルなど日本では「オタク文化」とも呼ばれるサブカルチャー。人々を魅了するこの文化が多くの人にどのような影響を与えるのか、現役カウンセラーたちが探求する一冊。

第1章ではハマるきっかけに注目している。例に挙がる『鬼滅の刃』は、新型コロナウイルスによって生活が制限された時期でも多くの人が夢中になった作品だ。「未知の存在に怯え、制限がある生活」という、当時の情勢と作品との間にあった「共通する境遇」が多くの人を惹きつけたのだろう。共通の何か・誰かが残す言葉・抱える葛藤などさまざまなことをきっかけに「好き」が生まれる。そんなきっかけとなるものが多いという点もサブカルチャーの魅力なのかもしれない。

第4章では創造・表現することに焦点が当てられている。オリジナル作品の創造は「こうなってほしかった」という理想を実現するための手段の一つである。また、ネット上での作品投稿や自身の情報発信は自分を表現し、他者とつながる手段でもある。「なにかを創る、表現するという行為は、受け取り手があつてのことなのです。」(p.225)とあるように、「好き」を誰かと共有するため・自身を誰かに認めてもらうための手段だと感じている人が多いのかもしれない。サブカルチャーは自分が応援したい存在であり、自分を表現するための存在にもなっているのだ。

「こころ」はその時々々の境遇や世情など多くの影響を受ける。些細なきっかけから「好き」を見つかけたり、誰かと共通の「好き」でつながったり、表現することで同じ境遇の人とつながっていく。多くの人にとって、新たな発見や出会いのきっかけになっているのだとしたら、サブカルチャーは心や人生における、手がかり・つながりをもたらす存在となり得るのかもしれない。

(西川美羽：北海道幕別町図書館)

図書館員のおすすめ本⑩

広島平和記念資料館は問いかける

志賀賢治著 岩波書店(岩波新書) 2020 ¥860(税別)

広島平和記念資料館を訪れたことがあるだろうか。通称、「原爆資料館」としても知られている。この資料館は、1945年8月6日に原子爆弾が投下された広島の実相を伝え、被爆の記憶をつなぐ使命を担ってきた。

本書は、元館長である志賀賢治氏が、資料館の存在意義を考え続けてきた軌跡である。被爆の記憶をどう伝え残していくのかという課題について真摯に向き合っている。資料館は2019年に本館展示が全面更新された。それまでの展示を更新するにあたり、16年という長い時間をかけ、検討と議論が積み重ねられてきた。

この夏、私は二度目となる資料館訪問に出かけた。初回の訪問は、十年以上前になるが、全面更新前の展示も忘れることができない。凄惨な被爆再現人形を展示するなど、映像や立体模型などで原爆の威力を感じさせられた。それらの展示が更新された現在は、あの日の広島で生活していた「人間」に焦点が当てられ、犠牲となった一人ひとりの苦しみや遺族の悲しみを表現することに重点を置いている。

本書の中で紹介されている「フォーラムとしてのミュージアム」という言葉は、「未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所」(p.217-218)という意味である。著者は、未来の資料館に思いを馳せ、「広島を訪れる世界の若者たちが、この地で未来の創造を考え、議論を始める、資料館にはそんな場所であって欲しい。」(p.219)と望んでいる。

この本は、資料館を訪れたことのある人にも、まだ訪れたことのない人にも等しく問いかけている。被爆した広島をどのように残していくのか——。その問いの答えとして、この本から対話をはじめよう、そう思わせてもらった一冊である。

いわおかあきこ
(岩岡朗子：埼玉県立浦和北高等学校)

僕には鳥の言葉がわかる

鈴木俊貴著 小学館 2025 ¥1,700(税別)

森に響く鳥のさえずりは、単なる「雑音」ではない。本書は、鳥の声を「意味ある言語」と捉え、コミュニケーションに迫る鈴木俊貴氏の研究を紹介する。これは、一見難解ながら、私たちの身近な自然が誰も解き明かしていない言語世界に満ちていることを示している。科学の大発見が遠い場所ではなく、日常のすぐそばに潜んでいるという知的興奮に満ちた気づきを読者に与えるだろう。

本書では、フィールドワークや音響解析の過程が、臨場感とユーモアをもって語られる。鳥たちの声の背後にある「意味」を地道にひもとくプロセスからは、研究対象への深い愛情と、真理を追求する情熱がほとばしる。研究者が本気で語ることは、何よりも面白い。その真摯な語り口は、知的好奇心の原点にある根源的な魅力を再認識させてくれるものだ。

そして何よりも印象的なのは、華々しい成果の背後にある泥臭いまでの地道な努力である。重い録音機を背負っての長時間の観察、気が遠くなるほどの膨大な音声データとの格闘、失敗を繰り返す仮説と検証の積み重ね。評価される結果の裏には、圧倒的な時間と労力がかけられており、「近道は存在しない」という、すべての創造的な営みに通じる真理を、本書は静かに力強く教えてくれる。目標達成には粘り強い継続が必要であるという普遍的な教訓が胸に迫る。

本書は、鳥の言葉を理解しようとする試みを通して、「わかろうとすること」そのものの価値を私たちに伝える。自らとは異なる存在の声に真摯に耳を傾け、彼らと共に生きるための想像力を育むこと。それは、分断が叫ばれる現代社会において、ますます重要となる普遍的な営みである。科学の本であると同時に、他者理解への静かな道標として、読者の心に深く響く一冊となるはずだ。

くまのたいよう
(草野太陽：宇都宮市立南図書館)

[NDC10:019.9 BSH:書評]

図書館員の本棚

これからの図書館情報学

人工知能と共生する図書館

山本順一、前川和子、松戸宏予編

東京：有斐閣

2025. xv, 274p - : 19cm

(y-knot. Musubu)

ISBN：978-4-641-20017-3：¥2,000（税別）

NDC10：010

BSH：図書館情報学

「はしがき」に、本書は図書館に興味を持っている人や、図書館員になりたいという人を対象としているとあるため、初学者向けの入門書かと思っただけで読み始めたのだが、期待はすぐにみごとに裏切られた。本書の帯に「学問を通して社会とつながろう」とある。こちらの方が適切に本書の性格を表しており、公共図書館を中心に図書館と社会との関係を展望した本である。

本書は3部に分かれている。第1部「図書館の役割と機能」では、図書館と社会との関係について、7章を充てて知識と情報、技術、法等、言ってみれば知っておくべきポイントを取り上げている。しかし本書の特色はテーマというよりその取り上げ方にある。

第1章は「社会のなかの図書館・図書館員」という章題なので、導入として図書館の社会的機能や図書館員の役割について書いているのだろうと思っていたところ、図書館員の非正規問題と指定管理者制度の問題から始まったので驚いてしまった。いきなり問題提起である。

読者に問題を提起し、議論を誘う論述は本書の随所に見られる。第3章では図書館における知的自由を論じているが、単なる「図書館の自由に関する宣言」の解説ではない。出版社からの訂正要求やデジタルネットワーク時代の個人情報の扱いといった今日的な課題を論ずる中に、

「図書館の自由が『国家権力からの自由』を目指すということはすでに述べたが、もう一步進めて、『国家権力を監視する』という価値を見出せないだろうか」(p.44)といった踏み込んだ問題提起がなされている。

情報組織化を論ずる第5章とIT技術を扱う第6章は、また違った意味で読者に挑戦している。ダブリンコアやOAI-PMHはともかく、RDFやMODSなどテクニカルタームや略語が頻出するのだ。わからない部分は読み飛ばせば良いのだけれど、図書館関連IT技術に関する読者の知識が試されているのは間違いない。

本書のもう一つの特色は米国との対比の中で日本の現状を論じていることで、取り上げ方はまちまちだが、特に第2部と第3部で顕著である。

第2部を構成する3章では「苦悩する市民社会と図書館」として、格差、マイノリティ、デジタル・シティズンシップといった社会課題に対する図書館の貢献可能性を論じている。IFLAとUNESCOによる二つの宣言や米国の事例を主に扱う第8章や、メディア情報リテラシー教育の視点から、大学も含む学校教育への図書館の貢献について触れた第10章と、第2部は焦点が絞られた章が続いている。中でも第9章は、読書バリアフリー法に至る公共図書館による障害者への対応の歩みを述べ、基本的な考え方が変わったことに触れて、そこから見た図書館のバリア



を整理して論ずるなど読みごたえがある。

第2部と第3部に明確な区分があるわけではないが、強いて言えば第2部が格差等対処すべき社会課題と図書館との関係を述べているのに対し、第3部は個人や社会の成長・発展への図書館の貢献を述べている。

第11章のキャリア支援や第12章のフィナンシャル・リテラシーは類書ではなかなか目にしないテーマである。第11章はホームレス支援から始めているのがユニークで、おのずから米国が中心になっている。一方、フィナンシャル・リテラシー教育は日本で話題になっていることもあり、日米でバランスの取れた記述である。

本書は米国の事例を参考に、社会のさまざまな課題に図書館がどう向き合うのか、向き合っているのか、向き合うべきかを論じた本である。現職者は本書の問いかけにどう答えるか考えながら読むのが良いだろうし、授業で取り上げるとしたら、本書を材料に討論してはどうだろうか。

最後に補章として米韓の図書館政策が取り上げられている。できれば日本についても触れてほしかったが、社会との関わりを問いつける本書を図書館政策で締めくくるのはうなずける。

（田村俊作^{たむらしゅんさく}：慶應義塾大学名誉教授）

図書館員の本棚

学校図書館を活用した楽しい読書ワーク

読書活動・探究学習を支援する

木下通子編著

東京：学事出版

2025. - 131p：21cm

ISBN：978-4-7619-3076-9：¥2,200（税別）

NDC10：017.4

BSH：学校図書館；図書館利用；読書指導



14の楽しい読書ワークで、多様な本との出会いを

「こんな本あるんだ、おもしろそう!」「ネットより本の方がわかりやすい!」

生徒に本を紹介すると、そんな驚きと喜びが混じった声を聞くことがよくあります。

私の勤務する高校の図書館では、授業等で調べものをする際、多くの生徒はまずタブレット端末からインターネットで検索しようとしています。本よりインターネットの方が手軽に扱えるからでしょう。しかし実際には、キーワードが思いつかず情報にたどり着けなかったり、インターネットの断片的で大量の情報に戸惑ったりと、次の段階になかなか進めない生徒も多く見られます。

そんなときは学校司書が生徒を書架まで連れて行き、「こんな本はどう?序章には意味、第2章には原因、終章には解決策が書いてあるよ」と本を開いて目次を見せ、内容を紹介します。するとほとんどの生徒は、「内容がまとまっていてわかりやすい!」と借りていくのです。その様子を見て「本の良さを知らないだけでは?もっと多様な分野の本に出会ってほしい」と常々思っていました。

そんな中出会ったのが本書です。埼玉県为学校図書館界を牽引して来られた木下通子さん、埼玉県の学校司書と先生が協同で執筆。現場での実践を元に、グループなど複数の人が、楽しみながら、多様な本と出会うことができる14のワークが紹介さ

れています。巻末にはダウンロードしてすぐ使えるワークシートも付いています（公共図書館や書店等でのイベントでも使えそうです）。

例えば「図書館人狼（じんろう）」。各自カードのお題から連想する本を探し、図書館の中をまんべんなく見て回ることで、自分では選ばないような分野の本に出会うことができます。グループで一つだけ「仲間外れ」のお題が混ざっており、持ち寄った本から一冊「仲間外れ」を推測するのですが、当たりはずれの楽しさだけでなく、他者との解釈の違いを味わう楽しさも魅力です。

「くるくる読書」「新書の点検読書」のワークでは、生徒が自分の興味関心を見つけ、キーワードを抽出し、言語化する力を伸ばします。複数の本を短時間で区切って読むことで、本が苦手な生徒もゲーム感覚で気軽にでき、思いがけない分野と出会うことが期待できます。また注目した事柄を言語化することで、自分の興味関心を見つめ直すこともできるでしょう。生徒の進路にも影響を与えるかもしれません。

他にも「運命本ゲーム」「図書館たほいや」「背表紙川柳」など、生徒がお題に対してどんな本や言葉を選ぶのか想像するだけでワクワクしてしまう楽しいワークが満載です。お互いのコミュニケーションを促すワークも多いので、互いの個性を知り尊重することにもつながります。

またそれぞれのワークには、学校司書や先生が実際に生徒にどのような声をかけたのかというリアルな対

話の実例もあり、とても参考になります。例えば「難しい場合は、はじめに選んだ本を変えてもよいですよ」「多少こじつけかなってくらいの方が面白いよ。何かあるはず!」（p.47「運命本ゲーム」より）など、生徒の状況に合わせた声のかけ方が紹介されています。

木下さんは本書の中で「利用者にあわせて読書を伴奏していくのが、学校図書館の大きな役割」（p.15）と述べていますが、本が苦手な生徒がさまざまな本に出会い、自信をつけ、意識が変わっていくためには、まさにこのような大人からの声かけが大切だと感じます。そして、本と出会う「仕掛け」をコーディネートするには、学校司書や司書教諭など、専門的な職員の関わりが大切なのだと改めて感じました。

本との出会いは、生徒の人生に大きな影響を与えるものだと思います。社会に出る前の生徒たちにとって、学校図書館は多様な本に触れられる「最後の砦」です。ここで「本を活用してよかった」という成功体験があれば、大人になっても本や図書館を利用することにつながるでしょう。本書のワークは、そのような貴重な本との出会いを多くの人にもたらし、人生を豊かにするものだと思います。皆さんもぜひ、さまざまな機会に取り入れてみませんか。
(高橋和加)

鳥取県立鳥取湖陵高等学校図書館

公益社団法人日本図書館協会

2025年度通算第3回 (定時第3回)理事会議事録

日時：2025年9月25日(木)

13時30分～16時30分

場所：日本図書館協会会館504会議室、Web会議

理事現員数：20名

出席理事：20名

日本図書館協会会館504会議室 16名：植松貞夫(理事長)、角田裕之(副理事長)、岡部幸祐(専務理事兼事務局長兼出版部長)、曾木聡子(専務理事)、植村八潮(常務理事)(以下同じ)、杉本重雄、鈴木直人、成瀬雅人、平形ひろみ(理事)(以下同じ)、山本昭和、巽照子、大谷康晴、佐藤康之、高橋恵美子、深水浩司、松井俊

Web参加 4名：植田佳宏(理事)(以下同じ)、山口真也(14時より出席)、森いづみ、久野高志

監事現員数：3名

出席監事：2名

日本図書館協会会館504会議室 1名：中山勝文

Web参加 1名：津田顕一郎

欠席監事 1名：松本香

*

1. 開会宣言

植松貞夫理事長(以下「理事長」という)より、開会が宣せられた。

2. 会議成立要件の確認

岡部幸祐専務理事兼事務局長兼出版部長(以下「事務局長」という)より、会場及びオンライン上の画面で本人の出席を確認し、開会時点で理事20名のうち19名(うちWeb参加3名)が出席しているとの発言があり、定款第43条に基づく定員数を満たしているため、会議の成立が確認され

た。

3. 理事長挨拶

理事長より、挨拶があった。また、議事に先立ち、理事就任後初の理事会となる佐藤康之理事の紹介と挨拶があった。

4. 議事録署名人の選出

定款第46条に基づき、出席理事のうち異理事を議事録署名人として選出したい旨提案があり、同理事を意義なく選出した。

■議事

第1号議案 大学図書館部会規程の改正について

事務局長より、資料に基づき説明があった。大学図書館部会規程第6条第2項及び第10条第2項について、2025年4月1日付で「公立大学協会図書館協議会」が「公立大学図書館協会」に名称変更されたことに伴う改正である。特段の意見や質疑はなく、全員の賛成により異議なく承認された。

第2号議案 顧問・参与の任命について

理事長より、資料に基づき説明があった。顧問及び参与について、定款第49条に基づき、理事会にお諮りする。顧問は理事長経験者、参与は副理事長経験者より選出することとし、顧問に塩見昇氏、森茜氏、参与に西野一夫氏、山本宏義氏を再任とすることに加え、今回新たに、前副理事長の鈴木隆氏を参与として任命することを提案する。

なお、顧問・参与とは、本協会の運営について、理事長が相談する、または理事会の諮問に意見する方のことである。

意見や質疑の確認の後、採決は一人ずつとし、賛成多数で承認された。

・塩見 昇
賛成19 反対0 保留0
・森 茜
賛成15 反対4 保留0
・鈴木 隆
賛成18 反対0 保留1
・西野 一夫
賛成17 反対1 保留1
・山本 宏義
賛成17 反対0 保留1

(主な意見など)

山本：承認の仕方について、一人ずつ承認の確認を取ってほしい。

■報告

報告1 「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言ー」について

理事長より、資料に基づき報告があった。本協会では、学校司書が十分に配置されておらず、学校図書館本来の目的を果たせていない現状をかんがみ、9月18日(木)に「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言ー」を公表した。内容としては、「1. すべての学校に、フルタイムで一校専任の学校司書を配置すること」「2. 学校司書を学校教育に関わる職員の一員として処遇すること」「3. 公的な研修を制度化するなど、学校司書の資質向上を保障すること」「4. これらを

可能とするため、学校司書の法的位置づけを明確にする学校図書館法の条文改正を行うこと」という4点である。これを広くステークホルダーに訴えかけ、各方面と連携協力しながら、この実現に向けて持続的に取り組んでいく。なお、この内容については、非正規雇用職員に関する委員会（以下「非正規委員会」という）及び学校図書館部会が作成した「学校司書の配置・処遇等について（見解）」（以下「見解」という）などを参照させていただいた。

本来は理事会で審議・承認後に公表する事項であるが、今回の提言については、9月に開催される「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」（以下「有識者会議」という）に合わせて公表するため、急を要する声明・見解等と判断し、常任理事会で承認いただいた。

続いて、学校図書館部会の高橋理事より、「見解」について説明があった。「はじめに」で学校司書が学校図書館で果たす役割等について、また学校司書の配置がどういう変遷をたどってきているかということ、2023年度に非正規委員会が行った「学校図書館職員に関する実態調査」の自治体向け調査と個人向け調査の結果をまとめたものである。次に、「配置の問題の改善のために」「労働条件の改善のために」「処遇の問題の改善のために」「研修の問題の改善のために」として、それぞれの改善のために必要な項目を示した。「おわりに」では、現行の法制度に触れ、学校司書に学校図書館を「つかさどる」地位権限がないことなどを掲げ、早期に職員制度についての議論がされる必要があること、新たな学校図書館専門職員制度についての関係者の合意形成と関係法令改正への取り組みが必要であるとした。

巽：提言を出していただいたことは地元状況を把握している中で大変心強い。校長をはじめ教職員が学校図書館の役割について認識できてい

ないということが大きく、学校図書館の意義や学校司書が配置されている学校図書館の実践をしっかりと伝えていかなければ、なかなか学校図書館を使って授業をすることや、学校司書を使って調べ学習に生かすことにまでつながっていないという現実がある。それぞれ自治体の公共図書館から発信する必要があると思う。**事務局長**：巽理事のおっしゃるとおりである。今回、この提言を公表したが、この後の具体的なアクションプランについては理事会でもご意見を賜りたい。

理事長：これまで本協会はこういった提言を首長や自治体の教育委員会の方々宛てに出していたが、それだけではあまり効果がないということで、広く子どもを持つ親、あるいはこれから子どもを持つ親に学校の状況を認識していただくことが重要であると考え、今回の提言は内容的には直接的ではないが広く理解をいただけるような表現とした。事務局長が述べたように、今後具体化に向けてどのように努力していくかということが重要である。例えば学校図書館議員連盟や全国学校図書館協議会、地方交付税を扱う総務省に向けて個別に説明にあがるということも含めて、幅広い運動として理解されていくようにしていきたいと考えている。

森：前回の常任理事会に陪席した際も発言したが、長野県において県立高等学校は学校司書の会計年度任用職員の比率は非常に高く、100%配置されているが、特別支援学校や市町村立の小中学校はまだまだというところがある。今回は訴えるターゲットを非常に絞って、「国会議員」と限定的に書かれているが、市町村の学校の改善ということになると、地方議員にも訴えていくことも一つの重要なルートになるのではないだろうか。働きかけていくときによりどころとなるものとして、今回の提言や見解は非常に力のあるものだと思うので、今後の使いどころとして地方

議員にもアピールできるような使い方ができればよいと考える。

理事長：「国会議員」と書いたのは学校図書館法が議員立法であるためだが、おっしゃるとおり地方自治体の議員にも理解していただくことが必要である。今から付け加えることは難しいが、働きかけの対象としては取り組んでいきたい。なお、学校司書を学校教育に関わる職員の一員と位置づけるとなると、地方公務員の定数もあって難しい問題があるかもしれない。このために何が障壁であるかもまだわかりきっていないので、その辺りから活動していきたい。高橋理事には本提言、見解の活用について予定を教えてください。

高橋：9月23日（火）に福岡県で非正規雇用職員セミナーがあったので参加者に配付した。また、次回の『学校図書館部会報』にも掲載予定である。

巽：私の活動でも使わせていただきたい。地元で議員に力になってほしいと話す際に力になると思うし、教育委員会にも本協会からこういった提言が出ていると示せる。堺市では事務分掌に学校図書館担当もきちんと入れてくれている。ただ、保護者に向けて、きちんと学校司書が配置されていることを明らかにしていることは良いことだが、なかなか処遇などが改善されておらず、大阪府でも実現できていないところがある。

植田：10月の全国図書館大会愛媛大会の配付資料には含まれるのか。

理事長：検討する。

植田：愛媛大会には地方議員が来る可能性もあり、教育委員会の参加も予定されている。また全国から来られた図書館関係の方が地元を持ち帰るときに、協会のウェブサイト等まで確認しないという方もおられると思うので、印刷物として配付していただければよい。

自分も司書の問題について教育委員会に意見を言った際に、公務員定数の問題でいうと、学校事務職員の定数が非常に減らされている現状が

あり、司書を配置すると定数が食われてしまうことで、学校事務職員が厳しい状況になるというハレーションが起きると聞いている。こうした点で考えると、今後議員の力が必要ではないかと実感している。資料をオープンにしていればと思う。

報告2 2026-2029年度代議員（個人会員選出及び団体会員選出）選挙の実施について

事務局長より、資料に基づき報告があった。代議員選挙規程の改正に伴い、定数については選挙管理委員会が定めることとなった。選挙管理委員会で、資料の通り定数を確定し、9月22日(月)に選挙の公示を行った。

今回の定数の改正に伴い、代議員の個人会員選挙区については都道府県という形になった。各都道府県の9月1日現在の会員数をもとに代議員定数が割り振られている。個人会員の代議員定数は59名であり、現在の定数から1名減となる。減数1となるのは東京都である。施設等会員の代議員定数は26名であり、現在の定数と変更はないが、第5区の専門図書館が1名減、第6区の市民団体が会員増により定数1が割り振られた。

公示については、『図書館雑誌』9月号発送時に公示文を同封し、協会ウェブサイトに掲載しているが、『図書館雑誌』10月号にも掲載する。選挙日程は立候補及び推薦届出期間が10月15日(水)から11月10日(月)まで、投票期間が2026年2月2日(月)から16日(月)まで、開票日が2026年2月20日(金)、結果の公表が2026年3月2日(月)予定である。施設等会員の第1区から第5区については推薦となっているが、公示とともに推薦依頼を發出しており、推薦期限は2026年2月16日である。

〈主な意見など〉

巽：今回、市民団体が代議員を1人選出できることになっているが、その市民団体3団体について教えてほしい。

事務局長：選挙人名簿は12月下旬頃に協会ウェブサイトの選挙ページにて公開する予定である。その際はまたお知らせする。

報告3 第111回全国図書館大会愛媛大会について

成瀬常務理事より、資料に基づき報告があった。参加申込期限は9月30日(火)だが、9月21日(日)現在、大会参加者が415名であり、極めて低調な状況である。全体会参加者は296名で、会場の定員が1,250名であるため、このままではかなり寂しい状況となる。

分科会については、後日配信を除き第1分科会から第10分科会をリアル開催する。多少のばらつきはあるものの、いくつかの分科会に関しては極めて低調であり、予算・財政的にかなりよろしくない状況が予想される。申込期限を延長することとしたが、皆様にも追い込みにお力添えを賜りたい。開催県内の申込数があり多くない状況だが、愛媛県立図書館の方々が地元を回ってくださり、お声掛けいただいた。その成果が反映されていない段階かもしれないので、もう少し増えることを期待したい。全国の都道府県からの参加者を当日までに少しでも増やすよう、皆様のご尽力をよろしく願う。

また、申込期限前の段階だが、会場の定員に対して極めて充足率の低い分科会に関しては、会場の変更調整をしており、経費の削減を図っている。これを参加者数の増加具合を見ながら、残りの時間で詰めていきたい。

〈主な意見など〉

理事長：現在の時点では参加申込締期限は9月30日となっているが、10月10日(金)まで延長することになった。

深水：今回担当している第7分科会の「専門図書館・健康情報」について、松山市の健康づくり推進課の担当者に周知をお願いした。それでも

なかなか増えない状況である。病院関係の方々にもお話しし、各病院でポスターなどを作れば掲示も行っていきたい。NHKを中心としたメディアでの事前告知はしないのか。

成瀬：全国規模は難しい。愛媛の方での具体的な働きかけはわからないが、愛媛新聞では既に少なくとも1回は記事が載っており、1週間ほど前にそれなりに大きな記事でネットにも掲載してもらった。再度愛媛の方にも働きかけを確認し、できる限りのことをするというで進めたい。

深水：NHK松山放送局には連絡を取っていて、当日の取材は可能だろうと話は受けている。しかし事前に告知しなければ集客力にはつながらない。おそらく最も訴求力があるのはNHKだろうから、愛媛の方で何とかしていただけないだろうか。もう一つは全体の説明はできても分科会まで細かく告知していただけるかどうか心配である。この辺りのところはもういくつかは回っているが、なかなか効果が出ないというのが歯がゆい状況ではある。

成瀬：『図書館雑誌』の発行のタイミングと大会の申込期限あるいは会期自体の調整を、来年以降には考え直していきたい。『図書館雑誌』9月号にはそれぞれの分科会の内容が詳しく書かれている。まずはそれを見た個人会員の申し込みが増えることを期待しつつ、図書館関係の企業には、私が個人的にお願いをしている。四国関係からはかなり動員をしてくださるということだが、各企業で中四国にどれぐらいの人数が配置されているかを考えると飛躍的に増えたいと思えないので、個別に声をかけたいと思う。予算的に1人しか参加させることができないという図書館もあると聞いている。現場はそういった状況を把握したところである。

森：こちらにも昨日『図書館雑誌』が到着し、それをきっかけに所属館内でやっと1人派遣するというこ

を今日決定したが、旅費的にギリギリである。この後の議題にも関わることだが、全国図書館大会を地方で開催する意義というのは、近くでの開催は参加しやすくなるということが大きく、頑張ってみようかと思える一つのモチベーションになる。今回は愛媛県が厳しい状況の中で引き受けてくださったので、地元中四国の皆様は日帰りでも参加できる方が多いのではないかと。そういう地方開催のメリットで声掛けが広まるとありがたいと思う。申込期限については延長していただきありがたい。あと10日間ほどの追い込みで頑張れたら良いと思っている。

植田：以前中国地区にいたので広島県の公共図書館の総会に参加し、日帰りでも十分大丈夫とお話しをした。分科会後の「日本図書館協会会員の集い」では、「図書館人としての学びを考える」というテーマで、松山大学の学生にも参加してもらう予定である。全国図書館大会に地方から来てもらうことは難しいだろうし、なぜ大会に行かせる必要があるのか、研修プログラムをしっかり作る必要があると思う。今回、会員の集いで県立図書館としての研修プログラムと市町村立図書館の研修プログラムのたたき台を作って、それをもとにグループ討議をしていただき、発表してもらうような形にする。そこに学生も入り、図書館で働いている人が学んでいることを知ってもらい、学生にとってのロールモデルとなるような大会ができると喜ばしい。また、高知県からは、マイクロバスをチャーターして愛媛県まで来ていただけるという話を伺っている。来年の石川大会でもそれぞれの県のブロックでまとまって行けるとよいのではないかと。

報告 4 2027年度以降の全国図書館大会開催について

事務局長より、資料に基づき報告があった。8月1日(金)から22日(金)の間で2027年度以降の全国図書館

大会の開催について、直近の開催県(4県)を除いた43都道府県に照会を行った。その結果、福井県から2030年度もしくはそれ以降であれば開催が可能とご回答いただいた。また、開催をご検討いただけると回答があったのは、長野県、高知県、佐賀県、鹿児島県の4県で、佐賀県が2029年度、長野県が2031年度以降、高知県が2032年度以降、鹿児島県が2033年度以降とご回答をいただいている。なお、開催が困難と回答いただいたのは38都道府県である。理由としては、文部科学省の図書館地区別研修等、主催を担当する時期が決まっている行事の負担が大きく、全国図書館大会を主催する余地がないということであった。公共図書館部会においても、全国公共図書館研究会(以後「研究会」という)の担当が持ち回りで行われており、今後これらの開催方法等、全国図書館大会の開催と併せて考えていく必要がある。

今回の照会で、2029年度以降はいくつか開催可能と回答をいただいたが、2027、2028年度については現在のところ開催候補県がなく、めどが立っていない。至急検討が必要である。

また、今後の全国図書館大会の開催に向けて、運営形態や開催の方向性について、執行部としても検討を進めていきたい。運営形態については、将来の開催計画(開催地の決定等)、大会要綱の作成、運営マニュアル等の整備、大会の記録の保存・管理など全国図書館大会の開催に関する基本的な事項を所掌する全国図書館大会委員会を設置したい。その元に開催年度ごとに組織委員会を設置して、該当年次の開催計画、実施計画を作成し、大会を実施する。また、組織委員会の中に実行委員会とプログラム編成を考えるプログラム委員会を設けてはどうか、と考えている。

今後の開催方針としては、開催自治体の負担軽減を考えなくてはならない。コンパクト化を図り、経費を縮

減する。また分科会開催方法とプログラムの見直しを行うことで、会場確保の負担を減らす検討を進めていく、といった開催についての具体的なパッケージのようなものを作ったうえで、各都道府県に全国図書館大会の開催についてご検討いただけないかと話を持っていけるように進めていきたい。今回の照会を行うに合わせて、各地区選出理事の皆様にもそれぞれの地区で開催について働きかけ等を行っていただきたく、お願いしている。

〈主な意見など〉

巽：近畿地区について、例えば、大阪府、京都府などでは長年開催されていないということが話されていたらしい。そうであれば、執行部と理事が共に直接出向いて顔を合わせて話をすれば動いたのではないかとという感触があった。アンケートでは、「現時点では開催は困難」という回答が多かったが、地方の理事だけでは負担が大きいため、やはり執行部と一緒に2027年度以降の開催について働きかけていくのはいかがだろうか。

事務局長：文書での発出により実際の大会開催における負担感の説明が不足していたことは認識しており、今後の大会開催のあり方として開催する都道府県の負担がどういふものか、実際どういふ形で運営をするのかを説明できる資料を用意したうえで、近年開催されていない、または開催期間が空いている都道府県については個別に執行部が直接お願いにあがる必要があることも認識している。ただ、今回の照会の結果で開催できるという回答がなかった2027年度2028年度については、今からお願ひにあがっても厳しいということを感じている。

山本：愛知県図書館に電話で問い合わせたが、既にアンケートを回答しており、現時点では困難とのことだった。聞いたところによると近々改修工事が入るためできないとのことだった。会場は県図書館でなくて

もできるし、職員も県の職員だけではなく名古屋市職員等も巻き込んで実行委員会形式でやってはどうかと話をしたが、良い返事はもらえなかった。アンケートに漠然としたことしか書かれておらず、一体どのくらいお金がかかるのか、何人ぐらいの人員が必要で、といったことがわからないので、回答の際にとりあえずやめておこうというような回答が多かったのではないだろうか。例えば、過去の実績をお知らせすると各都道府県も見通しが立つと思う。

山口：私もアンケート回答後の沖縄県立図書館へ、開催は困難か伺ったが、アンケートの回答自体が館長の決裁をすべて取ってからの回答なので、アンケートを取る前に打診したほうが良かったのではないかと感じた。今回だけでなく、将来的にあと10年ぐらいの感覚で開催できるかも検討できるか少し話したが、文部科学省の地区別研修のような大きなイベントも県立図書館が行い、それはローテーションがはっきり決まっただけでスケジュールも決まってお持ち回りで不公平感もなく計画を立てて行っているという。行政の論理として、何十年も開催していない地区があり、自分たちは近年開催している状況であると、開催したい職員がいても館内の全職員を動かすのは難しいという話があった。これは事務局の方でも共有されている課題と思う。ローテーションを決めるということが難しいためこういった状況になっていると思うが、地区ごとで開催のローテーションを検討してはいかがかという話があった。

平形：東北は岩手県が一昨年開催したばかりで、東北や北海道での開催は厳しいと感じ、今回の呼びかけはためらった。研修等についても別の団体の研究集会等もあったが、以前と異なりなかなか地元の人も集まらない状況である。ただ、岩手大会を開催したことによって本協会への関心は高まり、会員も若干増、学生にもボランティアとして手伝っていた

だき、東北地域の発表もできたので、地域で開催することの効果はあると思う。例えば、東北6県で持ち回りの集会を行う際は他県の開催でも手伝って開催しようとするので、開催しづらい地域を応援する体制を作るなり、大会の準備にあたって協力し合える関係性も必要だと感じる。以上のような事情で一理事の立場では地区に対して働きかけるのは難しいが、開催地区を決めたら執行部と理事、地域の人と一緒に動けるとよいと思う。

成瀬：皆様にご尽力いただき感謝する。9月に開催した石川大会準備委員会において、従来の多数の分科会開催を想定する前提で考えられていたため、分科会の数を絞り、多くの会場を確保しなくとも開催できる方法や、負担金の考え方など、既存の開催方法にとらわれないやり方を試行したい。こういった石川大会での検討を提示していけば、開催を検討できるということも出てくるのではないかと。また、県や政令指定都市にこだわらず、新しい図書館を開館した自治体や学会の開催経験のあるような司書養成課程を持つ大学などの開催はいかがだろうか。今までのやり方にとらわれずに声掛けをしていくことを試みたい。

森：アンケート回答結果によると、持ち回りではない不公平感と、わざわざ持ち回りが決まっているものがたくさんある中で引き受けるというのでは、招致したい動機付けがなかなか強くないと思う。全国図書館大会そのものの改善も必要だが、全体の負担感を減らしていく意味が一番わかりやすいのは、公共図書館部会で行っている研究集会で、児童青少年部門が隔年、サービス部門・総合経営部門が毎年各地域で回っていくことになっている。さらに地域の中で引き受ける場所をローテーションで組んでおり複雑化している。例えば、この二つの部門を交互に隔年開催にすれば全国的なローテーションが少し楽になる、なども

考えていく必要があるのではないかと。その際に事業を縮小していくマイナスなイメージよりも、もっと力を入れて時間をかけてじっくり良いものを作り上げていくための負担減、予算的に厳しい部分に関しても合理性を求めていくといったふうに向き合いで、皆様に意向を伺ってみたいかがだろうか。予算もなく会員も減っているから事業を減らすように見えるのはよろしくないと思う。前向きな意見を聞いてみるようなやり方については、理事会でも相談したい。

理事長：森理事から説明があったとおり、公共図書館部会の研究集会や関東地区公共図書館協議会の研究発表大会などと、全国図書館大会の開催をどのように組み合わせたいかということは検討しなければならない。いろいろご議論いただいたが、2029年度については佐賀県へ全国図書館大会の開催を打診する方向で進めることとしたい。また、2027年度の全国図書館大会をどうすべきか、自由にご発言いただきたい。

大谷：大学での開催も検討の視野にとのことだが、以前、明治大学や青山学院大学で開催したときの総括についてはいかがだったろうか。規模感のある大学でないと思われず、開催時期が夏休みの終盤になるのではないかと。春休みは物理的には余裕があると思うが、年度末の会計上の問題もあり公務員の皆様には現実味がなく、厳しいかと思う。また、過去の全国図書館大会の参加者は千何百人ほどで、現地3分の1、首都圏3分の1、それ以外の地域3分の1ぐらいの参加者層だったと記憶している。1,500人の参加者だとすると、500人近くを現地で動員していただいていたが、現状それが難しいとなると、そもそも持ち回りというのは何なのかと思う。私も図書館情報学教育部会で分科会を担当しているが、大会開催地も苦勞されている一方で、我々の方からすると毎年微妙に

やり方が違うことが正直辛かった記憶がある。なので、本当に地方開催を維持するのであれば、担当を皆でやる意義を再確認できなければ、執行部だけが辛い思いをされるのはいかがなものであろうか。部会長・委員長会議では持ち回り路線とおっしゃったが、改めて理事会で厳しい状況を伺うとそもそもそこからどうなのかと感じる。仮に大学開催というのであれば、大学は教室を貸し出すのみになるので、運営は協会事務局に負担が押し寄せてくる。会場自体は時期の問題さえなんとかなればいくつかの大学は開催できるだろう。その場合、司書課程の学生のボランティアぐらいはお願いできると思う。ただ、そうすると本当に都市圏ばかりに集中するので地方での振興の要素がほぼなくなる。全体を集めるのに苦慮している現状を見ると、個人会員や部会で小規模の大会を開催するというような方向性も考えざるを得ないのではないかと。

高橋：学校図書館部会は全国図書館大会に基本的にはノータッチだった時期が長い。過去には地域の図書館協会が担っており、動員体制もそちらで組んでくれた。2008年度の兵庫大会以来、学校図書館の分科会で部会長は挨拶すべきとなってから分科会の最初に挨拶するようになったが、コロナ禍以降録画配信やオンライン開催が続いたことによって現地に直接行って挨拶ができない場合は大会事務局にメッセージを送って報告書への掲載としていた。ただ、岩手大会のときは久々の対面であったので、部会長代理ということで直接行って学校図書館部会の活動を報告した。なお、東京大会のときには、学校図書館部会が分科会を担当したことが何回かある。そのころの学校図書館部会は夏季研究集会に加え、全国図書館大会の分科会も開催するというところでとても大変だった。今は部会を支える体制も徐々に人が減り高齢化もしているなかでやりたいとはいえないが、東京での開催にな

ると部会が分科会を主催することになり、担当できるか心配もあるが、東京大会の可能性も考えている。

理事長：前執行部の段階で全国に問い合わせることをしなかった私の判断ミスについてお詫び申し上げたい。2027年度、2028年度については執行部で話し合い、改めてご相談したい。先ほどのお話しにもあがったような、公共図書館部会の研修等々どのように開催タイミングをずらしていくかも含めて検討していきたい。理事会後もご意見、ご提案等あれば賜りたい。何も決まっていない状況で県立図書館に行ってお願ひするわけにもいかない。全国図書館大会は、予算の規模、人の規模も地域によるし、実質都道府県を中心に運営しており、本協会がイニシアティブを取ってこなかった。今までないがしろにしてきた部分があることを反省している。

事務局長：2029年度については、佐賀県と話を進めることをご了承いただいたが、同時に2030年度についても福井県と交渉を進めていきたいので、こちらもご了承いただきたい。

植村：各部会が毎年研修会等を行っているということならば、例えば東京大会のときは学校図書館部会の夏季研究集会、地方開催のときは公共図書館部会の研究集会と併せて開催するようなやり方はできないのだろうか。なるべくシンプルにするという話からすると、共同開催も検討していただくのはいかがだろうか。

森：例えば、県立長野図書館が100周年を迎える2029年度に引き受けられないかと館内で検討したとき、当然ながら長野県図書館大会と併催を前提として話していた。長野県図書館大会は全館種が一堂に会する年に一度のイベントで、県内の地区が持ち回りで行っている。その持ち回りを県立図書館のある北信地区に合わせ、長野県図書館大会と全国図書館大会の併催で行う想定で検討していた。なので、全国図書館大会を引き受けるときは元々行っているものと

の組み合わせで、負担を減らしながらより効果的に全国の皆様にお越しいただくメリットが自分たちのところにあるという状況を作り出す前提の検討だった。それを関東地区が持ち回りでやっている何かと併催できるかという、すべての館種の人たちが集まる場というのではない。一方で学校図書館は地区別の学校図書館の集まりがあるが、北信越大会というのものもある。これは北信越の4県で8年に1回回ってくるが、今年まさにその北信越の学校図書館研究会が長野県の当番となっており、それを長野県図書館大会と併催する形で乗り切ろうとしているところである。こういったことはこれまでも行ってきたし、今後でもできる限り工夫しながら相乗効果を高めていくようなことは考えていくべきである。

杉本：部会・委員会のあり方検討委員会の方の議論で、本協会は違う館種の人々が集うハブであることに価値があるという意見が出た。全国図書館大会は伝統的に部会や委員会のメンバーが集まるというふうになされてきたとも考えられるが、将来を考えたときにコンパクト化という話題も出てきており、違う分野の人たちと交わることで新しいことができるという期待もあると思う。全国図書館大会の位置づけというものを、今までこうだったからということもあるだろうが、新しく生まれていくためにはどうすればいいかという議論があり、そのためのエネルギーがあれば将来に向けてつながっていくと思う。

大谷：例えば県の図書館協会も、県によっていくつかの館種で構成されているところもあれば、事実上公共図書館だけのような県もある。全国図書館大会はその県の図書館協会か実際は県立図書館が中心になるかと思うが、その場合県内の組織構成自体が今言っていたような話とあまり噛み合っていない。特に公共図書館だけで構成されているような県の図書館協会が事務局となって、やろう

と言っても辛いものがある。そもそも県立図書館にお願いするという構図も今の話と距離感がある。教育部会としては、地方だと司書課程の開催校はとて少なく頑張って地方で分科会を持つ意味は本来それほどない。ただ、開催すると現地のさまざまな方に参加していただけるので、それはそれで意味があるのかなとは思っている。いろいろな館種が参加できるのは大事だと思うが、なかなか今の現実の図書館のそれぞれの地域の運営や、組織がかみ合っていないと感じた。また、全国持ち回りにするとしても、毎年必ず地方で持ち回りという言い方の負担感はあると思う。例えば三大都市圏で大学の協力を仰ぐ年と、地方の年で協力を仰ぐ年など、組み合わせパターンをちょっと複雑化してもよいのではないだろうか。

報告5 図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議について

曾木専務理事より報告があった。有識者会議はこれまでに6回の会議が開催されている。理事会、常任理事会ではそのつど報告しているが、7月と9月に2回開催されたので、説明する。内容や議事録については文科省HPを参照していただきたい。

7月は、「図書館・学校図書館と関係機関等との連携・協働の促進等のあり方について」ということで、鳥取県立図書館の小林隆志氏から書店と図書館の協働について、岩手県紫波町図書館の手塚美希氏から地域社会における図書館の役割について、慶應義塾大学の松本直樹氏から図書館・学校図書館と関係機関等の連携・協働の促進について、発表があった。図書館がその地域のハブ拠点としての役割を果たすということで、特に紫波町のような図書館としての資源が非常に乏しいところの場合は、町の方たちとの協働を図って課題を解決していくという役割を非常に果たしていらっしゃる。図書館

としては非常に有名なところではあるが、実際の子どもの学びを育てるといったことについては学校図書館がなかなか充実しているとは言い難いようだが、その点を地域で補っているということもある。ちょうどこの7月は書店活性化プランが発表された直後でもあり、書店のことについても話があり、図書館と書店の利用者層の違いを生かした連携の取り込みである「鳥取方式」の紹介もあった。それから、委員からは、書籍情報のシステム連携や貸出返却を書店で行うという最近事例の取り組みや、新刊の貸出を一定期間猶予するようなルールや装備の問題などについての意見が出された。

9月は、これからの子どもの学びを支える読書環境の充実ということで、学習指導要領の改訂について、上智大学の奈須正裕氏より発表があった。実際のところ、改訂を巡る審議の中で図書館が出てくることはないということだったが、図書館の中での活動のみならず教室の方にもっと出ていくとか、そういった活動などもしていくといった事例の話などがあった。学校図書館の例としては、大阪府熊取町の司書教諭である紀之定美知代氏から、生徒たちがどのように図書館を使って読書推進を行っているかということについて、生徒が出演する動画も交えて紹介があった。また、公共図書館部会の幹事でもある静岡県立中央図書館の高橋健二氏から夏休みの図書館の取り組みについて話があった。熊取町の紀之定氏から後で聞いた話によると、司書教諭がいるときは良いが、その先生が異動してしまうと活動が落ち着いてしまうという弊害もあるとのこと、つながっていくということが非常に難しい状態だということもここでわかっていく。次回開催は10月7日(火)で、「今後の図書館・学校図書館に求められる人材の育成について」がテーマとなっており、本協会からは公立図書館の人材育成について、全国学校図書館協議

会から学校図書館について、発表することになっている。15分という短い時間ではあるが、公立図書館の司書の現状、研修の状況、根本的に直さなければならないところについて話し、さらに学校図書館との連携が必要だがその際に公共図書館だけが成立すればいいわけではなく、学校図書館の方もきちんとしなければならないということで、本日の議題にもあった提言、見解を用いる予定である。

本会議は2026年3月までとなっており終了が近づいている。もともと望ましい基準の改定や学校図書館に関する基準の改定などを行うことも狙っているが、大掛かりな改定にはならないのではないかというのが委員たちの見解である。マイナーチェンジぐらいになるかもしれないが、これまで出た意見なども反映して作っていただけると良いと思っている。

報告6 各地区の状況報告

各地区の状況について、各理事から報告があった。

異理事より、資料に基づき近畿地区の状況について報告があった。近畿地区で選出している代議員から、それぞれの把握している状況や要望について聞き取り、各館種の動きをまとめた。大阪府では、大阪万博の関連行事などもあるほか、豊中市立図書館の統廃合に伴う住民運動、寝屋川市や門真市の指定管理に関する動きがある。また、図書館サービス等については各図書館でいろいろな形で工夫されている様子が見受けられた。例えば、大阪市立平野図書館では、子ども食堂や地域の支援団体と貧困対策や社会的な形として、図書館でスペースを取ったり書店もつながったりしながらいろいろな工夫をしている。また、堺市の図書館では予算が少ないということで雑誌棚に広告を掲載し寄附分を購入費にするとか、移動図書館車に宣伝を掲載して広告費を取るようなことを

やった。京都府では、舞鶴市立図書館は、2027年に総工事費50億円近くをかけて中央図書館の新館を整備する計画が進められている。ただし、現在2館あるものを1館にするということで、住民からは困惑の声も上がっている。京都府立図書館では「京都府立図書館総合目録ネットワーク」と書店との情報交換を始めた。和歌山県ではそれほど大きな動きはないが、2000年に現みなべ町に図書館を新設した以降、和歌山市民図書館、海南市海南図書館が新館移転し指定管理運営となった。滋賀県では30年間で司書が育ってきたということで、その司書を館長に迎えて図書館運営をされている。予算等については減ってきているが、サービス面では正規職員を雇用して運営されている。近畿地区の学校図書館については、各自治体で学校司書を置く動きがあり、以前と比較すると学校司書の人数が増えている。滋賀県で久しぶりに採用試験があり、奈良県で一校に一人の学校司書が配置されている。ただ、大阪府では府立高校に配置されていた正規の司書が削られてしまい、大変な状況になっていると報告があった。また、認定司書に応募する資格が学校図書館や大学図書館の司書にはないので、本協会への入会を勧めにくいと言われている。

続いて、平形理事より、北日本地区の状況について報告があった。2024年11月に秋田県の横手市立横手図書館が移転し、新たに開館した。猫型のサービスロボットを導入するなど新しい試みを実践していた。複合施設だが、図書館機能はきっちり整理されており頑張っている印象だった。一方で職員はなかなか厳しく、非常勤の方が頑張っている。ただ、出張などについては、公費で行ける館長や図書館に常駐していない職員が行くようになっている。以前は司書資格取得のための講習なども行けたケースもあったが、現在は難しい。変わっていないのは、既に退

職をした人でも、自力で研修などに出向いていることである。つまり、本協会に魅力があれば、全国図書館大会や研究集会、セミナーなど、絶対に参加する人はいると思う。Zoom配信についても参加しやすい金額で設定していれば、もっと活用できる気はする。我々も呼びかけが足りず内輪ばかりで動いていたと反省している。これからも努力して地域を活性化していきたい。

続いて、山本理事より、東海・北陸地区の状況について報告があった。名古屋市は「なごやアクティブ・ライブラリー構想」を策定しているが、現在名古屋市にある21の図書館を五つのブロックに分けて各ブロックに一つアクティブ・ライブラリーという比較的大きな図書館を作り直営とし、他は指定管理者にするという懸念される構想である。そのうちの最初の1ブロックに最初のアクティブ・ライブラリーとして地下鉄星ヶ丘駅の近くに作るという案が今年になって発表されている。2028年の開館予定で、3階、4階が図書館で800㎡に150,000冊という案が発表された。市民団体からは情報を出すのが遅いという批判が出ている。特色としては1階、2階には蔦屋書店が入ると発表されている。ちなみに椙山女学園大学の一部学部がこれのすぐ近くへ移転することになっている。2028年開館となっているが、各地で工期の遅れがあるので確実ではないと考えている。このほか、名古屋市鶴舞中央図書館がネーミングライツで「ゴムノイナキ鶴舞中央図書館」と決まったが、反対運動やパブリックコメントでの52件の反対があり、会社側が辞退した。愛知県内では、2021年に図書館3館が廃止となった。北名古屋市西図書館と愛西市立田図書館、常滑市立図書館の本館がいったん廃止となり、分館と図書館機能を移転させている。この廃止に関してはやはり反対運動が強くあり、結局2025年3月に公共施設アクションプランが作られ、その中で

新しい図書館をすぐに、しかも単独で作るという案が策定されている。これは、今基本構想の策定という形になっている。三重県の日市市の図書館は2017年に市役所の東側への建て替え案があったが、不便さや駐車場が少ないと住民の反対運動があったことで、2020年に近鉄四日市駅の駅前に近鉄と共同で32階建ての建物を作りその3階から8階を四日市市立図書館にするという提案が決まったが、図書館が持ち出す建設費が当初150億円だったものが390億円となり、2024年に断念した。その後、市役所の北側への移転案が決まっている。場所については最近の大雨で被害のあった北側駐車場のあたりだと記憶している。ちなみに四日市市発祥企業のイオンが組織の建て替えに対して10億円寄付するらしい。それから、建設費の高騰は各地で起きている。ご存じと思うが静岡県立図書館が2014年に建設の入札をしたときに入札がなく、しかも国から出る予定だった補助金がなくなってしまったので白紙になっている。伊東市も、2023年に入札が不調だったため規模を縮小して2025年の着工を目指していたが、現在の市長に替わり計画を見直しとなり、現在のところ建設中止になっている。また特殊な例としては、郡上市は今年の4月1日(火)から主要館以外の6館では新聞と雑誌を全く置かなくなった。この件については問い合わせがあり、他の理事もコメントしていたが、既に決定したことで、実際には1館で新聞雑誌が復活したが残りの5館は今でも置いていない。予算がない中で新聞・雑誌代を他のところへ振り分けると言っているが、そもそもの予算が100万円ほど減ってしまっている。

続いて、植田理事より、中国・四国地区の状況について報告があった。司書の採用試験について、愛媛県松山市ではカウンターは業者委託だが30年ぶりに採用試験を開催した。採用試験を受けた学生に話を聞いた

ところ、専門の問題で文章問題が6問も出たということだった。ほかにも愛媛県立、香川県立やオーテピア高知など、各県立で1名ほどは採用があるのが現状である。中国地方では岡山県立が7月頃と比較的早くに採用試験を行っており、最近では鳥取県立や広島県立が実施する予定となっている。光市は面白い試験をやっており、条件に「光市のことが好きな人」とある。各地で採用試験があるなかで自治体それぞれが工夫していると感じた。広島県立は指定管理で財団による運営としているが、移転を計画し9月から閉館して駅前にある広島福屋百貨店に移転し、今まであったジュンク堂が下の階に降り、その上に図書館ができるという計画を行っている。これについても、どこも同じだろうとは思いますが工事費の問題で、当初の計画では現在地に図書館を建て替えるよりもデパートに入れば安く済むと市は説明していたが、どんどん工事費が上がったという問題がある。先の静岡県のあるが、愛媛県立図書館の耐震工事や松山市立中央図書館の工事予定など、工事費が上がっていき予定されている工期ではできなくなる図書館がますます出てくるのではないかと思う。その件についても考えねばならないかと思う。ちなみに広島市立図書館の司書の採用は5名の予定である。

〈主な意見など〉

大谷：本報告に関連して、認定司書について問い合わせがあったので認定司書事業委員会委員長として回答する。そもそも認定司書制度とは研修を強化するという話のなかから1990年代の終わりごろに公共図書館と大学図書館でそれぞれ業務分析を行い、研修プログラムを作ろうという話があった。その後、公共図書館は研修プログラムができて、それが現在のステップアップ研修となった。つまり本制度は基本的に研修と連動している資格で、他館種が応募できないのはその図書館の職員に

求められる研修システムとの連動が制度の作りとして必要なためである。時々こうした話が認定司書事業委員会に振られるが、正直何ともお答えしようがない。制度の作りの問題でもあるので、できれば学校図書館や大学図書館部会の方でご検討いただきたい。設置部会によって問題感や規模感が異なるため、統一した研修プログラムの構築は大変である。それぞれの図書館種のキャリアに応じた研修プログラムを作っていくという話と連動した制度なので、そういった形での問い合わせ、働きかけをした方が良い。もちろん、事業をやることになった場合は我々のノウハウは当然お伝えする。制度の作りについては今申し上げた通りの事情なので、現行の認定司書にはかの館種も加えるという話ではないと、ご認識いただきたい。

森：認定司書について質問だが、申請にはある程度の著作が必要だとあるが、著作の投稿先が図書館の現場で働く人にとってあまり選択肢がないように思う。『図書館雑誌』に投稿し、それで掲載がされれば認定司書の申請要件を満たすことができるという関係性によって会員になることへのモチベーションアップと、『図書館雑誌』の活用の仕方というのはいえるのだろうか。

大谷：著作は一定の文字数を備えたものであればよく、複数でなければならぬわけではない。一方で審査において割とはねられているものが事例紹介である。制度でもはっきりうたっているとおり、『図書館雑誌』の数ページの紹介記事を著作と言ってもはねられるケースは多い。これは申請のみならず更新でも結構な割合で引っかかっている。事例紹介は、どの図書館に勤めているかで書ける幅が変わってしまうため、審査会としては専門性をもってちゃんと考察し図書館員としての見識が示せるかを見ている。自身の勤め先がたまに面白い事業をやっている、その紹介をするというのは該当しないだろ

う。これは制度の創立から一貫している方針で、『図書館雑誌』等の審査結果報告ではたびたびお話ししているが誤解され続けているので、誤解を解かねばならないと反省している。審査の基本スタンスは今申し上げた形であるので、できれば『現代の図書館』のような雑誌に、事例紹介を記したうえで日本の図書館全体に対してどう普遍性があるのか、ないのか、あるのならどのような要素が他の図書館でも考えられるのか、そういった考察をきちんと含んだ文章をお願いしたい。なお、媒体に関してはオリジナルの文章であれば申請に際して書いたもので問題なく、必ずしもどこかに投稿し掲載された著作でなくても構わない。ただ、この点に関しても、制度開始当初は図書館紀要等を作成している県立図書館も多かったのだが定着せず、今は申請に際してオリジナルで文章を書いて投稿する人が多い。できれば都道府県の図書館協会などでそういったものを書く場がある方が制度としては望ましく、開始当初は期待していたのだが、当初の想定とはやや異なる形で現在に至っている。

巽：認定司書の応募資格について、学校図書館部会や大学図書館部会でこの認定司書について話をし申し込むということか。

大谷：それぞれの館種の職員なので、まずはそこで検討いただきたい。

理事長：各地区の状況報告については、できれば次回もお知らせいただけるとありがたい。

杉本：巽理事の報告資料が大変良かったと感じた。この資料のように書いていただくと、どこで何をやっているかが良くわかった。もう1点、部会・委員会のあり方検討委員会の話になるが、自分なりの委員会のキャッチフレーズとして「日図協をもっと身近に、楽しく元気にしましょう」といったことを言っている。いろいろなところでこんなことをやっていると思うことができることは、一般会員というか、いわゆる草

の根会員の方にとって元気が出る材料になると思う。こういった報告を共有して、そこから委員会なり部会なりがもっと進んだ活動をするためにどういつくりをしていったらいいのかという議論を進める上で役に立つと考えている。

山本：全国の図書館の様子がわかると思うが、今回は関東地区のことが話題に上がらなかったので考慮していただきたい。

報告7 その他

○部会・委員会のあり方検討委員会について

高橋理事からの質問を受けて、杉本常務理事より報告があった。9月10日(水)に第1回会議をオンラインで開催した。第2回は10月、第3回は12月の予定で、全体で5回の会議を予定している。「部会・委員会のあり方検討ワーキンググループ」(以下「ワーキンググループ」という)のときに会議に対するアンケート調査を行う必要があるという議論はしているが、アンケート調査に現状報告をつける必要があるのでは、実際にアンケートを取ろうとすると第3回会議以降、相談しながら進めていくこととなる。

また、委員である森理事から補足があった。ワーキンググループ内でも言われた「日協協をもっと身近で楽しく」の延長線上に、全国図書館大会のように本協会だからできる、さまざまな館種が集まれるからこそできるということがつながっていくと思う。今はやりたいと思っている人のエネルギーがストレートに表へ出にくい体制に見えるので、やりたいことがストレートに現れるような組織のあり方ないし部会やワーキンググループのあり方を追求していけたら良いと思う。

○非正規雇用職員セミナーについて
／『学校図書館部会報』(78, 79号)について

高橋理事より報告があった。9月23日に福岡県立図書館にて非正規雇

用職員セミナーがあり、学校司書配置の課題について報告した。また、現場の非正規雇用の人にご報告いただいた。福岡県、熊本県、長崎県の人で、1人は名前を出せないとのことだったが、他2人はきちんと名前を出しての報告をお願いした。このセミナーでは九州沖縄地区の前理事であった末次健太郎氏と沖縄国際大学の山口理事、以前理事であった永利和則氏にも非常にお世話になった。もう1点の報告は、本日配付した『学校図書館部会報』について、78号は2025年3月発行のもので、発行後の理事会が有識者会議と日程が重なり、進行具合の確認関係で出席ができなかったため本日配付した。7月発行の79号は、有識者会議の第1回から第4回までの報告を載せているが、公立図書館の方は極力省略し、特に学校図書館、学校司書に関するやり取りの部分ピックアップする形でまとめている。協会ウェブサイト为学校図書館部会のページでも確認ができるので、Web会議参加の皆様にもお目通しをお願いしたい。

また、山口理事から、非正規雇用職員セミナーについて補足があった。35名ほど参加し、遠くは鹿児島県、熊本県、佐賀県などから、沖縄県からは自分が参加した。現場の学校司書である会計年度任用職員の方からは非常に身につまされるようなリアルな報告もあり、特に印象に残ったのが熊本県の方の報告で、勤務時間が1日5時間しかないのでせめて6時間に延長してほしいと要望を繰り返して学校図書館にしていたが、教育委員会でアンケートを取ったところ今働いている方は5時間のままでいいという回答になってしまい、6時間勤務は実現しなかったとのことだった。しかし、これは当然の話で、もともと5時間勤務を条件で募集し、その条件で雇われたい人が来ているので、そんなアンケートを取る必要は全くないという話を怒りをもって報告されていた。こういう問題も理事として共有し広げてい

かなくてはいけないと感じた。制度が先か、働いている人の専門性を高めていくかどちらが先かという問題はありますが、やはり制度をしっかり整えていかなくてはいけないと報告を聞いて改めて感じた。本報告については『図書館雑誌』でぜひ報告してほしいということだったので、後日きちんとまとめて報告させていただきたい。高橋理事の報告も大変わかりやすく問題点等をたくさん教えていただいた。

○災害等により被災した図書館等への助成(2025年度)について

植田理事より報告があった。9月19日(金)を申込期限としていた「災害等により被災した図書館等への助成」について、一ツ橋総合財団からの寄附を含め3,800,000円という額の中で、多く申請をいただいた。この後、図書館災害対策委員会にて、助成先を協議する。

*

閉会宣言

理事長より、閉会が宣せられた。

*

今後の予定

・2025年度通算第4回(定時第4回)理事会

日時：2025年12月18日(木)
13時30分から

公益社団法人日本図書館協会
2025年度通算第3回（定時第3回）理事会
配付資料

- 資料1 公益社団法人日本図書館協会大学図書館部会規程改正案（掲載省略）
- 資料1-1 公立大学協会図書館協議会の名称変更による大学図書館部会規程の改正について（掲載省略）
- 資料2 2025-2026年度 顧問・参与の任命について（掲載省略）
- 資料3 「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言ー」（掲載省略）
- 資料3-1 「学校司書の配置・処遇等について（見解）」（掲載省略）

- 資料4 代議員選挙の公示及び代議員定数確定について（報告）（掲載省略）
- 資料4-1 会員数一覧 2025年8月31日現在（掲載省略）
- 資料4-2 2025年度施行公益社団法人日本図書館協会代議員選挙代議員定数（掲載省略）
- 資料4-3 公示「公益社団法人日本図書館協会代議員選出選挙の実施について」（掲載省略）
- 資料4-4 代議員立候補届出書（個人会員）（団体員）（掲載省略）
- 資料4-5 2026~2029年度施設等会員選出代議員選挙（選挙区1区~第5区）の代議員候補推薦について（依頼）（掲載省略）
- 資料5 全国図書館大会愛媛大会参加申込状況（掲載省略）
- 資料6 2027年度以降の全国図書館大会の開催について（掲載省略）

図書館雑誌／1月号予告（Vol.120 No.1） 定価1026円 1月20日発行予定

令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会ハイライト 予定内容=全体会等の模様から、分科会の様子をそれぞれ報告するとともに、大会参加者の感想等を加えて、第111回大会開催の概要をまとめてお届けします。このほか、〈新春エッセー〉北極冒険家・荻田泰永、〈ウチの図書館お宝紹介！〉[㊤]千葉大学附属図書館亥鼻分館 亥鼻分館所蔵「古医書コレクション」ー江戸時代から明治初期の医学資料（米田奈穂）、〈小規模図書館奮戦記〉[㊤]上田短期大学附属図書館 新たな図書館づくりに向けて再始動！（玉岡兼治）、〈図書館で実践！SDGs〉[㊤]鹿角市立花輪図書館 小さな図書館からの持続可能な発信ー秋田県SDGsパートナーとして（小林光代）、〈れふぁれんす三題噺〉[㊤]松山市立中央図書館 「知りたい！」に寄り添うレファレンスの現場ー豆苗から忍者、そして三津浜へ（小池ひろみ・河村好恵）等の連載記事ほかを掲載してお届けします。

会員募集のご案内—会員の皆さまへ

日本図書館協会（JLA）では正会員，準会員，賛助会員を募集しております。

本法人は，全国の図書館の発展，文化の進展を図る事業を行うことにより，人々の読書や情報資料の利用を支援し，もって文化，学術，科学の振興に寄与することを目的としています（定款第3条）。

これからの日本の図書館界に清新な活力を注いでくださる皆さまのご参加を求めています。会員の皆さまにおいては積極的な勧誘をよろしくお願い申し上げます。

詳細については本法人ホームページ「入会のご案内」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/membership_information/



日本図書館協会の活動を豊かなものにするために

ご寄附のお願い

本法人は，全国の図書館の進歩・発展を図るため，図書館運営の支援および政策提言，図書館職員の育成並びに研修・講習や図書館運営に関する調査・研究・資料収集，機関誌等の刊行など，図書館活動を通じたさまざまな事業を展開しています。

こうした公益目的にかなう事業のさらなる充実を図り，21世紀のよりよい文化的社会を築いていくため，広く市民や会員の皆さまからのご寄附を受け付けております。

なお，本法人への寄附金には特定公益法人としての税制上の優遇措置が適用され，所得税・法人税の控除が受けられます。

詳細については本法人ホームページ「ご寄附のお願い」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/request_for_donations/



charibon^{チャリボン} by V&B

あなたの本のご寄附が全国の図書館を支えます。

皆様の読み終えた本が図書館をサポートする活動に役立ちます。ご提供いただいた書籍、CD、DVD等を提携会社が買い取り、代金が日本図書館協会への寄附金となります。段ボールに詰めてご連絡ください。5冊（点）以上なら送料はかかりません。



古本を寄附
書籍類を梱包

集荷
配送会社

仕分け・査定
VALUE BOOKS

ファンドレイジング
日本図書館協会

5冊から送料無料

買取相当額の寄附

<https://www.charibon.jp/partner/jla/> TEL:0120-826-295 (パリューブックス)

編集手帳

もしまだ、本号の特集学校図書館が未読ならば、まず「れふあれんす三題嚙」東京学芸大学附属国際中等教育学校のページから開いて頂けると有り難い。デジタルと紙とをハイブリッド活用し、学校司書と新規キーワードを得て探究を拡張する授業風景。多様な価値観を認め合い、おのおの「知りたい」を応援する現在の「図書館」の原点と先端双方がここにある。

「学校図書館が今切り拓くのは、公共図書館の未来と人の未来。」学校、県立、専門三つの館種経験を経た確信から、閉じた議論になりがちな学校図書館像の館種を超えた共通理解

から強固な図書館連携につなぎたい。勢い込む新任編集委員の私に伝わったのは「学校図書館は関係要素が複雑で理解が困難、外から中途半端に発言すると厳しいお叱りが返って来るし…」と、対話以前の断絶。

20年の時を経て、外から見える学校図書館像はどう変貌したか。現在協議中の「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」が象徴するように、両者の有効な連携の模索が主要論点に上がり、図書館雑誌編集会議での他館種の委員から学校図書館への言及は珍しくなくなった。

今号では、学校図書館外からの視点を意識し、まず冒頭には広く読者の関心を集める二つのトピッカー「アメリカの禁書問題と学校図書館員の動向」と「朝の読書運動」の形骸化からの脱出」をおのおの第一人者のお二人に執筆頂いた。さらに、これからの学校図書館の可能性を考

えるために、学校図書館外からの多様な視点を提示頂いた。

かつての校舎の片隅の自習室は、自由な学びを喚起する校舎中央に、安心な読書空間、居場所機能も期待されて配置されるようになった。長く愛される学校図書館を目指して、今秋上梓した『学校図書館施設設備基準 解説』（日本図書館協会学校図書館部会編著 日本図書館協会）の副題は「対話」から始める」。優れた学校図書館見学から得たカギである「対話」の体現例を、今号では、現場からご紹介頂いた。そこでの対話の基盤にあるのは、自治体の学校図書館に関わる「人」への深い理解に他ならない。

そして特集最後には「学校司書の実態」を統計から読み解いて頂いた。せっかく用意された「対話」のテーブルに着くべき「人」の不在が思い浮かばれてならないのは私だけだろうか。 (長谷川優子)

事務局カレンダー

*○印の日が事務局のお休みです。

2025年12月

日	月	火	水	木	金	土
*	1	2	3	4	5	⑥
⑦	8	9	10	11	12	⑬
⑭	15	16	17	18	19	⑳
㉑	22	23	24	25	26	㉗
㉘	㉙	⑳	㉑	*	*	*

2026年1月

日	月	火	水	木	金	土
*	*	*	*	①	②	③
④	5	6	7	8	9	⑩
⑪	⑫	13	14	15	16	⑰
⑱	19	20	21	22	23	⑳
㉑	26	27	28	29	30	㉓

※事務局の仕事納めは12月26日(金)、仕事始めは1月5日(月)です。

図書館雑誌

第119巻 2025年（令和7年）

第1214号－第1225号

TOSHOKAN ZASSHI

Vol.119 2025

Japan Library Association
Tokyo

公益社団法人 日本図書館協会
東京

図書館雑誌

第119巻 (2025年)

総索引

凡 例

1. 著者名, 件名をそれぞれ五十音順に配列した。同一件名内は原則として著者名の五十音順, 同一著者名内は発表順とした。
2. 記載事項は<著者: 記事タイトル コラム・連載 もしくは特集タイトル 号: ページ>の順になっている。
3. ニュース欄は「ニュース記事一覧」として本索引末尾にまとめ, 項目別に発表順に配列した。
4. ニュース欄の告知板と, 新聞切抜帳, 協会通信の一部は原則として索引対象外とした。

<2025年 (119巻) 特集等テーマ>

1. 特集: トピックスで追う図書館とその周辺
2. 令和6年度 (第110回) 全国図書館大会長崎大会ハイライト
3. 特集: 多文化共生に資する図書館
4. 特集: 市民提案による図書館との協働
5. 特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み
6. 特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち
7. 特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館
8. 特集: 戦後80年と図書館
9. 令和7年度 (第111回) 全国図書館大会愛媛大会への招待
10. 特集: 孤独に寄り添う図書館
11. 特集: 高大連携における大学図書館の可能性
12. 特集: アラカルト 学校図書館のこれからを考える
小特集: IFLA アスタナ大会レポート

著者名索引

<あ・い・う・お>

- 青木 知子: 自分が欲しかった時間を いま必要な人へ (特集: 市民提案による図書館との協働) 4: p206-207
- 青木みどり: しょうないREK 18年の軌跡 地域と共に歩んだ道のり (特集: 市民提案による図書館との協働) 4: p198-199
- 青谷 忍: 明けても暮れても食べて食べて (図書館員のおすすめ本 103) 7: p442
- 青柳 英治: 編集手帳 6: p400
- 青柳英治 [ほか]: 編集手帳 1: p56
- 青柳英治文責, 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会: 「図書館で実践! SDGs」連載にあたって (図書館で実践! SDGs) 連載にあたって) 1: p40
- 青山 鉄兵: 公民館図書室の現代的意義 「本棚の手前」から広がる可能性 (特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち) 6: p346-349
- 赤木 美穂: 図書館のささやかな行動が届けるSDGs また来たいと思われる居心地の良さを目指して (図書館で実践! SDGs 7 宮崎県・新富町図書館) 7: p437-439
- 浅見 和寿: 学校図書館ではじめる探究活動 学校図書館司書をパートナーに (特集: アラカルト 学校図書館のこれからを考える) 12: p732-733
- 阿部 治子: むすびめの会 (図書館と多様な文化・言語的背景をもつ人々をむすぶ会) 多様性があり公正で包摂的な共生社会の実現をめざす人的ネットワーク (特集: 多文化共生に資する図書館) 3: p130-133
- 天谷 真彦: レファレンスと人権保護 <こらむ図書館の自由> 12: p719
- 天野奈緒也: 社会教育機関としての公共図書館の可能性 学び合い, 共に愉しむ場を目指して (令和7年度 (第111回) 全国図書館大会愛媛大会への招待 第1分科会 公共図書館) 9: p568
- 有林 沙央: 宇治市図書館におけるSDGs関連事業例 (図書館で実践! SDGs 10 宇治市図書館) 10: p642-644
- 有山裕美子: 第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読む 自治体における計画策定の意義と学校図書館との連携 (特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館) 7: p416-419
- 伊草 祥子: 水族館人 今まで見てきた景色が変わる15のストーリー (図書館員のおすすめ本 97) 1: p47
- 池田 浩: 図書館がつなぐ 人・まち・ミライ 21世紀の出島 (長崎) から (令和6年度 (第110回) 全国図書館大会長崎大会ハイライト 全体会) 2: p68-70

- 伊沢ユキエ：9月世界アルツハイマー月間に思ったこと <こらむ図書館の自由> 11：p667
- 石川 典子：誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスを目指して 豊島区立図書館の「りんごのたな」の取り組み (図書館で実践! SDGs 11 豊島区立図書館) 11：p697-699
- 石川ゆたか：戦争と図書館 戦時下検閲と図書館の対応 第109回全国図書館大会講演録 <図書館員の本棚> 2：p108
- 石黒 志保：山形に残る琉球・沖縄史料 伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の紹介 (ウチの図書館お宝紹介! 245 山形大学附属図書館) 3：p154-155
- 伊津美泉, 荻野恵理子：図書館で社会課題を考える after5 (アフターファイブ) ゼミの現場から (図書館で実践! SDGs 8 神奈川県立図書館) 8：p485-487
- 井手下由紀：社会の変化と公共図書館のミライ (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第1分科会 公共図書館) 2：p71
- 伊東琴子 [ほか]：多角的な視点による課題解決をめざして (れふぁれんす三題晰 316 尼崎市立中央図書館) 1：p44-45
- 伊藤 孝良：iPad アプリによる絵本づくり 持続可能な共生社会を目指して「SDGs 質の高い教育をみんなに」(図書館で実践! SDGs 3 ピッケの会とよはし) 3：p158-160
- 伊藤 友香：たくさんの方に支えられて、今も頑張っています (小規模図書館奮戦記 319 医療法人徳洲会湘南藤沢徳洲会病院患者図書室ラベンダー) 8：p488
- 伊藤 奈絵：かがくいひろしの世界 (図書館員のおすすめ本 98) 2：p105
- 稲井達也, 古川真理：高校の探究学習を促す大学図書館の理論的な枠組と支援の実際 (特集：高大連携における大学図書館の可能性) 11：p677-679
- 井上 香織：ほくの村は壁で囲まれた パレスチナに生きる子どもたち (図書館員のおすすめ本 100) 4：p228
- 井上 昌彦：館内で過ごす習慣 <窓> 1：p4
：図書館員がつながっていくために <窓> 5：p244
：図書館研修への3つの提案 <窓> 9：p560
- 井上 靖代：選挙と図書館と読む自由 <こらむ図書館の自由> 1：p7
：アメリカの図書館は、いま。 <こらむ図書館の自由> 5：p247
：戦う米国の学校図書館員 禁書問題と学校図書館員の動向 (特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える) 12：p721-723
- 伊端 隆康：書店支援で市民と図書館が連携 (特集：トピックスで追う図書館とその周辺) 1：p32-33
- 今井つかさ：AIにはない「思考力」の身につけ方 ことばの学びはなぜ大切なのか? (図書館員のおすすめ本 102) 6：p376
- 今井 紀子：ぼくたちはChatGPTをどう使うか (図書館員のおすすめ本 103) 7：p442
- 今川 万理：第三次横浜市民読書活動推進計画の策定について (特集：子どもの読書活動推進計画と図書館) 7：p422-423
- 岩井 路加：ヤングアダルトにとつての「読書体験」と「居場所」 日本子どもの本研究会「ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会」8月ハイブリッド拡大定例会から考える (特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える) 12：p727-729
- 岩岡 朗子：広島平和記念資料館は問いかける (図書館員のおすすめ本 108) 12：p759
- 岩崎れい, 庭井史絵訳：IFLA-UNESCO 学校図書館宣言2025 7：p431-433
- 岩永 知子：編集手帳 10：p660
- 岩永知子 [ほか]：編集手帳 1：p56
- 上杉 朋子：「持続可能なまちづくり」と図書館 (図書館で実践! SDGs 4 真庭市立図書館) 4：p220-222
- 上田 茜：伊丹市立図書館本館「ことば蔵」のレファレンス 児童室のレファレンス (れふぁれんす三題晰 317 伊丹市立図書館本館「ことば蔵」) 2：p98-99
- 上田由美子 [ほか]：「知と心がみたまされる図書館」を目指して 長野県安曇野市図書館 (れふぁれんす三題晰 323 安曇野市中央図書館) 10：p646-647
- 植月琢也, 道上久恵：強みを活かしあつて協働する 図書館とSDGs担当課との連携事例 (図書館で実践! SDGs 1 藤沢市湘南大庭市民図書館) 1：p41-43
- 植村八潮, 杉本重雄：図書館とデジタル化 OPACから生成AI, そして次にくるもの (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第4分科会 図書館とデジタル化) 9：p571
- 宇野 亮一：編集手帳 4：p240
- 宇野亮一 [ほか]：編集手帳 1：p56
- 宇野亮一文責, 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会：特集にあたって (特集：公民館等図書室のさまざまなたち) 6：p345
- 梅澤 貴典：高大接続において大学図書館職員に求められる役割とスキル 探究学習をアカデミック・スキルに発展させる情報リテラシー教育 (特集：高大連携における大学図書館の可能性) 11：p674-676
- 浦 友希乃：図書館大会に参加して (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して) 2：p87
- 大石 正人：全国公共図書館研究集会(サービス部門/総合・経営部門) 兼第52回高知県図書館大会に参加して <北から南から> 2：p106-107
- 大谷 康晴：2030年代の図書館員養成教育を考える (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第5分科会 図書館情報学教育) 2：p75
- 大西恵美 [ほか]：「対話」から始まる学校図書館づくり 茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター (特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える)

(4)

- 大野 浩：「島根の戦争・銃後体験記録データベース構築講座」について（特集：戦後80年と図書館）
12：p734-737
- 大場 博幸：図書館と小売書店の協力（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第11分科会出版流通）
2：p81
- 大林 正智：読書と暴動 プッシー・ライオットのアクティビズム入門（図書館員のおすすめ本 100）
4：p229
- 尾形 陽子：「私たちの図書館宣言」から考える図書館の課題（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第15分科会 市民と図書館）
2：p85
- 岡部 幸祐：障壁のないインクルーシブな読書環境の整備に向けて（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第8分科会 インクルーシブな図書館）
9：p575
- 荻野恵理子, 伊津美泉：図書館で社会課題を考える after5（アフターファイブ）ゼミの現場から（図書館で実践！SDGs 8 神奈川県立図書館）
8：p485-487
- 荻野 友美：杉並区立図書館「阿佐ヶ谷文士村資料」（ウチの図書館お宝紹介！ 248 杉並区立中央図書館・阿佐ヶ谷図書館）
6：p374-375
- 奥野 吉宏：図書館における匿名加工情報の提供と利用者の秘密を守ること <こらも図書館の自由>
8：p459
- 小澤美穂子：『田原のむかし話を伝える』紙芝居とデジタルデータによる湿美線電車機銃掃射の前日物語（特集：市民提案による図書館との協働）
4：p204-205
- 押木 和子：朝の読書のこれから 形骸化からの脱出（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える）
12：p724-726
- 小野貴士, 野村美里：公共図書館での10代の居場所づくり 杉並区立宮前図書館の取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館）
10：p630-631
- 小野 智仁：持続可能な資料保存（環境管理）（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第10分科会 資料保存）
9：p577
- 小野 永貴：高大連携における大学図書館の教育的価値 高校生の研究支援に向けた課題と展望（特集：高大連携における大学図書館の可能性）
11：p670-673
- 小原安須実, 松本賢一：図書館で学ぶ「気候変動とSDGs」気候非常事態宣言を表明 気候変動対策に市民・事業者の皆さまと一丸となって取り組むために（図書館で実践！SDGs 2 茅ヶ崎市立図書館）
2：p93-95
- 小原亜実子：読書バリアフリー アクセシブルな書籍の「借りる権利」と「買う自由」を目指して（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第9分科会 障害者サービス）
2：p79
- ：四国から 読書バリアフリーを進めるために（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第9分科会 障害者サービス）
9：p576
- <か・き・く・こ>
- 春日志麻 [ほか]：「知と心がみたされる図書館」を目指して
長野県安曇野市図書館（れふぁれんす三題噺 323 安曇野市中央図書館）
10：p646-647
- 片岡 裕斗：学生の視点から考える大学図書館のこれから（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して）
2：p87
- 加藤 志保：筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携 探究学習をサポートする大学図書館と、探究学習を協働・実践する大学（特集：高大連携における大学図書館の可能性）
11：p680-682
- 鎌田 均：IFLA アスタナ大会参加記（小特集：IFLA アスタナ大会レポート）
12：p746
- 金井 典子：ロールモデルがいない君へ 6カ国育ちのナージャが開くルートが異なる12人の物語（図書館員のおすすめ本 102）
6：p377
- 神里 菜里：沖縄県立図書館の公民館図書室への支援について（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち）
6：p362-363
- 上米良綾子：若山牧水の百首 自然に漂う未来の人（図書館員のおすすめ本 101）
5：p290
- 川下美佐子 [ほか]：編集手帳
1：p56
- 川島 宏：災害と図書館 能登半島地震の経験を今後の対策につなげる（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第13分科会 災害と図書館）
2：p83
- 川並 敏文：スナ・フジタ図鑑（図書館員のおすすめ本 103）
7：p443
- 川端 恵美：読書ので育む子どもの未来 読書活動支援の工夫と実践（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第3分科会 児童・青少年の読書活動支援）
9：p570
- 河村 知佳：ゆるい場をつくる人々 サードプレイスを生み出す17のストーリー（図書館員のおすすめ本 99）
3：p157
- 北川史歩子：本がつかなく日常の居場所 NPO法人ぐーぐーらぶの取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館）
10：p626-627
- 木伏 正至：美しいトマトの科学図鑑 東京大学の農場で野菜や果実を育ててみた（図書館員のおすすめ本 98）
2：p105
- 草野 太陽：僕には鳥の言葉がわかる（図書館員のおすすめ本 108）
12：p759
- 窪田 藍：専修大学図書館における高校生を対象とした司書インターンシップの取り組み（特集：高大連携における大学図書館の可能性）
11：p686-688
- 久保田崇子：愛媛から市民と共に未病・健康・医療を考える 健康・医療情報提供とヘルスリテラシー（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待

- 第7分科会 専門図書館・健康情報 9 : p574
- 熊谷 遙 : 思考の穴 (図書館員のおすすめ本 102) 6 : p376
- 藏所 和輝 : 昨今の米国の状況をどう受け止めるべきか <こらむ図書館の自由> 7 : p407
- 小池 信彦 : 図書館活動と著作権制度の動向 (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第6分科会 著作権) 2 : p76
- 鴻上 哲也 : 公共図書館とGX推進 必要課題にどう取り組むか (図書館で実践! SDGs 6 伊万里市民図書館) 6 : p369-371
- 小曾川真貴 : マンガの原理 (図書館員のおすすめ本 100) 4 : p228
- 小林 隆志 : 異動の季節と研修 <窓> : 「図書館は成長する有機体」を地でゆく <窓> 8 : p456
- : 市町村立図書館と共に歩む都道府県立図書館 <窓> 12 : p716
- 小林ふみ子 : 法政大学図書館の正岡子規文庫 (ウチの図書館お宝紹介! 251 法政大学図書館) 9 : p586-587
- 近藤真智子 : 1000万冊のストーリー 東京大学附属図書館における蔵書1000万冊達成を記念した広報事業について (特集: トビックスで追う図書館とその周辺) 1 : p24-26
- 権野 勝彦 : 開講! 木彫り熊概論 歴史と文化を旅する (図書館員のおすすめ本 106) 10 : p651
- 今野 千東 : 情報活用能力育成と大学入試 <窓> 2 : p60
- : 学校図書館への新聞配備 <窓> 6 : p336
- : 学校図書館に「専門・専任・正規」の「人」を <窓> 10 : p612
- 今野 宏 : 構想から20年。待望の図書館が開館。公民館図書室〜つなぎ図書館(利府町図書館)〜「リフノス」利府町図書館 (特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち) 6 : p354-356
- <さ・し・す・せ>
- 佐久間直美 : 地域に根付いた「読書の場」として 小規模図書室をフルに活かす大網白里 (特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち) 6 : p350-351
- 櫻井 理恵 : 本を通して地域を知る 図書館との協働事業から見る地域存続への新しい側面 (特集: 市民提案による図書館との協働) 4 : p208-210
- 佐々木 愛 : 起立性調節障害お悩み解消 BOOK 「朝起きられない」子に親ができること! (図書館員のおすすめ本 101) 5 : p290
- 佐々木春美 : 小学校×図書館「地元を学ぶ! 地元カタン体験会 in 中央区」開催レポート <北から南から> 6 : p378-379
- 佐藤 明俊 : 奈良県立図書館の“誕生”と戦争 戦捷記念図書館と橿原文庫 (特集: 戦後80年と図書館) 8 : p470-472
- 佐藤 克己 : 東日本大震災を乗り越えて 女川つながる図書館の今 (特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち) 6 : p352-353
- 佐藤千春 [ほか] : 埼玉県立不動岡高等学校, 東京都立花畑学園 (学校図書館建築見学報告 2) 1 : p48-50
- : 神奈川県立平塚農商高等学校, 豊島区立巢鴨北中学校, 愛知県大町立大口南小学校 (学校図書館建築見学報告 3) 2 : p100-103
- 汐碓美穂, 中島 寛 : 主体的で探究的な学びを支える開かれた学校図書館の創造 (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第3分科会 学校図書館) 2 : p73
- 志賀アリカ : 原点を問い続ける 今日どこにいて, どこからきて, これからどこへ向かうのか (特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5 : p269-271
- 柴田 朋彦 : 平櫛田中文庫 好奇心あふれる彫刻家の本棚 (ウチの図書館お宝紹介! 254 小平市中央図書館) 12 : p756-757
- 島 弘 : 子ども読書活動推進計画と児童サービスを考える (特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館) 7 : p412-415
- 嶋崎尚代, 山田かおり : 大学図書館のレファレンス 女性, 国際, 近代文学の事例から (れふあれんす三題噺 321 昭和女子大学図書館) 6 : p372-373
- 島田佳代子 : 学校に行かなかった僕が, あのころの自分に今なら言えること (図書館員のおすすめ本 107) 11 : p705
- 島田 貴司 : 大学・短大・高専図書館分科会に参加して (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して) 2 : p86
- 嶋田 学 : 未来の図書館 調査する住民の求める情報環境の整備 <図書館員の本棚> 4 : p230
- : 図書館の可能性を引き出すマネジメント 一般行政職からみた館長職とは (特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5 : p252-255
- 清水 紀子 : 倉敷市立中央図書館のレファレンス事例 (れふあれんす三題噺 322 倉敷市立中央図書館) 7 : p434-435
- 下吹越かおる : 「小さなまちの奇跡の図書館」館長論 NPO 法人本と人をつなぐ「そらまめの会」の18年の軌跡 (特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5 : p263-265
- 白濁 真弓 : 小さな町の図書館にはすごい歴史があった (小規模図書館奮戦記 316 北海道・枝幸町立図書館) 3 : p153
- 城内 涼 : 大阪ことばの謎 (図書館員のおすすめ本 107) 11 : p705
- 新藤 透 : 戦時体制下の図書館 読書会, 読書指導といった「読書環境をめぐる図書館の状況」を中心に (特集: 戦後80年と図書館) 8 : p462-465
- 新保 史生 : 個人情報保護法の変遷と図書館 令和2年及び3年改正を踏まえて (特集: トビックスで追う図書館とその周辺) 1 : p14-17
- 水津 正実 : 「情報発信拠点」図書館を実践の場としたSDGsの推進 SDGs未来都市うへの取り組み事例 (図書

(6)

- 館で実践！SDGs 9 宇部市立図書館) 9: p588-590
- 末次健太郎: 災害への備えと対応 (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第5分科会 災害と図書館) 9: p572
- 菅野 梨夏: 図書館にゲームを! 図書館の新しい可能性 <図書館員の本棚> 11: p707
- 杉本重雄, 植村八潮: 図書館とデジタル化 OPACから生成AI, そして次にくるもの (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第4分科会 図書館とデジタル化) 9: p571
- 鈴江夏文真, 日本図書館協会児童青少年委員会: 【報告】児童青少年委員会オンラインセミナー「若者は読書しないのか!? 中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること」 5: p287-289
- 鈴木 聖美: 東京ホテル図鑑 実測水彩スケッチ集 (図書館員のおすすめ本 106) 10: p651
- 鈴木 崇文: 著作権侵害を理由として資料の利用制限を求められた場合 <こらむ図書館の自由> 2: p63
- 鈴木崇文, 山口真也: 「図書館の自由に関する宣言」採択70周年 (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第7分科会 図書館の自由) 2: p77
- : 図書館の自由・この一年 (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第11分科会 図書館の自由) 9: p578
- 清家 芳郎: 研究支援と図書館 (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第2分科会 大学・短大・高専図書館) 9: p569
- 関矢麻由美: 時が止まった部屋 遺品整理人がミニチュアで伝える孤独死のはなし (図書館員のおすすめ本 108) 12: p758
- <た・つ・と>
- 大東文化大学60周年記念図書館: 「中村屋のボース」との深い縁 『ラース・ビハーリー・ボース関連資料』目録 (ウチの図書館お宝紹介! 253 大東文化大学60周年記念図書館) 11: p702-703
- 大藤麻千子, 矢田純子: 第5次滋賀県子ども読書活動推進計画県内すべての子どもが, より豊かな人生を送るために (特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館) 7: p420-421
- 高瀬 稜: 掬われる声, 語られる芸 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』 (図書館員のおすすめ本 98) 2: p104
- 高橋恵美子: 学校図書館の今とこれから あるべき姿を探る <日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会> 11: p689-693
- : 各種調査から見る学校司書の実態 (特集: アラカルト 学校図書館のこれからを考える) 12: p738-741
- 高橋樹一郎: 一人ひとり, みんなのために 求められる養成と研修の充実 (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第4分科会 児童サービス) 2: p74
- 高橋 冬子: 足立区立中央図書館の未返却図書資料対策プランについて (特集: トピックスで追う図書館とその周辺) 1: p27-29
- 高橋 将人: 訂正可能性の哲学 (図書館員のおすすめ本 105) 9: p594
- 高橋 和加: 学校図書館を活用した楽しい読書ワーク 読書活動・探究学習を支援する <図書館員の本棚> 12: p760
- 高柳有理子: 地域を巡回する移動販売車への資料返却 <こらむ図書館の自由> 6: p339
- 滝澤佳代子, 平松智子: 多彩な調査資源で司書の好奇心も刺激するレファレンス (れふあれんす三題晰 320 公益財団法人矯正協会矯正図書館) 5: p280-281
- 瀧瀬 香: 労働の歴史を次の時代へ (ウチの図書館お宝紹介! 252 独立行政法人労働政策研究・研修機構労働図書館) 10: p648-649
- 田中 敦司: 『図書館雑誌』5月号特集について <北から南から> 9: p592
- 田中 貴裕: 「第三次刈羽村子ども読書活動推進計画」の策定経過と特徴 「生きる力と豊かな感性 読書で育むかりわっ子」の育成に向けて (特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館) 7: p426-427
- 谷口 祥一: 生成AIを巡る議論にコミットを <窓> 3: p120
- : 本のもつ全体性と公共性に敬意 <窓> 7: p404
- : 夢を実現するための「事務」と「冒険」 <窓> 11: p664
- 谷口 露華: 旅の効用 人はなぜ移動するのか (図書館員のおすすめ本 103) 7: p443
- 谷畑 伸一: 視覚に障害がある方の社会参加に向けて (小規模図書館奮戦記 321 相模原市立視覚障害者情報センター) 10: p645
- 田村 俊作: これからの図書館情報学 人工知能と共生する図書館 <図書館員の本棚> 12: p760
- ツイマ アンナ: 図書館の発見について <新春エッセー> 1: p12-13
- 辻口 朋香: 国立市における公民館図書室独自の役割 本を通して人のつながりをつくる (特集: 公民館等図書室のさまざまなかたち) 6: p360-361
- 土屋 深優: 英国における孤独問題と公共図書館の貢献 (特集: 孤独に寄り添う図書館) 10: p628-629
- 寺義由香利: 高齢者施設への読書支援 市民の「読みたい」を叶えるために (特集: 市民提案による図書館との協働) 4: p202-203
- 土井 教子: ジェンダー・イノベーションの可能性 (図書館員のおすすめ本 105) 9: p594
- 土井しのぶ: 被爆から80年 原爆資料をつなぐ・届ける 広島市立中央図書館 (特集: 戦後80年と図書館) 8: p466-467
- 徳安 由希: 行政支援サービスの軌跡 (特集: トピックスで追

- う図書館とその周辺 1 : p30-31
- 豊田 恭子：専門図書館におけるキャリア形成と人材育成
〈図書館員の本棚〉 5 : p276
- 〈な・に・の〉
- 長尾 典子：海と地球の専門図書館！ JAMSTEC 図書館のレ
ファレンス事例について (れふあれんす三題漸
319 国立研究開発法人海洋研究開発機構図書館)
4 : p224-225
- 長尾 宗典：戦時下の帝国図書館 (特集：戦後80年と図書館)
8 : p476-478
- 中川 栄子：「しらたか本の森」から「宇宙 (未来)」に向かっ
て 小規模図書館のよさを活かして (小規模図書
館奮戦記 320 山形県・白鷹町立図書館)
9 : p591
- 中澤 晴香：アンパンマンと日本人 (図書館員のおすすめ本
106) 10 : p650
- 中島 寛, 汐碓美穂：主体的で探究的な学びを支える開かれた
学校図書館の創造 (令和6年度(第110回)全国
図書館大会長崎大会ハイライト 第3分科会 学
校図書館) 2 : p73
- 中島 美奈：ラトヴィアの図書館 光を放つ文化拠点 〈図書
館員の本棚〉 2 : p109
- 中園 長新：子どもたちの居場所として (特集：アラカルト
学校図書館のこれからを考える) 12 : p730-731
- 中田麻衣子：フランス近代シャンソンの歴史を巡るコレクシ
ョン 《相良匡俊氏寄贈シャンソン関連資料》(ウチ
の図書館お宝紹介！ 249 東京音楽大学付属図書
館) 7 : p440-441
- 長嶺 陽子：俘虜収容所の記録が伝える日独交流 板東コレク
ション (ウチの図書館お宝紹介！ 246 ドイツ
日本研究所図書室) 4 : p226-227
- 永見弘美文責, 日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員
会：非正規雇用職員セミナー「韓国の図書館職員
制度と非正規雇用改革」報告 3 : p148-149
- 中村崇 [ほか]：埼玉県立不動岡高等学校, 東京都立花畑学園
(学校図書館建築見学報告 2) 1 : p48-50
：神奈川県立平塚農商高等学校, 豊島区立巢鴨北中
学校, 愛知県大口町立大口南小学校 (学校図書館
建築見学報告 3) 2 : p100-103
- 仲村 拓真：2050年の図書館を探る 何が変わり・変わらない
のか 〈図書館員の本棚〉 8 : p489
- 中村 保彦：編集手帳 11 : p712
- 中村保彦 [ほか]：編集手帳 1 : p56
- 名富 綾乃：学校図書館での平和教育 子どもの未来をつなぐ
学校司書の役割を探る (特集：戦後80年と図書
館) 8 : p468-469
- 成田千絵 [ほか]：「知と心がみたまされる図書館」を目指して
長野県安曇野市図書館 (れふあれんす三題漸
323 安曇野市中央図書館) 10 : p646-647
- 成瀬 雅人：地域をつなぐ, 地域とつながる図書館と書店 出
版社・書店の現状を認識し, 読書文化を守るため,
図書館に何ができるかを本気で議論する (令和7
年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待
第6分科会 出版社・書店・図書館) 9 : p573
- 新川 達郎：市民提案型の協働事業制度の現状と課題 図書館
や社会教育施設における展開のために (特集：市
民提案による図書館との協働) 4 : p192-195
- 新川 裕美：愛知県図書館の多文化サービス (特集：多文化共
生に資する図書館) 3 : p134-135
- 西川 啓子：学校図書館で働く非正規雇用職員 (令和6年度
(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト
第14分科会 非正規雇用職員) 2 : p84
- 西川 美羽：サブカルチャーのこころ オタクなカウンセラー
がまじめに語ってみた (図書館員のおすすめ本
108) 12 : p758
- 西澤 知紗：わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」 中村哲が本当に
伝えたかったこと (図書館員のおすすめ本 104)
8 : p493
- 仁科沙也佳：幅広い世代の図書館へ そして, 子どもたちの読
書活動推進のために (小規模図書館奮戦記 318
千葉県・東庄町図書館) 6 : p367
- 西村ミドリ：「ふつう」の私たちが, 誰かの人権を奪うとき 声
なき声に耳を傾ける30の物語 (図書館員のおすす
め本 104) 8 : p492
- 日本図書館協会建築賞審査選考委員会, 松尾和生文責：第41回
日本図書館協会建築賞 8 : p479-481
- 日本図書館協会児童青少年委員会, 鈴江夏文責：【報告】児童青
少年委員会オンラインセミナー「若者は読書しな
いのか!?! 中高生世代の読書実態と公共図書館担
当者に期待すること」 5 : p287-289
- 日本図書館協会選挙管理委員会：公益社団法人日本図書館協会
2022-2025年度代議員(個人・団体会員選出)補欠
選挙結果報告 4 : p216
：公示 公益社団法人日本図書館協会代議員選出選
挙の実施について 10 : p620-621
- 日本図書館協会大学図書館部会大学図書館シンポジウム担当：
2024年度大学図書館シンポジウム「2030「デジタ
ル・ライブラリー」の実現に向けた取り組み」開
催報告 4 : p212-215
- 日本図書館協会図書館災害対策委員会：図書館災害対策委員会
災害支援活動会計報告(2024年度) 9 : p593
- 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会, 青柳英治文責：「図書館で
実践! SDGs」連載にあたって (図書館で実践!
SDGs) 1 : p40
- 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会, 宇野亮一文責：特集に
あたって (特集：公民館等図書室のさまざまなか
たち) 6 : p345
- 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会, 松本哲郎文責：特集に
あたって (特集：「そと」からの図書館長による
新たな取り組み) 5 : p251
- 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会, 鷲山香織文責：特集に
あたって (特集：子どもの読書活動推進計画と図
書館) 7 : p411
- 日本図書館協会図書館政策企画委員会：「公立図書館の任務と目
標」の「図書館システム整備のための数値基準」

- 2023年改訂 5: p292-294
 : 図書館政策セミナー「公立図書館の任務と目標－その成立過程と歩み、活用のされ方、今後の維持・改訂のあり方」報告 9: p583-585
- 日本図書館協会図書館調査事業委員会：都道府県図書館の統計『日本の図書館』2025年調査票より（数字で見る日本の図書館 87） 8: p494-496
- 日本図書館協会認定司書事業委員会：第16期「認定司書」申請（更新申請を含む）を受け付けます 10: p638-641
- 日本図書館協会認定司書事業委員会，日本図書館協会認定司書審査会：第15期（2025年度）日本図書館協会認定司書名簿及び審査（報告） 5: p277-279
- 日本図書館協会認定司書審査会，日本図書館協会認定司書事業委員会：第15期（2025年度）日本図書館協会認定司書名簿及び審査（報告） 5: p277-279
- 日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会，永見弘美文責：非正規雇用職員セミナー「韓国の図書館職員制度と非正規雇用改革」報告 3: p148-149
- 庭井史絵，岩崎れい訳：IFLA-UNESCO 学校図書館宣言2025 7: p431-433
- 野口 武悟：多文化共生に資する学校図書館の施策と実践（特集：多文化共生に資する図書館） 3: p144-145
- 野末俊比古：情報リテラシー教育をめぐる海外の動向 日本型の枠組みづくりに向けて（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第8分科会図書館利用教育） 2: p78
- 野田 仁：カザフスタンの首都アスタナの紹介（IFLA アスタナ大会へのおさそい 2） 7: p436
- 野村美里，小野貴士：公共図書館での10代の居場所づくり 杉並区立宮前図書館の取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館） 10: p630-631
- <は・ひ・ふ・ほ>
- 長谷川優子：編集手帳 7: p452
 : 編集手帳 12: p774
- 長谷川優子 [ほか]：埼玉県立不動岡高等学校，東京都立花畑学園（学校図書館建築見学報告 2） 1: p48-50
 : 編集手帳 1: p56
 : 神奈川県立平塚農商高等学校，豊島区立巣鴨北中学校，愛知県大口町立大口南小学校（学校図書館建築見学報告 3） 2: p100-103
- 長谷川幸代：WLIC2025カザフスタン「Local History and Genealogy Section（地域史，系図学部会）」活動報告（小特集：IFLA アスタナ大会レポート） 12: p748
- 秦秀文 [ほか]：編集手帳 1: p56
- 八田 裕子：ホーナー日本交流基金による研修報告 4: p217-219
 : 誇り高き草原の民が住まう国カザフスタン（IFLA アスタナ大会へのおさそい 1） 6: p368
 : オーテピア高知図書館とSDGs 地域と未来につながる図書館活動（図書館で実践！SDGs 12
 オーテピア高知図書館） 12: p752-753
- 八段 一恵：市民提案型まちづくり支援事業「市民のための図書館を，市民が考える講座」守山市立図書館友の会の取り組みを通して（特集：市民提案による図書館との協働） 4: p200-201
- 濱真由美 [ほか]：「対話」から始まる学校図書館づくり 茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12: p734-737
- 浜口美由紀：図書館の多文化サービスと向き合って 多文化サービス委員会の活動（特集：多文化共生に資する図書館） 3: p126-129
- 肥後 衣里：きょう，ゴリラをうえたよ 愉快で深いこどものいいまちがい集（図書館員のおすすめ本 101） 5: p291
- 平井 真理：ヤンキーと地元 解体屋，風俗経営者，ヤミ業者になった沖縄の若者たち（図書館員のおすすめ本 104） 8: p492
- 平形ひろみ：歴史記録を今に，未来へつなぐ <こらむ図書館の自由> 9: p563
- 平沢 剛志：「頭がいい」とはどういうことか 脳科学から考える（図書館員のおすすめ本 106） 10: p650
- 平田 泰子：IFLA 多文化社会図書館サービス分科会と日本の多文化サービス（特集：多文化共生に資する図書館） 3: p141-143
- 平松智子，滝澤佳代子：多様な調査資源で司書の好奇心も刺激するレファレンス（れふあれんす三題晰 320 公益財団法人矯正協会矯正図書館） 5: p280-281
- 深谷 恵理：Live! 図書館員のおすすめ本 人はなぜ本を紹介するのか リマスター版 <図書館員の本棚> 4: p231
 : 「ハラスメント」の解剖図鑑（図書館員のおすすめ本 102） 6: p377
- 福士明日香：埼玉県立図書館の多文化サービス普及に向けた取り組み（特集：多文化共生に資する図書館） 3: p138-140
- 福嶋 純之：震災の経験と記憶を，資料を通じて伝える（小規模図書館奮戦記 322 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター資料室） 12: p749
- 福田千晶 [ほか]：多角的な視点による課題解決をめざして（れふあれんす三題晰 316 尼崎市立中央図書館） 1: p44-45
- 藤坂 康司：指定管理館の館長になって（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み） 5: p266-268
- 藤山 明子：チャンスをつかめ！ 公民館図書室から公共図書館へ（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6: p357-359
- 舟越 瑞枝：図書館と居場所 <図書館員の本棚> 11: p706
- 古川真理，稲井達也：高校の探究学習を促す大学図書館の理論的な枠組と支援の実際（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11: p677-679
- 星川智隆 [ほか]：編集手帳 1: p56
- 星野 盾：「風の谷」という希望 残すに値する未来をつくる

- (図書館員のおすすめ本 107) 11: p704
堀 純子: 図書館は、孤独・孤立に対する取り組みができるのか (特集: 孤独に寄り添う図書館) 10: p632-633
- 堀之内あずさ: イタリア女子が沼ったジワる日本語 (図書館員のおすすめ本 98) 2: p104
本田麻衣子: 「みなサーチ」1年の歩みと活用のすすめ (特集: トビックスで追う図書館とその周辺) 1: p21-23
- くま・み・む・も>
- 米田由紀子: 現代「ますように」考 こわくてかわいい日本の民間信仰 (図書館員のおすすめ本 107) 11: p704
前澤 慎也: 数学嫌いな人のための数学 新装版 (図書館員のおすすめ本 97) 1: p47
前田 小藻: 図書館がつなく (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して) 2: p88
榎盛可那子: 『図書館員のための英会話ハンドブック 国内編』改訂の裏側 3: p146-147
舩田江里佳: 全国図書館大会に参加して 連携からつながる図書館サービスの未来を考えて (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して) 2: p86
松井 正英: 児童生徒に関する情報の共有について考える <こらむ図書館の自由> 3: p123
松井祐次郎: 非正規雇用とキャリア形成 (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 第12分科会 非正規雇用職員) 9: p579
松浦亜希子: やまなみ (図書館員のおすすめ本 99) 3: p156
松岡 徹: 令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 (令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待 全体会) 9: p567
松尾和生文責, 日本図書館協会建築賞審査選考委員会: 第41回日本図書館協会建築賞 8: p479-481
松本 和代: ポーズの美術解剖学 人体表現の幅が広がる (図書館員のおすすめ本 97) 1: p46
松本賢一, 小原安須実: 図書館で学ぶ「気候変動とSDGs」気候非常事態宣言を表明 気候変動対策に市民・事業者の皆さまと一丸となって取り組むために (図書館で実践! SDGs 2 茅ヶ崎市立図書館) 2: p93-95
松本哲郎 [ほか]: 編集手帳 1: p56
松本 哲郎: 編集手帳 3: p180
松本哲郎文責, 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会: 特集にあたって (特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5: p251
松本 直樹: ポスター発表のプロセス (小特集: IFLA アスタナ大会レポート) 12: p747
三浦 太郎: 国際的な図書館界はいま: IFLA アスタナ大会 (小特集: IFLA アスタナ大会レポート) 1: p37-39
- 水嶋 直子: 快眠法の前に今さら聞けない睡眠の超基本 ビジュアル版 (図書館員のおすすめ本 101) 5: p291
水田 清志: もみわ広場でつながる喜び 市民提案の協働事業に参加した7年間 (特集: 市民提案による図書館との協働) 4: p196-197
溝口南 [ほか]: 「対話」から始まる学校図書館づくり 茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター (特集: アラカルト 学校図書館のこれからを考える) 12: p734-737
道上久恵, 植月琢也: 強みを活かしあって協働する 図書館とSDGs担当課との連携事例 (図書館で実践! SDGs 1 藤沢市湘南大庭市民図書館) 1: p41-43
宮井 一帆: アンビバレント・ヒップホップ (図書館員のおすすめ本 105) 9: p595
宮崎 志保: 長野市立長野図書館のレファレンス事例 (れふあれんす三題晰 318 長野市立長野図書館) 3: p150-151
宮澤 優子: 子ども読書活動推進計画の策定への専門職のかかわり 実効性と確実な効果につながる計画に向けて (特集: 子どもの読書活動推進計画と図書館) 7: p424-425
宮原柔太郎: 編集手帳 5: p332
: 編集手帳 8: p556
宮原柔太郎 [ほか]: 編集手帳 1: p56
宮原みゆき: その修理, 大丈夫? 修理の基本をおさえよう (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第10分科会 資料保存) 2: p80
宮丸由美子: 「引き札」の紹介 (ウチの図書館お宝紹介! 247 九州産業大学図書館) 5: p282-283
村上 健治: 多文化サービス最前線 (令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第12分科会 多文化サービス) 2: p82
村上 孝弘: 戦時下の大学図書館 「勤勞奉仕出張文庫」のことなど <こらむ図書館の自由> 10: p615
村上 民: 日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会に参加して <日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会> 11: p693
望月 静香: 南アルプス市立図書館のレファレンス事例 (れふあれんす三題晰 324 南アルプス市立図書館) 11: p700-701
森 いづみ: わたしたちはどこへ向かうのか 大学から県立長野図書館に飛び込んで実践したこと (特集: 「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5: p259-262
文部科学省: 子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体(個人)の取り組み事例について (霞が関だより 254) 1: p37
: 飯館村立までの里のこども園の取り組み (絵本で生まれる豊かな世界) (霞が関だより 254) 1: p37-39

- ： 文部科学省における図書館・読書活動推進関連予算案（霞が関だより 255） 2：p89-92
- ： 4月23日は「子ども読書の日」（霞が関だより 256） 3：p152
- ： 2025年度の図書館職員に関する研修について（霞が関だより 257） 4：p211
- ： 子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）表彰を開催しました。（霞が関だより 258） 5：p272-275
- ： 視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画（第二期）の策定について（霞が関だより 259） 6：p364
- ： 令和6年度 地方公共団体における視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する計画の策定状況調査の結果について（霞が関だより 259） 6：p365-366
- ： 令和6年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究（電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）（霞が関だより 260） 7：p428-430
- ： 令和6年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について（霞が関だより 261） 8：p482
- ： 東京学芸大学「学校図書館運営専門委員会」の取り組み 令和6年度の実践から見える学校図書館活用の実践について（霞が関だより 261） 8：p482-484
- ： 子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について（霞が関だより 262） 9：p580
- ： 岐阜市立図書館の取り組み 図書館は本で人とまちをつなぐ屋根の付いた公園です（霞が関だより 262） 9：p580-582
- ： 令和6年度「読書活動推進事業」の取組事例について（霞が関だより 263） 10：p634
- ： 地域における読書活動推進事業 兵庫県取組（霞が関だより 263） 10：p634-637
- ： 令和7年度新任図書館長研修（霞が関だより 264） 11：p694-695
- ： 読書バリアフリーのはじめ方 令和6年度活動報告（霞が関だより 265） 12：p750-751
- ＜や・ゆ・よ＞
- 柳生 紀子：学生のための大学図書館へ！ なんでも話そう チャンボン・ワークショップ（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第2分科会 大学・短大・高专図書館） 2：p72
- 矢田純子，大藤麻千子：第5次滋賀県子ども読書活動推進計画 県内すべての子どもが，より豊かな人生を送るために（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7：p420-421
- 山口 真也：自由宣言ポスターをめぐる2つのエピソード <こらむ図書館の自由> 4：p187
- 山口真也，鈴木崇文：「図書館の自由に関する宣言」採択70周年（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第7分科会 図書館の自由） 2：p77
- ： 図書館の自由・この一年（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第11分科会 図書館の自由） 9：p578
- 山崎 勇気：学びの転換期に図書館はどう立ち会うか 中学生が「卒業論文」を書く探究学習の現場から（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11：p683-685
- 山田かおり，嶋崎尚代：大学図書館のレファレンス 女性，国際，近代文学の事例から（れふあれんす三題漸 321 昭和女子大学図書館） 6：p372-373
- 山中 沙紀：「好き」を言語化する技術 推しの素晴らしさを語りたいのに「やばい！」しかでてこない（図書館員のおすすめ本 105） 9：p595
- 山成家樹子：図書館を建てる，図書館で暮らす 本のための家づくり（図書館員のおすすめ本 104） 8：p493
- 山本 章弘：「行政職で培った経験・感覚」は強い武器になる 行政職の図書館長として（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み） 5：p256-258
- 山本 淳：ドイツとフランスのモダニズムを映す貴重書群 <ドイツ表現主義文庫> <鈴木信太郎文庫>（ウチの図書館お宝紹介！ 244 獨協大学図書館） 2：p96-97
- 山本美和 [ほか]：多角的な視点による課題解決をめざして（れふあれんす三題漸 316 尼崎市立中央図書館） 1：p44-45
- 柚木 聖：患者のための図書館学 医療・健康情報リテラシーを鍛える <図書館員の本棚> 1：p51
- 吉井 伶奈：北欧の美しい図書館 <図書館員の本棚> 1：p52
- 好川 園恵：「日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画」目録 特色あるコレクション（ウチの図書館お宝紹介！ 250 摂南大学図書館） 8：p490-491
- 吉田 右子：ただそこにあること 北欧公共図書館の孤独問題への取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館） 10：p622-625
- 吉野 知義：千葉市図書館情報ネットワーク協議会のご紹介 館種を超えた地域の図書館ネットワーク（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p34-35
- 吉村 きみ：天気でもよとく名画 フェルメールのち浮世絵，ときどきマンガ（図書館員のおすすめ本 97） 1：p46
- 米田 雅朗：大久保図書館の多文化サービスについて 人と人とがつながりあえる図書館をめざして（特集：多文化共生に資する図書館） 3：p136-137
- 米山 薫：無印良品と多摩市立中央図書館によるSDGs関連イベントの取り組みについて（図書館で実践！ SDGs 5 多摩市立中央図書館） 5：p284-286
- ： 編集手帳 9：p608
- 米山薫 [ほか]：編集手帳 1：p56

<わ>

- 若井世台子：市民・留学生・研究者のためのアジア・アフリカ
図書館（小規模図書館奮戦記 317 アジア・ア
フリカ図書館） 4：p223
- 若園 義彦：コモンの「自治」論（図書館員のおすすめ本
99） 3：p157
- 脇田 妙子：社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治
す方法（図書館員のおすすめ本 100） 4：p229
- 鷺山 香織：編集手帳 2：p116
- 鷺山 香織 [ほか]：編集手帳 1：p56
- 鷺山香織文責，日本図書館協会図書館雑誌編集委員会：特集に
あたって（特集：子どもの読書活動推進計画と図
書館） 7：p411
- 渡邊 桂子：女性たちの声は、ヒットチャートの外に 音楽と
生きる女性30名の“今”と“姿勢”を探るインタ
ビュー集（図書館員のおすすめ本 99）
3：p156
- 渡邊葉瑠加：絵で見る日本の図書館の歴史 <図書館員の本
棚> 7：p444
- 渡辺真希子：調査基盤としてのレファレンス・サービス 科
学・医療分野のレファレンス・サービスに対する
社会的ニーズ（特集：トピックスで追う図書館と
その周辺） 1：p18-20
- 渡邊有理子：多様性を認め合う空間へ 東京学芸大学附属国際
中等教育学校（れふあれんす三題晰 325 東京
学芸大学附属国際中等教育学校総合メディアセン
ター） 12：p754-755

件名索引

<あ・い・う・え・お>

愛知県図書館

新川 裕美：愛知県図書館の多文化サービス（特集：多文化共生に資する図書館） 3：p134-135

アジア・アフリカ図書館

若井世台子：市民・留学生・研究者のためのアジア・アフリカ図書館（小規模図書館奮戦記 317 アジア・アフリカ図書館） 4：p223

足立区立図書館

高橋 冬子：足立区立中央図書館の未返却図書資料対策プランについて（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p27-29

指宿市立図書館

下吹越かおる：「小さなまちの奇跡の図書館」館長論 NPO 法人本と人をつなぐ「そらまめの会」の18年の軌跡（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み） 5：p263-265

伊万里市民図書館

鴻上 哲也：公共図書館とGX推進 必要課題にどう取り組むか（図書館で実践！SDGs 6 伊万里市民図書館） 6：p369-371

宇治市図書館

有林 沙央：宇治市図書館におけるSDGs関連事業例（図書館で実践！SDGs 10 宇治市図書館） 10：p642-644

宇部市立図書館

水津 正実：「情報発信拠点」図書館を実践の場としたSDGsの推進 SDGs未来都市うべの取り組み事例（図書館で実践！SDGs 9 宇部市立図書館） 9：p588-590

枝幸町立図書館

白濁 真弓：小さな町の図書館にはすごい歴史があった（小規模図書館奮戦記 316 北海道・枝幸町立図書館） 3：p153

絵本

伊藤 孝良：iPadアプリによる絵本づくり 持続可能な共生社会を目指して「SDGs質の高い教育をみんなに」（図書館で実践！SDGs 3 ビッケの会とよはし） 3：p158-160

文部科学省：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について（霞が関だより 254） 1：p37

：飯館村立までの里のこども園の取り組み（絵本で生まれる豊かな世界）（霞が関だより 254） 1：p37-39

オーテピア高知図書館

八田 裕子：オーテピア高知図書館とSDGs 地域と未来につながる図書館活動（図書館で実践！SDGs 12

オーテピア高知図書館）

12：p752-753

沖縄県立図書館

神里 茉里：沖縄県立図書館の公民館図書室への支援について（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち）

6：p362-363

小布施町立図書館

志賀アリカ：原点を問い続ける 今どこにいて、どこからきて、これからどこへ向かうのか（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み） 5：p269-271

<か・き・け・こ>

カザフスタン

野田 仁：カザフスタンの首都アスタナの紹介（IFLAアスタナ大会へのおさそい 2） 7：p436

八田 裕子：誇り高き草原の民が住まう国カザフスタン（IFLAアスタナ大会へのおさそい 1） 6：p368

学校図書館

有山裕美子：第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読む 自治体における計画策定の意義と学校図書館との連携（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7：p416-419

押木 和子：朝の読書のこれから 形骸化からの脱出（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p724-726

小野 永貴：高大連携における大学図書館の教育的価値 高校生の研究支援に向けた課題と展望（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11：p670-673

加藤 志保：筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携 探究学習をサポートする大学図書館と、探究学習を協働・実践する大学（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11：p680-682

佐藤千春 [ほか]：埼玉県立不動岡高等学校、東京都立花畑学園（学校図書館建築見学報告 2） 1：p48-50

：神奈川県立平塚農商高等学校、豊島区立巣鴨北中学校、愛知県大町立大口南小学校（学校図書館建築見学報告 3） 2：p100-103

高橋恵美子：学校図書館の今とこれから あるべき姿を探る <日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会> 11：p689-693

：各種調査から見る学校司書の実態（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p738-741

中園 長新：子どもたちの居場所として（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p730-731

庭井史絵、岩崎れい訳：IFLA-UNESCO 学校図書館宣言2025 7：p431-433

野口 武悟：多文化共生に資する学校図書館の施策と実践（特集：多文化共生に資する図書館） 3：p144-145

溝口南 [ほか]：「対話」から始まる学校図書館づくり 茅野市立永明小学校・中学校メディアセンター（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p734-737

村上 民：日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集

会東京大会に参加して <日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究会東京大会>

11 : p693

文部科学省：令和6年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について（霞が関だより 261） 8 : p482-484
：東京学芸大学「学校図書館運営専門委員会」の取り組み 令和6年度の実践から見える学校図書館活用の実践について（霞が関だより 261）

8 : p482-484

山崎 勇気：学びの転換期に図書館はどう立ち会うか 中学生が「卒業論文」を書く探究学習の現場から（特集：高大連携における大学図書館の可能性）

11 : p683-685

学校図書館—アメリカ合衆国

井上 靖代：戦う米国の学校図書館員 禁書問題と学校図書館員の動向（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12 : p721-723

学校図書館—滋賀県

矢田純子, 大藤麻千子：第5次滋賀県子ども読書活動推進計画 県内すべての子どもが、より豊かな人生を送るために（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7 : p420-421

学校図書館—沖縄県

名富 綾乃：学校図書館での平和教育 子どもの未来をつなぐ 学校司書の役割を探る（特集：戦後80年と図書館） 8 : p468-469

家庭文庫

北川史歩子：本がつなぐ日常の居場所 NPO法人ぐーぐーらいの取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館）

10 : p626-627

神奈川県立図書館

荻野恵理子, 伊津美泉：図書館で社会課題を考える after5（アフターファイブ）ゼミの現場から（図書館で実践！SDGs 8 神奈川県立図書館）

8 : p485-487

川越市

櫻井 理恵：本を通して地域を知る 図書館との協働事業から見る地域存続への新しい側面（特集：市民提案による図書館との協働） 4 : p208-210

川越市立図書館

櫻井 理恵：本を通して地域を知る 図書館との協働事業から見る地域存続への新しい側面（特集：市民提案による図書館との協働） 4 : p208-210

稀書

石黒 志保：山形に残る琉球・沖縄史料 伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の紹介（ウチの図書館お宝紹介！ 245 山形大学附属図書館） 3 : p154-155

小林ふみ子：法政大学図書館の正岡子規文庫（ウチの図書館お宝紹介！ 251 法政大学図書館） 9 : p586-587

長嶺 陽子：俘虜収容所の記録が伝える日独交流 板東コレクション（ウチの図書館お宝紹介！ 246 ドイツ日本研究所図書室） 4 : p226-227

山本 淳：ドイツとフランスのモダニズムを映す貴重書群

<ドイツ表現主義文庫>と<鈴木信太郎文庫>

（ウチの図書館お宝紹介！ 244 獨協大学図書館）

2 : p96-97

岐阜市立図書館

文部科学省：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について（霞が関だより 262） 9 : p580

：岐阜市立図書館の取り組み 図書館は本で人とまちをつなぐ屋根の付いた公園です（霞が関だより 262） 9 : p580-582

九州産業大学図書館

宮丸由美子：「引き札」の紹介（ウチの図書館お宝紹介！ 247 九州産業大学図書館） 5 : p282-283

行政

徳安 由希：行政支援サービスの軌跡（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1 : p30-31

京丹波町図書館

藤山 明子：チャンスをつかめ！ 公民館図書館から公共図書館へ（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p357-359

郷土資料

大野 浩：「島根の戦争・銃後体験記録データベース構築講座」について（特集：戦後80年と図書館）

8 : p473-475

小澤美穂子：『田原のむかし話を伝える』紙芝居とデジタルデータによる渥美線電車機銃掃射の前日物語（特集：市民提案による図書館との協働）

4 : p204-205

ゲーム

佐々木春美：小学校×図書館「地元を学ぶ！地元カタン体験会 in 中央区」開催レポート <北から南から>

6 : p378-379

健康情報

渡辺真希子：調査基盤としてのレファレンス・サービス 科学・医療分野のレファレンス・サービスに対する社会的ニーズ（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1 : p18-20

原子爆弾—被害

土井しのぶ：被爆から80年 原爆資料をつなぐ・届ける 広島市立中央図書館（特集：戦後80年と図書館）

8 : p466-467

研修（図書館）

八田 裕子：ホーナー日本交流基金による研修報告

4 : p217-219

研修（図書館員）

文部科学省：2025年度の図書館職員に関する研修について（霞が関だより 257） 4 : p211

：令和7年度新任図書館長研修（霞が関だより 264） 11 : p694-695

県立長野図書館

森 いづみ：わたしたちはどこへ向かうのか 大学から県立長野図書館に飛び込んで実践したこと（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み）

- 5 : p259-262
- 高校生**
- 窪田 藍：専修大学図書館における高校生を対象とした司書インターンシップの取り組み（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11 : p686-688
- 公民館**
- 青山 鉄兵：公民館図書室の現代的意義「本棚の手前」から広がる可能性（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p346-349
- 公民館一大網白里市**
- 佐久間直美：地域に根付いた「読書の場」として 小規模図書室をフルに活かす大網白里（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p350-351
- 公民館一沖縄県**
- 神里 茉里：沖縄県立図書館の公民館図書室への支援について（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p362-363
- 公民館一女川町**
- 佐藤 克己：東日本大震災を乗り越えて 女川つながる図書館の今（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p352-353
- 公民館一国立市**
- 辻口 朋香：国立市における公民館図書室独自の役割 本を通して人のつながりをつくる（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6 : p360-361
- 国際図書館連盟**
- 鎌田 均：IFLA アスタナ大会参加記（小特集：IFLA アスタナ大会レポート） 12 : p746
- 野田 仁：カザフスタンの首都アスタナの紹介（IFLA アスタナ大会へのおさそい 2） 7 : p436
- 長谷川幸代：WLIC2025カザフスタン「Local History and Genealogy Section（地域史、系図学会）」活動報告（小特集：IFLA アスタナ大会レポート） 12 : p748
- 八田 裕子：誇り高き草原の民が住まう国カザフスタン（IFLA アスタナ大会へのおさそい 1） 6 : p368
- 平田 泰子：IFLA 多文化社会図書館サービス分科会と日本の多文化サービス（特集：多文化共生に資する図書館） 3 : p141-143
- 松本 直樹：ポスター発表のプロセス（小特集：IFLA アスタナ大会レポート） 12 : p747
- 三浦 太郎：国際的な図書館界はいま：IFLA アスタナ大会（小特集：IFLA アスタナ大会レポート） 12 : p742-745
- 国分寺市立図書館**
- 青木 知子：自分が欲しかった時間を いま必要な人へ（特集：市民提案による図書館との協働） 4 : p206-207
- 個人情報保護法**
- 新保 史生：個人情報保護法の変遷と図書館 令和2年及び3年改正を踏まえて（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1 : p14-17
- 小平市中央図書館**
- 柴田 朋彦：平櫛田中文庫 好奇心あふれる彫刻家の本棚（ウチの図書館お宝紹介！ 254 小平市中央図書館） 12 : p756-757
- 孤独**
- 土屋 深優：英国における孤独問題と公共図書館の貢献（特集：孤独に寄り添う図書館） 10 : p628-629
- 堀 純子：図書館は、孤独・孤立に対する取り組みができるのか（特集：孤独に寄り添う図書館） 10 : p632-633
- 吉田 右子：ただそこにあること 北欧公共図書館の孤独問題への取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館） 10 : p622-625
- <さ・し・す・せ>
- 災害**
- 日本図書館協会図書館災害対策委員会：図書館災害対策委員会災害支援活動会計報告（2024年度） 9 : p593
- 埼玉県立図書館**
- 福士明日香：埼玉県立図書館の多文化サービス普及に向けた取り組み（特集：多文化共生に資する図書館） 3 : p138-140
- 相模原市立視覚障害者情報センター**
- 谷畑 伸一：視覚に障害がある方の社会参加に向けて（小規模図書館奮戦記 321 相模原市立視覚障害者情報センター） 10 : p645
- 児童**
- 有山裕美子：第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読む 自治体における計画策定の意義と学校図書館との連携（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7 : p416-419
- 島 弘：子ども読書活動推進計画と児童サービスを考える（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7 : p412-415
- 文部科学省：4月23日は「子ども読書の日」（霞が関だより 256） 3 : p152
- ：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）表彰を開催しました。（霞が関だより 258） 5 : p272-275
- ：令和6年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究（電子図書館：電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）（霞が関だより 260） 7 : p428-430
- 児童サービス**
- 島 弘：子ども読書活動推進計画と児童サービスを考える（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7 : p412-415
- 文部科学省：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について（霞が関だより 262） 9 : p580
- ：岐阜市立図書館の取り組み 図書館は本で人とまちをつなぐ屋根の付いた公園です（霞が関だより 262） 9 : p580-582
- 島根県立図書館**

- 大野 浩：「鳥根の戦争・銃後体験記録データベース構築講座」について（特集：戦後80年と図書館）
8：p473-475
- 社会教育施設
- 新川 達郎：市民提案型の協働事業制度の現状と課題 図書館や社会教育施設における展開のために（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p192-195
- 障害者サービス
- 石川 典子：誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスを目指して 豊島区立図書館の「りんごのたな」の取り組み（図書館で実践！SDGs 11 豊島区立図書館） 11：p697-699
- 本田麻衣子：「みなサーチ」1年の歩みと活用のすすめ（特集：トピックスで追う図書館とその周辺）
1：p21-23
- 文部科学省：読書バリアフリーのはじめ方 令和6年度活動報告（霞が関だより 265） 12：p750-751
- 湘南藤沢徳洲会病院患者図書室ラベンダー
- 伊藤 友香：たくさんの方に支えられて、今も頑張っています（小規模図書館奮戦記 319 医療法人徳洲会湘南藤沢徳洲会病院患者図書室ラベンダー） 8：p488
- 情報教育
- 中園 長新：子どもたちの居場所として（特集：アラカルト学校図書館のこれからを考える） 12：p730-731
- 情報検索
- 本田麻衣子：「みなサーチ」1年の歩みと活用のすすめ（特集：トピックスで追う図書館とその周辺）
1：p21-23
- 書籍商一留萌市
- 伊端 隆康：書店支援で市民と図書館が連携（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p32-33
- 書評
- 青谷 忍：明けても暮れても食べて食べて（図書館員のおすすめ本 103） 7：p442
- 伊草 祥子：水族館人 今まで見てきた景色が変わる15のストーリー（図書館員のおすすめ本 97） 1：p47
- 伊藤 奈絵：かがくいひろしの世界（図書館員のおすすめ本 98） 2：p105
- 井上 香織：はくの村は壁で囲まれた パレスチナに生きる子どもたち（図書館員のおすすめ本 100）
4：p228
- 今井つかさ：AIにはない「思考力」の身につけ方 ことばの学びはなぜ大切なのか？（図書館員のおすすめ本 102） 6：p376
- 今井 紀子：ぼくたちはChatGPTをどう使うか（図書館員のおすすめ本 103） 7：p442
- 岩岡 朗子：広島平和記念資料館は問いかける（図書館員のおすすめ本 108） 12：p759
- 大林 正智：読書と暴動 ブッシー・ライオットのアクティビズム入門（図書館員のおすすめ本 100）
4：p229
- 金井 典子：ロールモデルがない君へ 6カ国育ちのナージャが聞くルーツが異なる12人の物語（図書館員のおすすめ本 102） 6：p377
- 上米良綾子：若山牧水の百首 自然に漂う未来の人（図書館員のおすすめ本 101） 5：p290
- 川並 敏文：スナ・フジタ図鑑（図書館員のおすすめ本 103） 7：p443
- 河村 知佳：ゆるい場をつくる人々 サードプレイスを生み出す17のストーリー（図書館員のおすすめ本 99）
3：p157
- 木伏 正至：美しいトマトの科学図鑑 東京大学の農場で野菜や果実を育ててみた（図書館員のおすすめ本 98） 2：p105
- 草野 太陽：僕には鳥の言葉がわかる（図書館員のおすすめ本 108） 12：p759
- 熊谷 遥：思考の穴（図書館員のおすすめ本 102）
6：p376
- 小曾川真貴：マンガの原理（図書館員のおすすめ本 100） 4：p228
- 権野 勝彦：開講！木彫り熊概論 歴史と文化を旅する（図書館員のおすすめ本 106） 10：p651
- 佐々木 愛：起立性調節障害お悩み解消BOOK 「朝起きられない」子に親ができること！（図書館員のおすすめ本 101） 5：p290
- 島田佳代子：学校に行かなかった僕が、あのころの自分に今なら言えること（図書館員のおすすめ本 107）
11：p705
- 城内 涼：大阪ことばの謎（図書館員のおすすめ本 107） 11：p705
- 鈴木 聖美：東京ホテル図鑑 実測水彩スケッチ集（図書館員のおすすめ本 106） 10：p651
- 関矢麻由美：時が止まった部屋 遺品整理人がミニチュアで伝える孤独死のはなし（図書館員のおすすめ本 108） 12：p758
- 高瀬 稜：掬われる声、語られる芸 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』（図書館員のおすすめ本 98） 2：p104
- 高橋 将人：訂正可能性の哲学（図書館員のおすすめ本 105） 9：p594
- 谷口 露華：旅の効用 人はなぜ移動するのか（図書館員のおすすめ本 103） 7：p443
- 土井 教子：ジェンダード・イノベーションの可能性（図書館員のおすすめ本 105） 9：p594
- 中澤 晴香：アンパンマンと日本人（図書館員のおすすめ本 106） 10：p650
- 西川 美羽：サブカルチャーのこころ オタクなカウンセラーがまじめに語ってみた（図書館員のおすすめ本 108） 12：p758
- 西澤 知紗：わたしは「セロ弾きのゴーシュ」 中村哲が本当に伝えたかったこと（図書館員のおすすめ本 104）
8：p493
- 西村ミドリ：「ふつう」の私たちが、誰かの人権を奪うとき 声なき声に耳を傾ける30の物語（図書館員のおすすめ本 104） 8：p492
- 肥後 衣里：きょう、ゴリラをうえたよ 愉快で深いこどもの

- いいまちがい集 (図書館員のおすすめ本 101)
5 : p291
- 平井 真理: ヤンキーと地元 解体屋, 風俗経営者, ヤミ業者
になった沖縄の若者たち (図書館員のおすすめ本
104) 8 : p492
- 平沢 剛志: 「頭がいい」とはどういうことか 脳科学から考え
る (図書館員のおすすめ本 106) 10 : p650
- 深谷 恵理: 「ハラスメント」の解剖図鑑 (図書館員のおすす
め本 102) 6 : p377
- 星野 盾: 「風の谷」という希望 残すに値する未来をつくる
(図書館員のおすすめ本 107) 11 : p704
- 堀之内あずさ: イタリア女子が沼ったジワる日本語 (図書館員
のおすすめ本 98) 2 : p104
- 前澤 慎也: 数学嫌いな人のための数学 新装版 (図書館員
のおすすめ本 97) 1 : p47
- 松浦亜希子: やまなみ (図書館員のおすすめ本 99)
3 : p156
- 松本 和代: ポーズの美術解剖学 人体表現の幅が広がる (図
書館員のおすすめ本 97) 1 : p46
- 水嶋 直子: 快眠法の前に今さら聞けない睡眠の超基本 ビ
ジュアル版 (図書館員のおすすめ本 101)
5 : p291
- 宮井 一帆: アンビバレント・ヒップホップ (図書館員のおす
すめ本 105) 9 : p595
- 山中 沙紀: 「好き」を言語化する技術 推しの素晴らしさを語
りたいのに「やばい!」しかでてこない (図書館
員のおすすめ本 105) 9 : p595
- 山成亜樹子: 図書館を建てる, 図書館で暮らす 本のための家
づくり (図書館員のおすすめ本 104) 8 : p493
- 吉村 きみ: 天気よみとく名画 フェルメールのち浮世絵,
ときどきマンガ (図書館員のおすすめ本 97)
1 : p46
- 米田由紀子: 現代「ますように」考 こわくてかわいい日本の
民間信仰 (図書館員のおすすめ本 107)
11 : p704
- 若園 義彦: コモンの「自治」論 (図書館員のおすすめ本
99) 3 : p157
- 脇田 妙子: 社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治
す方法 (図書館員のおすすめ本 100) 4 : p229
- 渡邊 桂子: 女性たちの声は、ヒットチャートの外に 音楽と
生きる女性30名の“今”と“姿勢”を探るインタ
ビュー集 (図書館員のおすすめ本 99)
3 : p156
- 書評一図書館員の本棚**
- 石川ゆたか: 戦争と図書館 戦時下検閲と図書館の対応 <図
書館員の本棚> 2 : p108
- 嶋田 学: 未来の図書館 調査する住民の求める情報環境の
整備 <図書館員の本棚> 4 : p230
- 菅野 梨夏: 図書館にゲームを! 図書館の新しい可能性
<図書館員の本棚> 11 : p707
- 高橋 和加: 学校図書館を活用した楽しい読書ワーク 読書活
動・探究学習を支援する <図書館員の本棚>
12 : p760
- 田村 俊作: これからの図書館情報学 人工知能と共生する図
書館 <図書館員の本棚> 12 : p761
- 豊田 恭子: 専門図書館におけるキャリア形成と人材育成
<図書館員の本棚> 5 : p276
- 中島 美奈: ラトヴィアの図書館 光を放つ文化拠点 <図書
館員の本棚> 2 : p109
- 仲村 拓真: 2050年の図書館を探る 何が変わり・変わらない
のか <図書館員の本棚> 8 : p489
- 深谷 恵理: Live! 図書館員のおすすめ本 人はなぜ本を紹介
するのか リマスター版 <図書館員の本棚>
4 : p231
- 舟越 瑞枝: 図書館と居場所 <図書館員の本棚> 11 : p706
- 柚木 聖: 患者のための図書館学 医療・健康情報リテラ
シーを鍛える <図書館員の本棚> 1 : p51
- 吉井 伶奈: 北欧の美しい図書館 <図書館員の本棚>
1 : p52
- 渡邊葉瑠加: 絵で見る日本の図書館の歴史 <図書館員の本
棚> 7 : p444
- 白鷹町立図書館**
- 中川 栄子: 「しらかか本の森」から「宇宙 (未来)」に向かっ
て 小規模図書館のよさを活かして (小規模図書
館奮戦記 320 山形県・白鷹町立図書館)
9 : p591
- 市立留萌図書館**
- 伊端 隆康: 書店支援で市民と図書館が連携 (特集: トピック
スで追う図書館とその周辺) 1 : p32-33
- 資料貸出**
- 高橋 冬子: 足立区立中央図書館の未返却図書資料対策プラン
について (特集: トピックスで追う図書館とその
周辺) 1 : p27-29
- 新宿区立大久保図書館**
- 米田 雅朗: 大久保図書館の多文化サービスについて 人と人
とがつながりあえる図書館をめざして (特集: 多
文化共生に資する図書館) 3 : p136-137
- 新富町図書館**
- 赤木 美穂: 図書館のささやかな行動が届けるSDGs また来
たいと思われる居心地の良さを目指して (図書館
で実践! SDGs 7 宮崎県・新富町図書館)
7 : p437-439
- 杉並区立図書館**
- 荻野 友美: 杉並区立図書館「阿佐ヶ谷文士村資料」(ウチの
図書館お宝紹介! 248 杉並区立中央図書館・阿
佐谷図書館) 6 : p374-375
- 杉並区立宮前図書館**
- 小野貴士, 野村美里: 公共図書館での10代の居場所づくり 杉
並区立宮前図書館の取り組み (特集: 孤独に寄り
添う図書館) 10 : p630-631
- 摂南大学図書館**
- 好川 園恵: 「日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映
画」目録 特色あるコレクション (ウチの図書
館お宝紹介! 250 摂南大学図書館)
8 : p490-491
- 瀬戸内市立図書館**

- 水田 清志：もみわ広場でつながる喜び 市民提案の協働事業に参加した7年間（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p196-197
- 全国図書館大会**
- 天野奈緒也：社会教育機関としての公共図書館の可能性 学び合い、共に楽しむ場を目指して（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第1分科会 公共図書館） 9：p568
- 池田 浩：図書館がつなぐ 人・まち・ミライ 21世紀の出島（長崎）から（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全体会） 2：p68-70
- 井手下由紀：社会の変化と公共図書館のミライ（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第1分科会 公共図書館） 2：p71
- 浦 友希乃：図書館大会に参加して（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して） 2：p87
- 大谷 康晴：2030年代の図書館員養成教育を考える（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第5分科会 図書館情報学教育） 2：p75
- 大場 博幸：図書館と小売書店の協力（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第11分科会 出版流通） 2：p81
- 尾形 陽子：「私たちの図書館宣言」から考える図書館の課題（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第15分科会 市民と図書館） 2：p85
- 岡部 幸祐：障壁のないインクルーシブな読書環境の整備に向けて（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第8分科会 インクルーシブな図書館） 9：p575
- 小原亜実子：読書バリアフリー アクセシブルな書籍の「借りる権利」と「買う自由」を目指して（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第9分科会 障害者サービス） 2：p79
- ：四国から 読書バリアフリーを進めるために（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第9分科会 障害者サービス） 9：p576
- 小野 智仁：持続可能な資料保存（環境管理）（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第10分科会 資料保存） 9：p577
- 片岡 裕斗：学生の視点から考える大学図書館のこれから（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して） 2：p87
- 川島 宏：災害と図書館 能登半島地震の経験を今後の対策につなげる（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第13分科会 災害と図書館） 2：p83
- 川端 恵美：読書の力で育む子どもの未来 読書活動支援の工夫と実践（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第3分科会 児童・青少年の読書活動支援） 9：p570
- 久保田崇子：愛媛から市民と共に未病・健康・医療を考える 健康・医療情報提供とヘルスリテラシー（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第7分科会 専門図書館・健康情報） 9：p574
- 小池 信彦：図書館活動と著作権制度の動向（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第6分科会 著作権） 2：p76
- 島田 貴司：大学・短大・高専図書館分科会に参加して（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して） 2：p86
- 清家 芳郎：研究支援と図書館（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第2分科会 大学・短大・高専図書館） 9：p569
- 末次健太郎：災害への備えと対応（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第5分科会 災害と図書館） 9：p572
- 杉本重雄、植村八潮：図書館とデジタル化 OPACから生成AI、そして次にくるもの（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第4分科会 図書館とデジタル化） 9：p571
- 高橋樹一郎：一人ひとり、みんなのために 求められる養成と研修の充実（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第4分科会 児童サービス） 2：p74
- 中島 寛、汐碓美穂：主体的で探究的な学びを支える開かれた学校図書館の創造（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第3分科会 学校図書館） 2：p73
- 成瀬 雅人：地域をつなぐ、地域とつながる図書館と書店 出版社・書店の現状を認識し、読書文化を守るため、図書館に何ができるかを本気で議論する（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第6分科会 出版社・書店・図書館） 9：p573
- 西川 啓子：学校図書館で働く非正規雇用職員（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第14分科会 非正規雇用職員） 2：p84
- 野末俊比古：情報リテラシー教育をめぐる海外の動向 日本型の枠組みづくりに向けて（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 第8分科会 図書館利用教育） 2：p78
- 前田 小藻：図書館がつなぐ（令和6年度（第110回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して） 2：p88
- 松井祐次郎：非正規雇用とキャリア形成（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 第12分科会 非正規雇用職員） 9：p579
- 松岡 徹：令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待（令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会への招待 全体会） 9：p567
- 舛田江里佳：全国図書館大会に参加して 連携からつながる図書館サービスの未来を考えて（令和6年度（第109回）全国図書館大会長崎大会ハイライト 全国図書館大会に参加して） 2：p86

- 宮原みゆき：その修理，大丈夫？ 修理の基本をおさえよう
(令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会
ハイライト 第10分科会 資料保存) 2：p80
- 村上 健治：多文化サービス最前線 (令和6年度(第110回)
全国図書館大会長崎大会ハイライト 第12分科会
多文化サービス) 2：p82
- 柳生 紀子：学生のための大学図書館へ！ なんでも話そう
チャンボン・ワークショップ (令和6年度(第
110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト 第2
分科会 大学・短大・高専図書館) 2：p72
- 山口真也，鈴木崇文：「図書館の自由に関する宣言」採択70周年
(令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会
ハイライト 第7分科会 図書館の自由)
2：p77
- ：図書館の自由・この一年 (令和7年度(第111回)
全国図書館大会愛媛大会への招待 第11分科会
図書館の自由) 9：p578
- 戦争—島根県—書誌**
- 大野 浩：「島根の戦争・銃後体験記録データベース構築講
座」について (特集：戦後80年と図書館)
8：p473-475
- ＜た・ち・て・と＞
- 大学図書館**
- 稲井達也，古川真理：高校の探究学習を促す大学図書館の理論
的な枠組と支援の実際 (特集：高大連携における
大学図書館の可能性) 11：p677-679
- 梅澤 貴典：高大接続において大学図書館職員に求められる役
割とスキル 探究学習をアカデミック・スキルに
発展させる情報リテラシー教育 (特集：高大連携
における大学図書館の可能性) 11：p674-676
- 小野 永貴：高大連携における大学図書館の教育的価値 高校
生の研究支援に向けた課題と展望 (特集：高大連
携における大学図書館の可能性) 11：p670-673
- 加藤 志保：筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携 探究
学習をサポートする大学図書館と，探究学習を協
働・実践する大学 (特集：高大連携における大学
図書館の可能性) 11：p680-682
- 窪田 藍：専修大学図書館における高校生を対象とした司書
インターンシップの取り組み (特集：高大連携に
おける大学図書館の可能性) 11：p686-688
- 日本図書館協会大学図書館部会大学図書館シンポジウム担当：
2024年度大学図書館シンポジウム「2030「デジタ
ル・ライブラリー」の実現に向けた取り組み」開
催報告 4：p212-215
- 大学図書館—紹介**
- ＜北海道＞北海道大学大学院水産科学研究院・大学院水産科学
院・水産学部図書室 6：p343
- ＜東京＞青山学院大学図書館本館 7：p410
- ＜高知＞高知健康科学大学附属図書館 10：p618
- 大東文化大学図書館**
- 大東文化大学60周年記念図書館：「中村屋のポース」との深い縁
『ラース・ビハーリー・ポース関連資料』目録
11：p670-674
- (ウチの図書館お宝紹介！ 253 大東文化大学60
周年記念図書館) 11：p702-703
- 田原市図書館**
- 小澤美穂子：『田原のむかし話を伝える』紙芝居とデジタル
データによる渥美線電車機銃掃射の前日物語 (特
集：市民提案による図書館との協働)
4：p204-205
- 多文化サービス**
- 阿部 治子：むすびめの会 (図書館と多様な文化・言語的背景
をもつ人々をむすぶ会) 多様性があり公正で包摂
的な共生社会の実現をめざす人的ネットワーク
(特集：多文化共生に資する図書館)
3：p130-133
- 伊藤 孝良：iPad アプリによる絵本づくり 持続可能な共生社
会を目指して「SDGs 質の高い教育をみんなに」
(図書館で実践！SDGs 3 ビックの会とよはし)
3：p158-160
- 新川 裕美：愛知県図書館の多文化サービス (特集：多文化共
生に資する図書館) 3：p134-135
- 野口 武悟：多文化共生に資する学校図書館の施策と実践 (特
集：多文化共生に資する図書館) 3：p144-145
- 浜口美由紀：図書館の多文化サービスと向き合って 多文化
サービス委員会の活動 (特集：多文化共生に資す
る図書館) 3：p126-129
- 平田 泰子：IFLA 多文化社会図書館サービス分科会と日本の
多文化サービス (特集：多文化共生に資する図書
館) 3：p141-143
- 富士明日香：埼玉県立図書館の多文化サービス普及に向けた取
り組み (特集：多文化共生に資する図書館)
3：p138-140
- 米田 雅朗：大久保図書館の多文化サービスについて 人と人
とがつながりあえる図書館をめざして (特集：多
文化共生に資する図書館) 3：p136-137
- 多摩市立中央図書館**
- 米山 薫：無印良品と多摩市立中央図書館によるSDGs関連
イベントの取り組みについて (図書館で実践！
SDGs 5 多摩市立中央図書館) 5：p284-286
- 探究学習**
- 浅見 和寿：学校図書館ではじめる探究活動 学校図書館司書
をパートナーに (特集：アラカルト 学校図書館
のこれからを考える) 12：p732-733
- 稲井達也，古川真理：高校の探究学習を促す大学図書館の理論
的な枠組と支援の実際 (特集：高大連携における
大学図書館の可能性) 11：p677-679
- 梅澤 貴典：高大接続において大学図書館職員に求められる役
割とスキル 探究学習をアカデミック・スキルに
発展させる情報リテラシー教育 (特集：高大連携
における大学図書館の可能性) 11：p674-676
- 小野 永貴：高大連携における大学図書館の教育的価値 高校
生の研究支援に向けた課題と展望 (特集：高大
連携における大学図書館の可能性)
- 加藤 志保：筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携 探究

学習をサポートする大学図書館と、探究学習を協働・実践する大学（特集：高大連携における大学図書館の可能性） 11：p680-682

山崎 勇気：学びの転換期に図書館はどう立ち会うか 中学生が「卒業論文」を書く探究学習の現場から（特集：高大連携における大学図書館の可能性）

11：p683-685

地域活動

寺義由香利：高齢者施設への読書支援 市民の「読みたい」を叶えるために（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p202-203

地域社会

青木 知子：自分が欲しかった時間を いま必要な人へ（特集：市民提案による図書館との協働）

4：p206-207

青木みどり：しょうないREK 18年の軌跡 地域と共に歩んだ道のり（特集：市民提案による図書館との協働）

4：p198-199

櫻井 理恵：本を通して地域を知る 図書館との協働事業から見る地域存続への新しい側面（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p208-210

新川 達郎：市民提案型の協働事業制度の現状と課題 図書館や社会教育施設における展開のために（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p192-195

八段 一恵：市民提案型まちづくり支援事業「市民のための図書館を、市民が考える講座」守山市立図書館友の会の取り組みを通して（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p200-201

水田 清志：もみわ広場でつながる喜び 市民提案の協働事業に参加した7年間（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p196-197

茅ヶ崎市立図書館

小原安須実、松本賢一：図書館で学ぶ「気候変動とSDGs」 気候非常事態宣言を表明 気候変動対策に市民・事業者の皆さまと一丸となって取り組むために（図書館で実践！SDGs 2 茅ヶ崎市立図書館）

2：p93-95

千葉市図書館情報ネットワーク協議会

吉野 知義：千葉市図書館情報ネットワーク協議会のご紹介 館種を超えた地域の図書館ネットワーク（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p34-35

帝国図書館—歴史

長尾 宗典：戦時下の帝国図書館（特集：戦後80年と図書館） 8：p476-478

展示

小原安須実、松本賢一：図書館で学ぶ「気候変動とSDGs」 気候非常事態宣言を表明 気候変動対策に市民・事業者の皆さまと一丸となって取り組むために（図書館で実践！SDGs 2 茅ヶ崎市立図書館）

2：p93-95

道上久恵、植月琢也：強みを活かして協働する 図書館とSDGs担当課との連携事例（図書館で実践！SDGs 1 藤沢市湘南大庭市民図書館） 1：p41-43

電子書籍

文部科学省：令和6年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究（電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）（霞が関だより 260）

7：p428-430

電子図書館

日本図書館協会大学図書館部会大学図書館シンポジウム担当：2024年度大学図書館シンポジウム「デジタル・ライブラリー」の実現に向けた取り組み」開催報告 4：p212-215

ドイツ日本研究所図書館

長嶺 陽子：俘虜収容所の記録が伝える日独交流 板東コレクション（ウチの図書館お宝紹介！ 246 ドイツ日本研究所図書館） 4：p226-227

東京音楽大学付属図書館

中田麻衣子：フランス近代シャンソンの歴史を探るコレクション《相良匡俊氏寄贈シャンソン関連資料》（ウチの図書館お宝紹介！ 249 東京音楽大学付属図書館） 7：p440-441

東京学芸大学

文部科学省：令和6年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について（霞が関だより 261） 8：p482-484
：東京学芸大学「学校図書館運営専門委員会」の取り組み 令和6年度の実践から見える学校図書館活用の実践について（霞が関だより 261） 8：p482-484

東京大学附属図書館

近藤真智子：1000万冊のストーリー 東京大学附属図書館における蔵書1000万冊達成を記念した広報事業について（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p24-26

東庄町図書館

仁科沙也佳：幅広い世代の図書館へそして、子どもたちの読書活動推進のために（小規模図書館奮戦記 318 千葉県・東庄町図書館） 6：p367

読書

浅見 和寿：学校図書館ではじめる探究活動 学校図書館司書をパートナーに（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p732-733

有山裕美子：第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読む 自治体における計画策定の意義と学校図書館との連携（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館） 7：p416-419

岩井 路加：ヤングアダルトにこよりの「読書体験」と「居場所」 日本子どもの本研究会「ヤングアダルト&アート・ブックス研究部会」8月ハイブリッド拡大定例会から考える（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p727-729

押木 和子：朝の読書のこれから 形骸化からの脱出（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える）

12：p724-726

島 弘：子ども読書活動推進計画と児童サービスを考える（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館）

- 7 : p412-415
高橋恵美子：各種調査から見る学校司書の実態（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える）
12 : p738-741
- 文部科学省：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について（霞が関だより 254）
1 : p37
：飯館村立までの里のこども園の取り組み（絵本で生まれる豊かな世界）（霞が関だより 254）
1 : p37-39
：4月23日は「子ども読書の日」（霞が関だより 256）
3 : p152
：子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）表彰を開催しました。（霞が関だより 258）
5 : p272-275
：令和6年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究（電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）（霞が関だより 260）
7 : p428-430
- 読書一伊勢市**
宮澤 優子：子ども読書活動推進計画の策定への専門職のかかわり 実効性と確実な効果につながる計画に向けて（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館）
7 : p424-425
- 読書会**
新藤 透：戦時体制下の図書館 読書会、読書指導といった「読書環境をめぐる図書館の状況」を中心に（特集：戦後80年と図書館）
8 : p462-465
- 読書一刈羽村**
田中 貴裕：「第三次刈羽村子ども読書活動推進計画」の策定経過と特徴 「生きる力と豊かな感性 読書で育むかりわっ子」の育成に向けて（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館）
7 : p426-427
- 読書一滋賀県**
矢田純子、大藤麻千子：第5次滋賀県子ども読書活動推進計画 県内すべての子どもが、より豊かな人生を送るために（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館）
7 : p420-421
- 読書指導**
新藤 透：戦時体制下の図書館 読書会、読書指導といった「読書環境をめぐる図書館の状況」を中心に（特集：戦後80年と図書館）
8 : p462-465
- 読書一多可町（兵庫県）**
文部科学省：令和6年度「読書活動推進事業」の取組事例について（霞が関だより 263）
10 : p634
：地域における読書活動推進事業兵庫県の取組（霞が関だより 263）
10 : p634-637
- 読書バリアフリー法**
文部科学省：視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画（第二期）の策定について（霞が関だより 259）
6 : p364
：令和6年度 地方公共団体における視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する計画の策定状況
調査の結果について（霞が関だより 259）
6 : p365-366
- 読書一兵庫県**
文部科学省：令和6年度「読書活動推進事業」の取組事例について（霞が関だより 263）
10 : p634
：地域における読書活動推進事業 兵庫県の取組（霞が関だより 263）
10 : p634-637
- 読書一横浜市**
今川 万理：第三次横浜市民読書活動推進計画の策定について（特集：子どもの読書活動推進計画と図書館）
7 : p422-423
- 豊島区立図書館**
石川 典子：誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスを目指して 豊島区立図書館の「りんごのたな」の取り組み（図書館で実践！SDGs 11 豊島区立図書館）
11 : p697-699
- 図書館**
ツィマ アンナ：図書館の発見について <新春エッセー>
1 : p12-13
新保 史生：個人情報保護法の変遷と図書館 令和2年及び3年改正を踏まえて（特集：トピックスで追う図書館とその周辺）
1 : p14-17
堀 純子：図書館は、孤独・孤立に対する取り組みができるのか（特集：孤独に寄り添う図書館）
10 : p632-633
- 図書館（公共）**
青山 鉄兵：公民館図書室の現代的意義 「本棚の手前」から広がる可能性（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち）
6 : p346-349
大石 正人：全国公共図書館研究集会（サービス部門／総合・経営部門）兼第52回高知県図書館大会に参加して <北から南から>
2 : p106-107
嶋田 学：図書館の可能性を引き出すマネジメント 一般行政職からみた館長職とは（特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み）
5 : p252-255
徳安 由希：行政支援サービスの軌跡（特集：トピックスで追う図書館とその周辺）
1 : p30-31
日本図書館協会図書館政策企画委員会：「公立図書館の任務と目標」の「図書館システム整備のための数値基準」2023年改訂
5 : p292-294
：図書館政策セミナー「公立図書館の任務と目標—その成立過程と歩み、活用のされ方、今後の維持・改訂のあり方」報告
9 : p583-585
- 図書館（公共）—アメリカ合衆国**
八田 裕子：ホーナー日本交流基金による研修報告
4 : p217-219
- 図書館（公共）—イギリス**
土屋 深優：英国における孤独問題と公共図書館の貢献（特集：孤独に寄り添う図書館）
10 : p628-629
- 図書館（公共）—大網白里市**
佐久間直美：地域に根付いた「読書の場」として 小規模図書室をフルに活かす大網白里（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち）
6 : p350-351

図書館 (公共) 一 女川町

佐藤 克己：東日本大震災を乗り越えて 女川つながる図書館の今 (特集：公民館等図書室のさまざまなかたち) 6：p352-353

図書館 (公共) 国立市

辻口 朋香：国立市における公民館図書室独自の役割 本を通して人のつながりをつくる (特集：公民館等図書室のさまざまなかたち) 6：p360-361

図書館 (公共) 一 紹介

<岩手> 盛岡市立図書館 2：p67
 <秋田> 横手市立横手図書館 4：p191
 <山形> 庄内町立図書館分館 2：p67
 <山形> 庄内町立図書館 4：p191
 <茨城> 桜川市立図書館 10：p618
 <栃木> 小山市立中央図書館大谷分館 7：p410
 <栃木> 真岡市立図書館 9：p566
 <群馬> 太田市立新田図書館 10：p618
 <東京> 福生市立中央図書館 1：p11
 <東京> 中央区立晴海図書館 4：p191
 <東京> 江東区立有明こども図書館 7：p410
 <新潟> 小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。 6：p343

<石川> 輪島市立図書館 6：p343
 <福井> 福井市立図書館 2：p67
 <岐阜> 可児市立カニミライブ図書館 1：p11
 <滋賀> 守山市立北部図書館“本の湖” 2：p67
 <京都> 綾部市図書館 1：p11
 <京都> 福知山市立図書館三和分館 1：p11
 <大阪> 茨木市立おにクルぶっくばーく 1：p11
 <大阪> 大阪市立港図書館 1：p11
 <大阪> 枚方市立市駅前図書館 6：p343
 <岡山> 美咲町立中央図書館 4：p191
 <山口> 下関市立はまゆう図書館 9：p566
 <高知> 佐川町立図書館さくと 6：p343
 <福岡> 那珂川市図書館 4：p191
 <熊本> こども本の森 熊本 2：p67
 <大分> 中津市立耶馬溪図書館 7：p410
 <鹿児島> 南さつま市立坊津図書館 6：p343
 <鹿児島> 姶良市立加治木図書館 9：p566

図書館 (公共) 一 日本

日本図書館協会図書館調査事業委員会：都道府県図書館の統計『日本の図書館』2025年調査票より (数字で見る日本の図書館 87) 8：p494-496

図書館 (公共) 一 ヨーロッパ (北部)

吉田 右子：ただそこにあること 北欧公共図書館の孤独問題への取り組み (特集：孤独に寄り添う図書館) 10：p622-625

図書館 一 伊勢市

宮澤 優子：子ども読書活動推進計画の策定への専門職のかかわり 実効性と確実な効果につながる計画に向けて (特集：子どもの読書活動推進計画と図書館) 7：p424-425

図書館員

梅澤 貴典：高大接続において大学図書館職員に求められる役割とスキル 探究学習をアカデミック・スキルに発展させる情報リテラシー教育 (特集：高大連携における大学図書館の可能性) 11：p674-676

田中 敦司：『図書館雑誌』5月号特集について <北から南から> 9：p592

日本図書館協会認定司書事業委員会：第16期「認定司書」申請 (更新申請を含む) を受け付けます 10：p638-641

日本図書館協会認定司書事業委員会、日本図書館協会認定司書審査会：第15期 (2025年度) 日本図書館協会認定司書名簿及び審査 (報告) 5：p277-279

図書館員 一 韓国

日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会、永見弘美文責：非正規雇用職員セミナー「韓国の図書館職員制度と非正規雇用改革」報告 3：p148-149

図書館員のための英会話ハンドブック 国内編

横盛可那子：『図書館員のための英会話ハンドブック 国内編』改訂の裏側 3：p146-147

図書館行政

文部科学省：文部科学省における図書館・読書活動推進関連予算案 (霞が関だより 255) 2：p89-92

図書館協力

吉野 知義：千葉市図書館情報ネットワーク協議会のご紹介 館種を超えた地域の図書館ネットワーク (特集：トピックスで追う図書館とその周辺) 1：p34-35

図書館経営

志賀アキラ：原点を問い続ける 今日どこにいて、どこからきて、これからどこへ向かうのか (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p269-271

嶋田 学：図書館の可能性を引き出すマネジメント 一般行政職からみた館長職とは (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p252-255

下吹越かおる：「小さなまちの奇跡の図書館」館長論 NPO 法人本と人をつなぐ「そらまめの会」の18年の軌跡 (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p263-265

新川 達郎：市民提案型の協働事業制度の現状と課題 図書館や社会教育施設における展開のために (特集：市民提案による図書館との協働) 4：p192-195

藤坂 康司：指定管理館の館長になって (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p266-268

森 いづみ：わたしたちはどこへ向かうのか 大学から県立長野図書館に飛び込んで実践したこと (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p259-262

山本 章弘：「行政職で培った経験・感覚」は強い武器になる 行政職の図書館長として (特集：「そと」からの図書館長による新たな取り組み) 5：p256-258

図書館建築

佐藤千春 [ほか]：埼玉県立不動岡高等学校、東京都立花畑学園 (学校図書館建築見学報告 2) 1：p48-50

：神奈川県立平塚農商高等学校、豊島区立栗鴨北中

- 学校, 愛知県大口町立大口南小学校 (学校図書館
建築見学報告 3) 2: p100-103
- 溝口南 [ほか]: 「対話」から始まる学校図書館づくり 茅野市
立永明小学校・中学校メディアセンター (特集:
アラカルト 学校図書館のこれからのを考える)
12: p734-737
- 日本図書館協会建築賞審査選考委員会, 松尾和生文責: 第41回
日本図書館協会建築賞 8: p479-481
- 図書館雑誌<編集手帳>**
- 青柳 英治: 編集手帳 6: p400
- 岩永 知子: 編集手帳 10: p660
- 宇野 亮一: 編集手帳 4: p240
- 中村 保彦: 編集手帳 11: p712
- 長谷川優子: 編集手帳 7: p452
- : 編集手帳 12: p774
- 松本 哲郎: 編集手帳 3: p180
- 松本哲郎 [ほか]: 編集手帳 1: p56
- 宮原柔太郎: 編集手帳 5: p332
- : 編集手帳 8: p556
- 米山 薫: 編集手帳 9: p608
- 鷺山 香織: 編集手帳 2: p116
- 図書館資料**
- 荻野 友美: 杉並区立図書館「阿佐ヶ谷文士村資料」(ウチの
図書館お宝紹介! 248 杉並区立中央図書館・阿
佐ヶ谷図書館) 6: p374-375
- 柴田 朋彦: 平櫛田中文庫 好奇心あふれる彫刻家の本棚 (ウ
チの図書館お宝紹介! 254 小平市中央図書館)
12: p756-757
- 大東文化大学60周年記念図書館: 「中村屋のボース」との深い縁
『ラース・ビハーリー・ボース関連資料』目録
(ウチの図書館お宝紹介! 253 大東文化大学60
周年記念図書館) 11: p702-703
- 瀧瀬 香: 労働の歴史を次の時代へ (ウチの図書館お宝紹
介! 252 独立行政法人労働政策研究・研修機構
労働図書館) 10: p648-649
- 中田麻衣子: フランス近代シャンソンの歴史を探るコレクショ
ン《相良臣俊氏寄贈シャンソン関連資料》(ウチ
の図書館お宝紹介! 249 東京音楽大学付属図書
館) 7: p440-441
- 宮丸由美子: 「引き札」の紹介 (ウチの図書館お宝紹介! 247
九州産業大学図書館) 5: p282-283
- 好川 園恵: 「日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映
画」目録 特色あるコレクション (ウチの図書
館お宝紹介! 250 摂南大学図書館)
8: p490-491
- 図書館—日本—歴史**
- 新藤 透: 戦時体制下の図書館 読書会, 読書指導といった
「読書環境をめぐる図書館の状況」を中心に (特
集: 戦後80年と図書館) 8: p462-465
- 図書館の自由**
- 天谷 真彦: レファレンスと人権保護 <こらむ図書館の自
由> 12: p719
- 伊沢ユキエ: 9月世界アルツハイマー月間に思ったこと <こ
らむ図書館の自由> 11: p667
- 井上 靖代: 選挙と図書館と読む自由 <こらむ図書館の自
由> 1: p7
- : アメリカの図書館は, いま。 <こらむ図書館の自
由> 5: p247
- : 戦う米国の学校図書館員 禁書問題と学校図書館
員の動向 (特集: アラカルト 学校図書館のこれ
からのを考える) 12: p721-723
- 奥野 吉宏: 図書館における匿名加工情報の提供と利用者の秘
密を守ること <こらむ図書館の自由>
8: p459
- 藏所 和輝: 昨今の米国の状況をどう受け止めるべきか <こ
らむ図書館の自由> 7: p407
- 鈴木 崇文: 著作権侵害を理由として資料の利用制限を求めら
れた場合 <こらむ図書館の自由> 2: p63
- 高柳有理子: 地域を巡回する移動販売車への資料返却 <こら
む図書館の自由> 6: p339
- 平形ひろみ: 歴史記録を今に, 未来へつなく <こらむ図書館
の自由> 9: p563
- 松井 正英: 児童生徒に関する情報の共有について考える
<こらむ図書館の自由> 3: p123
- 村上 孝弘: 戦時下の大学図書館 「阿佐ヶ谷文士村資料」のこと
など <こらむ図書館の自由> 10: p615
- 山口 真也: 自由宣言ポスターをめぐる2つのエピソード
<こらむ図書館の自由> 4: p187
- 図書館奉仕**
- 大石 正人: 全国公共図書館研究集会 (サービス部門/総合・
経営部門) 兼第52回高知県図書館大会に参加して
<北から南から> 2: p106-107
- 図書館—奈良県—歴史**
- 佐藤 明俊: 奈良県立図書館の「誕生」と戦争 戦捷記念図書
館と榎原文庫 (特集: 戦後80年と図書館)
8: p470-472
- 獨協大学図書館**
- 山本 淳: ドイツとフランスのモダニズムを映す貴重書群
<ドイツ表現主義文庫>と<鈴木信太郎文庫>
(ウチの図書館お宝紹介! 244 獨協大学図書館)
2: p96-97
- 豊中市立図書館**
- 青木みどり: しょうないREK 18年の軌跡 地域と共に歩んだ
道のり (特集: 市民提案による図書館との協働)
4: p198-199
- <な・に・ね>
- 名古屋志段味図書館**
- 藤坂 康司: 指定管理館の館長になって (特集: 「そと」から
の図書館長による新たな取り組み) 5: p266-268
- 名古屋市守山図書館**
- 藤坂 康司: 指定管理館の館長になって (特集: 「そと」から
の図書館長による新たな取り組み) 5: p266-268
- 日本図書館協会**
- 日本図書館協会図書館災害対策委員会: 図書館災害対策委員会
災害支援活動会計報告 (2024年度) 9: p593

日本図書館協会認定司書事業委員会：第16期「認定司書」申請
(更新申請を含む)を受け付けます

10：p638-641

日本図書館協会認定司書事業委員会，日本図書館協会認定司書
審査会：第15期(2025年度)日本図書館協会認定
司書名簿及び審査(報告) 5：p277-279

日本図書館協会<委員会>

2025-2026年度委員会委員名簿 8：p527-530

日本図書館協会<総会>

2025年度部会総会議事録 8：p516-526

日本図書館協会<役員会>

常任理事会(11月) 2：p111-115

2024年度通算第3回(定時第3回)理事会議事録
3：p161-170

2024年度通算第3回(定時第3回)理事会配付資料
3：p171-172

常任理事会(1月) 3：p175-179

常任理事会(2月) 4：p234-239

2024年度通算第4回(定時第4回)理事会議事録
5：p295-302

2024年度通算第4回(定時第4回)理事会，2024年度通算第2
回(定時第2回)代議員総会配付資料
5：p303-331

2024年度通算第2回(定時第2回)代議員総会議事録
6：p380-390

2024年度通算第4回(定時第4回)理事会，2024年度通算第2
回(定時第2回)代議員総会配付資料一覧
6：p391

常任理事会(4月) 6：p395-399

常任理事会(5月) 7：p449-451

2025年度通算第1回(定時第1回)理事会議事録
8：p498-505

2025年度通算第1回(定時第1回)代議員総会議事録
8：p506-513

2025年度通算第2回(定時第2回)理事会議事録
8：p514-515

2025年度通算第1回(定時第1回)理事会・通算第1回(定時
第1回)代議員総会・通算第2回(定時第2回)

理事会配付資料 8：p531-555

常任理事会(7月) 9：p601-607

常任理事会(8月) 10：p656-659

日本図書館協会2025年度通算第3回(定時第3回)理事会議事
録 12：p762-771

日本図書館協会2025年度通算第3回(定時第3回)理事会配付
資料 12：p772

乳幼児サービス

北川史歩子：本がつながり日常の居場所 NPO法人ぐーぐーらい
ぶの取り組み(特集：孤独に寄り添う図書館)

10：p626-627

寝屋川市立図書館

山本 章弘：「行政職で培った経験・感覚」は強い武器になる
行政職の図書館長として(特集：「そと」からの
図書館長による新たな取り組み) 5：p256-258

<は・ひ・ふ・へ・ほ>

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター

福岡 純之：震災の経験と記憶を，資料を通じて伝える(小規
模図書館奮戦記 322 阪神・淡路大震災記念人と
防災未来センター資料室) 12：p749

PR

小原安須実，松本賢一：図書館で学ぶ「気候変動とSDGs」気
候非常事態宣言を表明 気候変動対策に市民・事
業者の皆さまと一丸となって取り組むために(図
書館で実践!SDGs 2 茅ヶ崎市立図書館)
2：p93-95

広島市立中央図書館

土井しのぶ：被爆から80年 原爆資料をつなぐ・届ける 広島
市立中央図書館(特集：戦後80年と図書館)
8：p466-467

藤沢市湘南大庭市民図書館

道上久恵，植月琢也：強みを活かして協働する 図書館と
SDGs担当課との連携事例(図書館で実践!SDGs
1 藤沢市湘南大庭市民図書館) 1：p41-43

平和教育

名富 綾乃：学校図書館での平和教育 子どもの未来をつなぐ
学校司書の役割を探る(特集：戦後80年と図書
館) 8：p468-469

法政大学図書館

小林ふみ子：法政大学図書館の正岡子規文庫(ウチの図書館お
宝紹介! 251 法政大学図書館) 9：p586-587

ボランティア活動

青木 知子：自分が欲しかった時間を いま必要な人へ(特
集：市民提案による図書館との協働)

4：p206-207

青木みどり：しょうないREK 18年の軌跡 地域と共に歩んだ
道のり(特集：市民提案による図書館との協働)

4：p198-199

小澤美穂子：『田原のむかし話を伝える』紙芝居とデジタル
データによる渥美線電車機銃掃射の前日物語(特
集：市民提案による図書館との協働)

4：p204-205

寺義由香利：高齢者施設への読書支援 市民の「読みたい」を
叶えるために(特集：市民提案による図書館との
協働)

4：p202-203

八段 一恵：市民提案型まちづくり支援事業「市民のための図
書館を，市民が考える講座」守山市立図書館友の
会の取り組みを通して(特集：市民提案による図
書館との協働)

4：p200-201

水田 清志：もみわ広場でつながる喜び 市民提案の協働事業
に参加した7年間(特集：市民提案による図書館
との協働)

4：p196-197

<ま・も>

米原市立図書館

寺義由香利：高齢者施設への読書支援 市民の「読みたい」を
叶えるために(特集：市民提案による図書館との
協働)

4：p202-203

真庭市立図書館

上杉 朋子：「持続可能なまちづくり」と図書館（図書館で実践！SDGs 4 真庭市立図書館） 4：p220-222

守山市立図書館

八段 一恵：市民提案型まちづくり支援事業「市民のための図書館を、市民が考える講座」守山市立図書館友の会の取り組みを通して（特集：市民提案による図書館との協働） 4：p200-201

<や>

山形大学附属図書館

石黒 志保：山形に残る琉球・沖縄史料 伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の紹介（ウチの図書館お宝紹介！ 245 山形大学附属図書館） 3：p154-155

ヤングアダルトサービス

岩井 路加：ヤングアダルトにとっての「読書体験」と「居場所」 日本子どもの本研究会「ヤングアダルト&アート・ブック研究部会」8月ハイブリッド拡大定例会から考える（特集：アラカルト 学校図書館のこれからを考える） 12：p727-729

小野貴士, 野村美里：公共図書館での10代の居場所づくり 杉並区立宮前図書館の取り組み（特集：孤独に寄り添う図書館） 10：p630-631

日本図書館協会児童青少年委員会, 鈴江夏文責：【報告】児童青少年委員会オンラインセミナー「若者は読書しないのか!? 中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること」 5：p287-289

<り・れ・ろ>

利府町図書館

今野 宏：構想から20年。待望の図書館が開館。公民館図書室～つなぎ図書館（利府町図書館）～「リフノス」利府町図書館（特集：公民館等図書室のさまざまなかたち） 6：p354-356

レファレンス ワーク

上田 茜：伊丹市立図書館本館「ことば蔵」のレファレンス 児童室のレファレンス（れふあれんす三題噺 317 伊丹市立図書館本館「ことば蔵」） 2：p98-99

春日志麻 [ほか]：「知と心がみたまされる図書館」を目指して 長野県安曇野市図書館（れふあれんす三題噺 323 安曇野市中央図書館） 10：p646-647

嶋崎尚代, 山田かおり：大学図書館のレファレンス 女性, 国際, 近代文学の事例から（れふあれんす三題噺 321 昭和女子大学図書館） 6：p372-373

清水 紀子：倉敷市立中央図書館のレファレンス事例（れふあれんす三題噺 322 倉敷市立中央図書館） 7：p434-435

長尾 典子：海と地球の専門図書館！ JAMSTEC 図書館のレファレンス事例について（れふあれんす三題噺 319 国立研究開発法人海洋研究開発機構図書館） 4：p224-225

平松智子, 滝澤佳代子：多彩な調査資源で司書の好奇心も刺激

するレファレンス（れふあれんす三題噺 320 公益財団法人矯正協会矯正図書館） 5：p280-281
福田千晶 [ほか]：多角的な視点による課題解決をめざして（れふあれんす三題噺 316 尼崎市立中央図書館） 1：p44-45

宮崎 志保：長野市立長野図書館のレファレンス事例（れふあれんす三題噺 318 長野市立長野図書館） 3：p150-151

望月 静香：南アルプス市立図書館のレファレンス事例（れふあれんす三題噺 324 南アルプス市立図書館） 11：p700-701

渡辺真希子：調査基盤としてのレファレンス・サービス 科学・医療分野のレファレンス・サービスに対する社会的ニーズ（特集：トピックスで追う図書館とその周辺） 1：p18-20

渡邊有理子：多様性を認め合う空間へ 東京学芸大学附属国際中等教育学校（れふあれんす三題噺 325 東京学芸大学附属国際中等教育学校総合メディアセンター） 12：p754-755

労働図書館

瀧瀬 香：労働の歴史を次の時代へ（ウチの図書館お宝紹介！ 252 独立行政法人労働政策研究・研修機構労働図書館） 10：p648-649

ニュース記事一覧

凡 例

- 収録範囲 2025年1月～12月号収録のニュース記事（新館紹介、新聞切抜帳、告知板の一部は含まない）。
- 以下の見出しの順に配列し、各項目の中は掲載順とした。
日本図書館協会、日本図書館協会－研修、全国図書館大会、国際図書館連盟、図書館行政、図書館一般、国立国会図書館、公共図書館、学校図書館、大学図書館、専門図書館、学会・研究会・団体、図書館員養成、著作権、出版、読書、人、本・ビデオ、阪神・淡路大震災、図書館の自由、災害
- 掲載順序 ①記事名 ②掲載月 ③ページ

日本図書館協会

- 「公共図書館、学校図書館で働く会計年度任用職員の継続雇用についてのお願い」の記者会見を開催 1：p5-6
日本図書館協会認定司書事業委員会委員を公募いたします 1：p8
日本図書館協会資料保存委員会「ネットワーク資料保存」No.137を掲載 2：p64
2024年度第2回代議員総会開催 4：p185
日本図書館協会大学図書館部会委員会委員（個人会員）候補者募集について 4：p187
日本図書館協会資料保存委員会「ネットワーク資料保存」No.138を発行 5：p248
委員を募集します（図書館政策企画委員会） 6：p341
第41回日本図書館協会建築賞を決定 7：p405
2025年度第1回代議員総会開催 7：p406
『公共図書館部会通信』No.21発行 7：p408
ウェブサイトをリニューアル 8：p457
「公立図書館児童サービス実態調査」ご協力のお願い 8：p459
『図書館雑誌』表紙絵の寄贈 9：p562
日本図書館協会目録委員会「目録の作成と提供に関する調査（2025）」を実施 9：p564
日本図書館協会資料保存委員会「ネットワーク資料保存」No.139を発行 9：p564
2025年度第1回部会長・委員長会議を開催 11：p665
日本図書館協会資料保存委員会「ネットワーク資料保存」No.140を掲載 11：p668
2026～2029年度代議員（個人会員選出及び団体会員選出）選挙 11：p668

日本図書館協会－研修

- 日本図書館協会研修事業 2024年度中堅職員ステップアップ研修(2)終了・修了者について 3：p122
資料保存展示パネルを貸出しています！ 3：p122-123
日本図書館協会研修事業 2024年度中堅職員ステップアップ研修(1)終了・修了者について 5：p245
図書館政策セミナー「公立図書館の任務と目標」の録画配信開始 7：p406
第45回（2025年）児童図書館員養成専門講座終了 11：p666

日本図書館協会研修事業 2025年度中堅職員ステップアップ研修(2)終了・修了者について 12：p717

全国図書館大会

- 第110回全国図書館大会長崎大会 「図書館がつなぐ 人・まち・ミライ～21世紀の出島（長崎）から～」開催 1：p5
「日本図書館協会会員の集いin長崎」終了 2：p61
第111回（2025年度）全国図書館大会を愛媛県で開催、参加申し込みを開始 6：p337
「トリプルワン・プロジェクト」募集中（第111回全国図書館大会愛媛大会） 6：p340-341
第111回全国図書館大会愛媛大会、参加申し込みを開始 8：p457
第111回全国図書館大会愛媛大会「図書館が 彩る未来 伊代路から」開催 12：p717
2026年度第112回全国図書館大会は石川県で開催 12：p717

国際図書館連盟

- ユネスコ、「学校図書館宣言 School Library Manifesto」改訂版を正式に採択 6：p337
国際図書館連盟（IFLA）分科会等の選挙結果が公表 6：p338
世界図書館情報会議（WLIC）：第89回国際図書館連盟（IFLA）年次大会終了 10：p613
IFLA 創立98周年、100周年記念へ向けてカウントダウン開始 11：p666

図書館行政

- 文部科学省及び厚生労働省、「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する基本的な計画（第二期）」を公表 5：p245
文部科学省「図書館・学校図書館と地域の連携協働による読書のまちづくり推進事業」採択先を決定 6：p337
文部科学省、令和6年度「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」の報告書を公開 7：p405
文部科学省、令和6年度社会教育統計（社会教育調査の結果）中間報告を公表 9：p561
文部科学省・厚生労働省・経済産業省連携による「特定書籍等の製作に係るデータ提供のあり方について」実証実験について 9：p561
文部科学省、2026年度概算要求資料を公開 10：p613
図書館地区別研修開催日程 10：p615-616
第7回「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」開催 11：p665

図書館一般

- 図書館記念日・図書館振興の月のポスター2025完成 4：p185
「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン2.0」を公開 5：p245
内閣府、官報を閲覧できる都道府県の図書館を公表 5：p246
Library of the Year 2025ライブラリアンシップ賞・優秀賞を発表 10：p614

国立国会図書館

- 国立国会図書館、遠隔複写サービスの複写物をPDFファイルで提供する「遠隔複写（PDFダウンロード）」を開始 4：p185
国立国会図書館、メールマガジン「調査及び立法考査局新刊お

知らせメール」(試行)開始	6:p337-338	2:p61
国立国会図書館, 令和7年度利用者サービスアンケートを実施	8:p457	「図書館等公衆送信サービス」特定図書館登録の受付開始
2026年度国立国会図書館予算概算要求額まとまる	10:p613-614	3:p121
公共図書館		「図書館等公衆送信サービスを行う特定図書館等の研修のためのページ」を公開
「『公立図書館の任務と目標』の『図書館システム整備のための数値基準』2023年改訂」について	3:p122	3:p121-122
全国公共図書館協会が「2024年度(令和6年度)公立図書館における電子図書館サービスに関する実態調査報告書」公開	6:p338	東京都立図書館, 「遠隔複写(PDF送信)サービス」を開始
速報 都道府県立図書館と政令指定都市の図書館の2025年度資料費予算額	8:p458	8:p457
宮城県図書館, 近隣にクマ出没で臨時休館	12:p718	出版
学校図書館		第30回「日本絵本賞」受賞作品決定
「学校図書館職員に関する実態調査(個人向け)」結果を公表	1:p6	6:p338-339
全国SLA, 校長・教職員向けに学校図書館活用についてのパンフレットを公表	5:p245-246	第58回造本装幀コンクール受賞作品を発表
全国SLA「学校図書館のメディア選定に関するガイドライン」を公開	5:p246	9:p562
「いつでも開いている学校図書館へ-学校司書の配置等に関する提言」を公表	11:p665	「BooksPRO」説明会動画を公開
第56回「博報賞」, 浜松市立蒲小学校図書館の実践事例が受賞	12:p717-718	10:p614-615
大学図書館		読書
近畿大学中央図書館, アバターによるレファレンスサービスを開始	11:p665-666	経済産業省「関係者から指摘された書店活性化のための課題(案)」のパブリックコメント結果を公表
専門図書館		3:p121
国立ハンセン病資料館が図書館等への資料貸出・出張講座などを実施	1:p6	「10代がえらぶ海外文学大賞」開催について
学会・研究会・団体		6:p338
日本電子出版協会(JEPA)が2024年「JEPA電子出版アワード」の結果を発表	2:p61	経済産業省「書店活性化プラン」を公表
児童図書館研究会『先輩の言葉に学ぼう! 児童図書館研究会の歴史をつなぐ』を刊行	4:p185-186	7:p405
文字・活字文化推進機構「2025年度読書バリアフリー体験セット」無料貸出し申込開始	5:p246	経済産業省「令和6年度アクセシブルな電子書籍等の拡大等に関する調査」の報告書等を公開
第25回図書館サポートフォーラム賞表彰決定・解散	6:p338	7:p405-406
「山好きの司書の交流山行Part3」開催	8:p457	文字・活字文化推進機構「読書バリアフリー体験セット」無料貸出し実施
学校図書館を考える全国連絡会, アピール「子どもの豊かな学びを実現するために, 今すぐに学校司書の配置を!」を公開	9:p561-562	7:p406
日書連「官公庁, 自治体, 公共・学校図書館の図書調達に関するお願い」を发出	10:p614	(一社)青少年読書推進機構, 第1回「10代がえらぶ海外文学大賞」ノミネート作品決定
SAPESI-Japan(南アフリカ初等教育支援の会), 「移動図書館車 全国募集プロジェクト」を開始	10:p615	8:p457-458
図書館員養成		東京・府中刑務所で図書の寄贈を希望
令和7年度司書および司書補の講習実施大学一覧	4:p188	8:p458
東京美術紙工協業組合が「一日製本職人」講座を開催	5:p246	第79回「読書週間」実施要領
著作権		9:p561
文化庁「著作権Q&A~教えてぶんちゃん~」の掲載を再開	7:p406	「10代がえらぶ海外文学大賞」受賞作発表
		12:p717
		人
		<訃報>中山司朗(なかやま しろう)氏
		7:p407
		本・ビデオ
		『竹内愨の言葉-もちより わけあう-』刊行
		1:p8
		三多摩図書館研究所, 『図書館研究三多摩 特別号2024 公立図書館を考える-新公共経営論を超えるために』を刊行
		2:p61-62
		『日本の図書館 統計と名簿 2024』お詫びと訂正
		4:p186
		オクタヴィア・レコードよりCDの寄贈の申し出
		8:p458-459
		『図書館年鑑 2025』出版
		9:p561
		阪神・淡路大震災
		兵庫県立図書館, 阪神・淡路大震災関連資料の寄贈を呼び掛け
		3:p122
		図書館の自由
		図書館の自由委員会『図書館の自由』126号(2025年2月)を発行
		5:p248
		図書館の自由に関する委員会「図書館における『防犯カメラ』の設置・運用について」を公表
		9:p561
		災害
		2024年度災害等により被災した図書館等への助成決定
		1:p6
		輪島市立図書館, 仮設図書館にて開館
		2:p61
		「図書館で考える南海トラフ地震への備え」を更新
		3:p121
		図書館災害対策委員会, 能登半島地震被災地における第3回図書館現地調査を実施
		7:p405
		災害等により被災した図書館等への助成(2025年度)について
		7:p406